滿蒙經濟事情

第六號

大正六年二月二十日發行

關東都督府民政部

內閣文庫
和書
五四九
函
冊
類
號
架

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一、本書は當部滿蒙に關する産業調査上蒐集する資料を考査し周知を便と認むるものを逐次印刷するものとす。

一、本書は滿蒙事情精通者に頒つ爲めに非らず未だ該地方を詳かにせざる母國人に汎く經濟事情を紹介し堅實なる起業の指針たらしむるにあり。

一、順序は特に産業交通等の區分を設けず速知を要する事項より記載し且つ他日合本に便せん爲め事項の異なる毎に紙を改む。

一、本書の記事は成るべく普及を計るため新聞雜誌其の他の刊行物に轉載せらるゝを望む。

一、本書の材料は民政部員の實地踏査に係るものを主とし他官衙、學校、會社等の調査書類を參酌す而して編纂に就ては囑託旭藤市郎之れに當る。

大正五年十月一日

關東都督府民政部

332
56649
60

滿蒙經濟事情 第六號

和五四九號

目次

大正五年北滿大豆作柄其他に就て……一
滿蒙産業及び邦人發展狀況視察旅行記……一五
掏鹿に於ける邦人發展狀況並有望なる事業……六七
一、滿洲の工業に就て……八五
一、滿洲に於ける正金銀行の特貸現況……一一五
一、烏丹城事情……一二五
一、東蒙甘草集散狀況……一六七
一、松花江下流沿岸の農産物……一八五
一、錦州に於ける通貨及び金融……一九三
一、奉天附近一帶に於ける日本人の農業……二一九
一、大正五年末に於ける滿洲各地の市況……二三一

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

目次

一、黑龍江省通信……二二九
一、はるびん近信……二三三
一、經棚近信……二三八
一、赤峰近信……二四〇
一、奉天に於ける銀行設立計畫……二四二
一、一月中の滿洲通貨相場……二四三

大正五年北滿大豆作柄其他に就て

一、作柄

大正五年は播種時より收穫時に至る迄天候雨量極めて順調なりし爲め農產物は粟に多少の見劣があつたやうだが其他は全部豐作で一昨々年と略ぼ同樣である、特に北滿の穀倉綏化(北林子)五井子方面は二十年來の出來榮で例年一晌地四五石のものが昨年は優に六石、小麥も五石を算せられたといふ。

各地大豆成育の狀況を見るに莖二尺以上四尺一莖に五十夾以上各夾三粒入二粒は少ない、昨年は天候甚だ良好で而かも結實前降霜の憂もなく一晌地東部、西部略ぼ五石、南部五石半見當である。

支那人は一昨年不作の爲め過當の收穫を豫想して居たやうだが先づ一昨年に比し三割、例年に比し一割三四分方增收と見れば大差なからう。

今大正三年及び同四年產大豆の數量を揭ぐれば

大正三年產

北滿全體の生産額　七三六、〇〇〇 噸

內

浦鹽エゲルセルド行	四〇八、七五〇
ニコライスク行	二一、八二五
長春以南行	九四、五〇〇
合計	五一五、五五七

大正四年產

北滿全體の生產額　五二八、〇〇〇

內

浦鹽エゲルセルド行（七月迄）	二五〇、八〇九
長春以南行（五月迄）	二三、八三七
油房消費（前年度に比し增加分）	四〇、〇〇〇
其後エゲルセルド及長春以南へ發送	四〇、〇〇〇
各驛在荷	一五、〇〇〇

合計　三六九、六四六

（豐收の時は亂費し不作の時は節費するが故に地方の消費高は平均生產額の三割と見るを至當とする）

作付反別の振合は餘り變動がない、安達、海倫兩縣方面は年々開墾地擴大されつゝあるから此の方面に幾分の作付反別に增加のあつたことは勿論である。

由是觀之大正五年度產大豆は約六十八萬噸にして大豆の儘或は豆粕となりて輸出さるべきものは約四十七、八萬噸見當なる事を知ることが出來やう。

小麥も同樣作柄良好にして南線方面一畝に付五石、東西線方面四石半見當の收穫である、品質も亦極めて良好にして昨年九月頃に於ける出廻は一二三乃至一三三ゾロトニック（一ゾロトニックは我約一夊一三八）に達した（露國では小麥の品質を檢定する爲め一定の容積を有する金屬製コップ形のものに小麥を容れ其重量の多少に依つて品質を定め重量の單位をゾロトニックと云ふて居る）此出廻りの分は鐵道沿線附近取入れ完全なる地方のものなるを以て北滿全體が斯の如く良好なるや否やは俄に斷ずることは出來ないが百二十一、二ゾロトニック見當で近來稀に見る豐作である。

其の他の雜穀も作柄品質共良好である。

南線方面　粟　一晌地　四—五石位　高粱　一晌地　六石位
東線方面　同　五—六石位　同　七石位
西線方面　同　五石位　同　六石位

一、出廻時期

毎年大豆の出廻りは十月初めより走物は出るが、出廻りらしき出廻りは十一月末卽ち結氷後である昨年は晴天續きの爲多少其時期を早めたやうである。

小麥の出廻りは例年と殆んど同一狀態である、當時出廻れる地方は雙城堡最も多く八月中旬より下旬迄約百車に達した石頭城子城內陶賴昭にも幾分あつたが微々云ふに足らない。

一、東淸鐵道輸送

千九百十四年卽ち戰前に於ける東淸鐵道有蓋貨車は總計五、六八四車（哈爾賓商業會議所一九一四年事業報告書參照）にして北滿大豆の大部分は之れを二月一日前後に運搬する事が出來たが、開戰後是等の貨車は全部軍用として使用せられ而かも歐露方面貨車の不足を補はん爲めに同鐵道の貨車を借り上げられたもの一昨年三月の報告に旣に其數二、六〇五輛に達し、其後漸次增加して昨年九月には其數三、六〇〇輛に及び殘餘の有蓋貨車は二、〇〇〇車此外無蓋車の大豆輸送に利用し得べきもの一、五〇〇輛を加へても總計三、五〇〇輛に過ぎない、之れを巧に運轉するも北滿三千萬布度の大豆は恐らく翌年六月を待たなければ完了することは至難であらう、而かも軍需品の輸送を急ぐ場合又浦鹽エゲルセルド倉庫の充滿せる場合は同地行大豆其他の穀物輸送を中止せなければならないから東淸鐵道の輸送は常に澁滯を免れない。

大正四年産大豆輸送狀況を見るに十月新豆以來昨年七月末迄浦鹽到著數は左表の如く二五〇、八〇九噸六に過ぎない。

東淸鐵道各驛より浦鹽エゲルセルド向發送大豆數量表（三井調）

驛名	數量	驛名	數量
窰門	一五、八六九・〇噸	老燒鍋	四、〇二三・八噸
陶賴昭	一一、〇八一・二	三叉河	一八、七七四・〇
雙城堡	一四、九三一・八	蔡家溝	二、九九三・六
五家	二、五七〇・六	哈爾賓	一、六七三・六
舊哈爾賓	一六、二〇九・〇	對青山	二〇、三二一・八
滿溝	一九、二二九・四	宋	二、二三六・〇

安達	四八、三〇六・五	阿什河	六、二二〇・六		
二屆店子	一六・〇	小嶺	五一八・〇		
嶺兒山	九二三・〇	烏吉密河	一四、六四九・八		
一面坡	三、八二八・二	海林	一、六六八・〇		
牡丹江	六、九八七・四	馬家河	七四五・〇		
哈河	三〇、九〇九・六	其他	六五・〇		
總計	二五〇、八〇九・六				

右發送人別

發送元	數量	發送元	數量	發送元	數量
ワッサード	八九、二〇八・四噸	三井	四一、八一〇・〇噸	東清	七、三〇四・八噸
クレマンスキー	六、二六六・〇	カバルキン	三、二五四・八	小寺	二、四四二・六
マンチュリアン	二、三〇九・六	リリング	四二〇・四	其他	九七、七九八・八
總計	二五〇、八〇九・六				

其後ワッサードが其手持を南滿に向け一、二萬噸積出せし爲八月末に至り各驛在荷は漸く片付いたが尙河川聯絡大豆三六〇車は空しく埠頭に放置され何時積出さるゝや全く不明である。

一、軍需品の輸送は從來より減少する事より增加の可能性が多い。

二、浦鹽エグルセルド滯荷は左記の如く益々增加し大豆輸送に大なる障害を與ふ。

との二理由と大豆豐作數量增加と相俟つて前年より一層困難である。

エグルセルド滯荷增加理由

(イ)戰爭中歐露の各工場は總て之れを軍需品製造に當てられた爲に輸入品激增し、一方獨逸方面よりの輸入は全然杜絕したるを以て勢ひ之れを日本及び亞米利加に仰がねばならない而して其輸入海口は浦鹽、ニコライフスク及び北海アルハンゲルスク三港のみで就中エグルセルドに陸揚さるゝ數量は頗る莫大なものである。

右輸入品運搬の爲めには、前述の貨車中軍需品$\frac{5}{16}$公衆貨物$\frac{4}{16}$東清鐵道用貨物$\frac{1}{16}$の割合に振當て東清線では四哩每に一回避線を造つて一日に十箇列車(內貨物列車七列車)を運轉し得べき設備をなし、ウスリー線は複線を利用しハバロフスクよりは黑龍江鐵道竝に黑龍江の水路を利用して極力其輸送に努めつゝあつたけれども尙ほ是等貨物は浦鹽に夥しく停滯し

て居る、聞く所に依れば此滯貨を輸送の爲歐露より特に二千貨車を送らるべしと云ふことであつた。

尙イルクツク及びスレーチンスクにも多量の堆貨ありといふを以て其一斑を知る事が出來やう。

(ロ)軍需品竝に公衆貨物は今後益々其數量を增加すべきに結氷期に入りてより黑龍江竝にアルハンゲルスクは之れを利用することが出來ないから是等貨物は悉く浦鹽に集中され滯貨增加の一方である。

昨年九月エゲルセルド倉庫充滿の故を以て同地向貨車は一車も配給しなかつた當時同倉庫の在荷は輸入品一三、〇〇〇、〇〇〇布度の外

ワツサード大豆	一八三七、〇〇〇布度	三井大豆	六八七、〇〇〇布度
カバルキン	一一六、〇〇〇	持參人渡穀物	一三三、〇〇〇
豆粕	二〇六、〇〇〇	豆油	二二、〇〇〇
燕麥	五、〇〇〇	小麻子	二、〇〇〇
丸太	五八、〇〇〇	製材	一一八、〇〇〇

麥粉　二、〇〇〇　合計　四、三八五、〇〇〇

ありてエゲルセルド倉庫は貨物包容力の殆んど極度に達した。

斯の如く浦鹽行大豆輸送は樂觀の材料少なく從つて大正五年度も前年同樣南滿行穀物は激增したやうの傾向がある。

一、取引狀況

大正四年度取引大波瀾の後を受け各商一律嚴重に警戒し危險を避けつゝあつた爲めに先物取引は著しく減退し支那商の投機心は擧げて取引所に移されたやうである、而して北滿大豆の大部分は現物竝に期近先物として取引せられ鐵道積大豆引換證券の賣買も亦輸送の不便に伴れて盛に行はれた今當時の各地取引狀況を見るに左の如く轉た北滿取引所界の變革を感ぜられた。

哈爾賓　大正四年七、八月には大豆先物取引盛に行はれ四〇哥より六〇哥にて約二、〇〇〇車の手合ありたるもの昨年は八〇哥より九五哥にて三井及び小寺の買付三〇〇車に足らず、支那人間も亦二〇〇車に過ぎない。

對靑山　大正四年同期三八哥より六〇哥にて約五〇〇車の取引ありたるもの本年皆無。

滿溝　大正四年同期前同値約八〇〇車に對し本年皆無。

安達　大正四年同期前同値約二、〇〇〇車に對し昨年一五〇車。

雙城堡は由來先物取引の行はれざる市場と稱せられたが大正四年の七、八月頃には四二哥より六〇哥にて三〇〇車の手合があつたけれども昨年は皆無である。

三叉河は反之取引の大部分は先物に依る市場で大正四年は四〇哥—六〇哥にて約一、〇〇〇車の取引があつたが昨年は三井の三〇〇車其他の一五〇車に過ぎなかつた。

陶賴昭も同樣の習慣で大正四年は同値にて約二五〇車の取引があつたが本年は六〇—九〇哥にて約一〇〇車ありしのみ。

烏吉密河　大正四年五〇—七五哥にて三〇〇車あつたが本年は皆無。

要之大豆先物取引は甚だ閑散で昨年に比し殆んど云ふに足らない。

小麥も同樣先物としては安達八〇—九〇哥三〇車、石頭城子八五—一一八哥三井五〇車、鐵嶺製粉八〇車に過ぎない反之現物取引は出廻に連れて行はれ其初に於て雙城堡にては既に一一〇—一一九哥にて鐵嶺製粉五〇、三井三〇、雙合盛三〇、間瀨二〇、湧勝公司三〇合計百六十車の手合あり。

一、取引所

穀物取引所は其利益莫大なると一方支那人の投機心を不安なく滿足せしむる上に於て北滿一般商人の人氣に投じ一の流行となつた哈爾賓の外雙城堡に小規模ながら殖邊銀行經營のものがあり呼蘭、綏化亦其計畫中であると。

一昨年迄は創業日尙淺く支那商の之れを利用するもの少く普通一般相場と關係なく取引行はれたるも近時は支那商大手筋輸出商等皆之れを利用するに至り端境等の場合を除き其相場は一般相場を支配する傾を生じ茲に之れを度外視することが出來ないやうになつた、是れ大正五年度に於ける新現象として數ふる事が出來得やう。

一、相場

相場の前途は豫測することは出來ないが(一)運賃の不便(二)豐作の爲め大豆數量が增して現物相場は大連向引合ひ下落の傾向がある。

一、農民の狀態

大正四年度不作にて農家の收入減退し一般金融に餘裕なきは事實である、然れども彼等は自己の生活及び收穫時に於ける必要の分は初めより準備するを例とするを以て金融急迫の

アジア経済資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

爲め收穫時機を遲延し又は小麥等出廻早きものを賣急ぐが如き事は比較的少ない、若しありとするもそは交通其他の事情により大局に影響を及ぼすが如き事は絶對にない。

一、商人一般の狀況

一昨年取引界大變動の爲め商買人間に大小善惡の淘汰十分に行はれ目下殘存せるは比較的手固きものゝみならず一昨年來の打擊に金錢の餘裕を失ひ總て隱忍警戒して積極的賣をなさず先物取引の微々振はざりしは全く之れが爲である、從つて昨年の取引は豐作と相俟つて比較的圓滑に行はれたやうだ。

一、外商の行動

北滿大豆界に覇を稱ふるワッサードは時機尙早の時より各驛並に奥產地に出張員を派し盛に活動するを例年の例とす。併し浦鹽大豆丁秣輸出禁止永續せば同店の受くる打擊大にして北滿大豆取引界に多少の影響を免れざるべし。

クレマンタスキー、カバルキンの大豆取引に於ける地位ワッサードの比ではない。

一、邦商の活動

三井は雙城堡、石頭城子、安達、對青山、五井子、烏吉密河等に出張員を派遣し買出に從事し間瀨洋行亦雙城堡及び窰門に出張員を派遣し小寺亦諸方に派遣員を置き盛に活動せりと。

大正五年は其前年以上に貨車拂底し大豆は夥多なりし爲め鐵道積大豆引換證劵は大豆の品質劣等斤量不足麻袋の粗惡等の危險多きに拘らず現物に比して一車百留內外の高値を稱へつゝある。

各驛にては在荷の多寡に比例して貨車を配給するを以てワッサード、三井は其大なる資本に依り大なる利益を擧げるであらう。

滿蒙產業及邦人發展狀況視察旅行記

客年十一月旭瑞託が北方の旅行より引續き踏査せる日誌を掲げて參考とする。

一、鄭家屯、白音他拉方面產業視察
　イ、四平街鄭家屯間
　ロ、鄭家屯の近況
　ハ、四鄭鐵道
　ニ、鄭家屯白音他拉間
　ホ、白音他拉の近況
二、白音他拉四平街間
三、四平街の近況
四、今昔の感
五、掏鹿視察
六、鐵嶺以南
七、錦州邦人の發展

一、鄭家屯、白音他拉方面產業視察

イ、四平街鄭家屯間

近頃屢々新聞や雜誌に四鄭鐵道又は四鄭線等の記事が見ゐるのは卽ち此兩地間を聯絡する線で先年我國が敷設權を得た所謂滿蒙五鐵道の一たる南滿鐵道の四平街驛から洮南に到る四洮鐵道の一部分である。

兩地間を聯絡する道路は明治四十年頃までは極めて寂寥で主要な交通線ではなかつた、當時伯都訥、鄭家屯方面のものは主として法庫門を經て新民屯に、長春、懷德、買賣街（梨樹縣所在地、元の奉化）方面のものは主として八面城、法庫門を經て新民屯に出で共に營口市場を中心として居つた、從つて此道路は頗る不良で四季共に馬賊の橫行絕ゑず甚だ不安を感じたものだが滿鐵の整備と共に地方客貨は逐漸最寄驛に吸收せられる樣になつて翌四十一年末頃からは買賣街は勿論八面城、鄭家屯方面の貨客も多く四平街驛を通過するに至り爾來年と共に頻繁を加へ以て今日に及んだのである。

兩地間の道路は大約二百支里で次の都邑を通過する平坦路である其狀況は以下述ぶる通り

地名	距離 支里	戶數	地名	距離 支里	戶數
四平街驛	—		富家屯	一八	五〇
四平街	一五	七一四	馬窩棚	二五	三〇
大泉眼	一〇	二〇	後大民屯	一五	八〇
泉眼溝	一〇	七	三江口	五	二五〇
朱家窩棚	一五	一〇	白廟子	二五	一五
八面城	一〇	一八〇〇	尙力泌	一五	二〇〇
鐘家大橋	二五	一〇	鄭家屯	一〇	四二〇〇
計	一九八	—			

十一月十八日午前四時長らく寢食を共にした岡村君に見送られ二名の騎馬巡警に前後を警衛せしめ日本兵一名と共に蒲鉾型の幌馬車に搖られながら四平街を出發した、市街通過の間は街燈の光りで毫も心付かなんだが街を離れてからは雲間に洩るゝ星明りに辛ふじて道路を認め得られる位なるが上に朔北の風は眞正面から吹き付け肌に針を刺す如く感ぜらるるに拘らずユヱ〳〵（右へ）オーオー（左へ）と三頭の驟子（馬に驢馬を配せる間の子）を恰も己が手足を動かす樣に自由自在に叱咤する馬夫の馭法は誠に巧みなものにて母國では到底見ることの出來ない圖である。

夏ならば容易に通過の出來ない低濕地も河川も悉く凍結して居る冬季滿蒙の旅は馬車の運

用上最も利便多く耕地、草原、路盤を選ばず捷路を經て馳走するが故に午前八時過ぎ早や八面城の市街に到著した。

此間は農村稠密に田園能く開け地味概ね良好であるが舊四平街（戸數大約百戸位市街を形成し數戸の商店あり）を除くの外大きな集團部落は見ない。

八面城は道光元年頃博王族の荒地を開いた處で昌圖の分縣卽ち縣佐衙門、博王の地局、巡警第三區、稅捐局、保衛團、郵便局、商務分會等があつて戸數一千八百十二戸人口一萬六百（巡警の調査に依る、市民は二萬と稱す）を有する南北十七、八町に達する道なりに長き市街である、元來當市は北滿各地より營口に通ずる主要なる交通路に當り近く十年前迄は車馬の來往頻繁を極めたるを以て街道六、七間の幅を有し瓦葺の大厦櫛比す、然れども鐵道の全通は多年の經濟線に一大革命を與へ又昔日の繁盛を見ざるも附近數十里に亙る物資集散地として今尙看過することの出來ない要點である。

此地の邦人は質屋七戸藥屋八戸料理屋二戸計十七戸四十三人で此外守備隊や、憲兵、警察官及び四鄭線工事に從事するものがある。

十時八面城を出發し砥の如き平坦路を西に走り午後一時富家屯を過ぎ四時三江口の對岸遼河の渡船場に到著した、遼河は一昨十六日迄は氷上を通過せる由なれど昨日からの烈しき南風に又々解氷して渡船を用ひねば渡られぬ狀態となつたと聞いた。

渡船は二隻あつて一回一隻に付車輛三、四臺（荷物積載の儘）輓馬十數頭人員十數名を渡す丈けの能力を有し舟夫一隻に四名宛渡河に從事し非常な努力をするけれども一往復に三十分乃至四十分を要するが上に時節柄往復の車輛夥しきを以て余等の著いた時既に五十餘臺の車輛が停滯して居つた、されば到著順にすると三時間も立往生をせねばならない譯合であるが巡警の權威で直ちに渡河することを得午後五時には三江口の守備隊に到著することが出來たが兩岸に待ち合して居た車輛の全部が渡河し終つたのは夜の九時過ぎであつた。

三江口は明治三十九年始めて通江口より上流遼河航運の開かれた後設立せし市街で同年八月頃までは僅かに市街の設計をなせるのみなりしが四十年には百戸許りとなり四十一年には二百戸の餘に達した、其後舟運の鄭家屯に通航するに至りしと及び水量比年減少して上航船舶僅少なるため大頓挫を來して十年後の今日依然二百五十戸人口千五百人內外に過ぎない、此地主なる官公衙は巡警局、稅捐分卡、運鹽局、商務分會等である。

此地の邦人は料理屋二戸、賣藥兼質屋三戸、質屋一戸、用達商一戸計八戸で二十人許りで

ある、此外に守備隊や憲兵及び四鄭線工事に從事のものがある。

十一月十九日午前四時三江口を出發し前日同樣曉の寒風を受けて西北に馳走し午前八時に鄭家屯に到達した。

ロ、鄭家屯の近況

鄭家屯は明治三十九年二月以來の馴染殊には同地邦人發展の草分として明治四十一年迄居住した關係上恰も故郷に歸つた樣な氣分がして懷舊の情に堪へぬものがある。

此地の詳細は他日に讓り其概況を次に記述しやう。

鄭家屯は西遼河の右岸にありて達賴罕王旗の未開放地に接し近來漸く邦人に知られた蒙古貿易市場で、主なる官公衙は洮遼鎭守使衙門（大正六年洮南に移轉し昌洮道尹衙門洮南より此地に移る）遼源縣衙門、荒務總局、巡警局、稅捐局、商務會、達賴罕王別莊、卓哩克圖王別莊である。

當市の人口は精確なる調査を缺ぐを以て種々に記せられる樣であるが接續せる村落の一部を加へ戶數大約四千二、三百人口三萬と見れば大差あらざるならん乎、大正二年巡警局の調査に依れば次の通りである。

	戶	人
商戶	四三五	八七〇〇
住家	二一四五	七三二二
計	二五八〇	一六〇二二

又同四年の調査は戶數三、三二一戶、人口一八、八一四人とあるも右は何れも家續きの部落（市街をなす）を除外せるものならんも實數よりは少き感がある、而して遼源縣管內の人口は支那人が十一萬八千五百二十二人で蒙古人が九百人計十一萬九千四百二十二人（四年調）ありといふ。

鄭家屯の經濟狀態を見るに附近各地の開拓に伴ひ當市は蒙古貿易市場より漸次農產市場と變化しつゝあることは次の出廻數量のみに就て見るも之れが推測を下すことが出來る。

品目	明治四十年	明治四十三年	大正二年	大正四年
高粱	七〇〇〇石	六〇〇〇石	二六〇〇〇石	二一〇〇〇石
粟	一〇〇〇	四〇〇〇	三〇〇〇	五〇〇〇
大豆	一〇〇〇	三九〇〇〇	八〇〇〇	八八〇〇〇
雜穀（玉蜀黍蕎麥稷等）	六〇〇〇	八七〇〇〇	八四〇〇〇	八五〇〇〇

麻實	五、〇〇〇石	五、〇〇〇石	三〇、〇〇〇石	二七、〇〇〇石
瓜子（水瓜實）	二、三〇〇	五、〇〇〇	二五、〇〇〇	二〇、〇〇〇

畜産及び其副産物に就て比較すれば

品目	明治四十年	明治四十三年	大正二年	大正四年
牛	二八、〇〇〇頭		二一、〇〇〇頭	一五、〇〇〇頭
馬	二五、〇〇〇		一六、〇〇〇	一〇、〇〇〇
羊	三〇、〇〇〇	略ぼ上の數に同じ	九六、〇〇〇	二〇、〇〇〇
豚	一〇、〇〇〇		一五、〇〇〇	一八、〇〇〇
各種獸皮	三〇、〇〇〇枚		一五、〇〇〇枚	一七、〇〇〇枚
羊毛	七〇、〇〇〇斤		六〇、〇〇〇斤	五〇、〇〇〇斤

畜産品の漸減は一面は蒙匪の亂に起因するも他面從來蒙古貿易の最前線たりしものが大正二年白音他拉の開放に依り次第に同地に移りつゝあることは疑ふの餘地がない、今後年を經るに從ひ當地は伯都訥、懐德、農安等と同じく純然たる農産市場たるべき運命を有するものと見て可なりであらう。

當地に於ける五百戸許りの大小商店が一箇年の取引高は大約六百萬元内外にして其金高より見れば畜産品を主とし穀物之れに亞ぎ雜貨類を第三位とすと。

輸入品の主なるものは綿布を第一として綿絲、砂糖（白赤黑）氷糖、燐寸、石油、洋蠟、紙、麥粉、棉、煙草、蓆子、陶器、鐵器類其他日用雜貨にして近來洋雜貨の賣行も漸次增進しつゝありといふ。

當地の工業は毫も進歩を見ざるも四鄭線の起工と共に新工業を起さんと企畫するもの支那人間に少なくない、現在に於ては舊式のものゝみにて其主なるは次の通りである。

燒酒	一戸	一箇年製造高	約五十萬斤	
油房	大豆七戸	同	搾油	三十八萬斤
	麻子十七戸	同	粕（大豆）（小豆）	二十二萬枚 二萬枚
毯	氈（毛氈、絨通ゼル作る）七戸	同	粕（麻實）（麻油）	百萬斤 四十六萬枚
鞋	鍋（天然曹達精製）六戸	同		一萬七千枚
皮鋪	八十餘戸	同		二十三萬五千塊（一塊五斤）

靴馬具類紐等製造

磨房（製粉業）　百四十戸　一箇年製粉高　一千餘萬斤
粉房（穀屋業）　四十三戸　同　製造高　五六十萬斤
房（素麺製造）

當地に於ける邦人の數は將に二百人を超過せんとする、其主なる職業は次の通り。

鄭家屯在留邦人職業別戸口表　大正五年十月調

職業	戸數	人口 男	人口 女	人口 計
官吏	七	一〇	三	一三
醫師	一	二	一	三
會社員	四	五	五	一〇
雜貨商	六	一四	四	一八
藥種商	七	一九	七	二六
質屋	一	一	一	一
賣藥商	一	二	一	三
金貸業	1	2		2
旅人宿	一	一	一	一
運送業	一	一	一	二
鐵工所	一	一	一	二
石炭商	一	三	一	四
米商	一	二	一	三
呉服商	二	三	一	四
菓子商	一	一	一	二
寫眞業	一	二	一	三
藝妓	1	六		六
酌婦	1	三	一	四
大工職	三	四	三	七
時計修理	一	二	一	三
魚類商	一	一	一	二
料理屋	1四	3六	2四	5〇
飲食店	一	二	一	三
豆腐商	一	三	一	四
無職	2三	2三	3三	5六
合計	4五一	7九二	9八〇	16一七三

備考　亞拉比亞數字は朝鮮人を示す。

質屋業は從來日步一圓に付一錢なりしが同業者の增加と共に組合規約樣のものを設け十一月より月一割とし流期は三箇月、二十圓以上は月六分乃至八分と改めた、土地抵當は三箇月乃至六箇月の期間にて月三分位なりと。

金貸業は八面城、三江口、鄭家屯共に將來尙有望である。

中村某新築の旅館は高く雲表に聳ゆると形容すれば仰々しきに過ぎるけれども洋風家屋の無い當市街の眞中に屹然と赤煉瓦の大厦が連つて當地の偉觀を添へる、されば無智なる蒙古人の如きは日人の偉大を賞揚し頓て鄭家屯は日本人のものになるなんど噂するものもあるさうな、邦人の工業としては川上久輔氏の煉瓦製造あるのみ。

漁業從事者は山田一郎氏にして臥虎屯西方湖水の漁業權を有する。

當地は將來曹達業、羊毛業、鑛詰業、甘草エキス等の工業其他土地に關する條約上の合辦事業及び大豆、高粱の青田買（耕地にあるものを買ふ先物買）等邦人の經營して有利なものが少なくないから四鄭線開通後は邦人の居住者は非常の數に達するであらう。

次に鄭家屯の邦人發展に就て記すれば當地に於ける日本人の居住は明治三十九年二月で旭東號と稱する雜貨店の出來たのが其嚆矢で之に續いて娘子軍、賣藥業等入込み一時二十四人に達したが四十二年の安奉線問題から頓に排日熱高上し悉く退去を迫られ唯旭東號一軒殘存せしが鐵嶺商品陳列館の經營に移りし後は名を正泰號と改め支那人をして經營せしむることゝなり日本人の居住は一切許可せなんだ、越ねて明治四十五年三月川上久輔氏入鄭し同年十月シンガーミシンの守田氏來りしを始とし爾來漸を以て增加し大正三年夏には百を超ゆるに至りしかば地方官嚴重に退去を勵行せんと迫る折柄偶々八面城事件の突發するあつて鄭家屯に我守備兵の駐屯するに至り尋で四鄭線の起工問題となり近く又鄭家屯問題の發生せる爲め退去命令は何時となく消滅するに至つた沿革は如斯も今や奉天總領事分館を當地に開設（大正五年十月十六日）せらるゝに至りしを以て今後は賢明なる日支官憲の保護下に邦人は圓滿なる發達を遂げ兩國民親善の實を擧げ永く幸福に浴することが出來ることゝ信ずる

八、四鄭鐵道

近頃起工せられた四鄭線は四平街驛から分岐して舊四平街、八面城、富家屯、三江口の各地を經て鄭家屯に達するものであるが其間の距離は大約次の通り。

自四平街驛至八面城	十七哩
自八面城至三江口	二十哩
自三江口至鄭家屯	十七哩
計	五十四哩

橋梁は大小五、六箇所あるけれども稍大なるものは三江口上流遼河の架橋であらう、架橋地點は不明なるも日露戰役當時露軍は三江口の上流三百間位の地點を選んで軍橋を架設したことがあつて適當な地點らしいから矢張り四鄭線の鐵橋も此邊であらうと想像が出來る工事は菅原組、大倉組、飯塚組等邦商の請負に係り各所で其事務所を見たが、大正六年中に遼河迄達し同七年に鄭家屯に全通すると云ふ。

停車場を設ける地點は左の各地らしい。

八面城　富家屯　三江口　鄭家屯

建築材料の主なるものは次の如しと聞く。

バラス（南滿線より）

枕　木（吉林材）

軌　鐵（漢陽鐵工廠製）

二、鄭家屯白音他拉間

兩地の間は西遼河の河干に沿ふ平坦地で際涯なき一眸千里の大平原である、通過せる主なる村落は次の通り。

地名	距離	戸數	摘要
鄭家屯	支里	戸	
白市	二〇	一	
モーホトガ	一五	二〇〇	
二爺府	一〇	七	冬季は此地から捷路ありて五支里近く且つ道路良し
モルホシヨ	一五	四〇	
シャプタイ	二〇	五	
馬甸堡	一五	二〇	
潘家店	一五	五〇	
前大窰	一五	五〇	
大林營子	一五	三〇	
枕頭窩	一五	四〇	
趙胡窩	一〇	四〇	
錢家窩	三五	六〇	市街の形をなす
孔家窩	二五	八〇	
白音他拉	二五	一〇〇〇	
計	二五〇	一	

十一月二十日午前六時鄭家屯出發吳大崗（二〇〇月）下石臺（六月）を過ぎて沙蛇子（鄭家屯の西方より遼河の南を蜿蜒する沙漠あり此沙蛇子は其沙漠の一端なり）を越ゑて白市に著いて蒙古店（モンゴルカヌ）（蒙古人の營む宿屋）で朝食兼晝食をすませ十一時出發兩家子を過ぎモーホトガに達し捷路を取らうと思ひしも河氷薄くて渡ることが出來ない。

此河は從前此地點から十餘支里の北方を流れて居つたのであるが大正二年白音他拉一帶の土地が漢人に拂下られた以來往來の漢人多く不要心なるがため溫都魯（ウンドロ）王が自家防衛の必要

上堰き止め水流を變へたのだと聞く、此地方は一帶に沙質地であるから斯る作業は至つて造作のないもので從前は此地點にタクチモ河と稱する小溝があつたが今は其影もなく西遼河と合して居る、そこで餘儀なく沙蛇子の中を西進しプヘンホーチンと稱する村迄河に沿ふて迂回した。

本街道を進むのが順であるが余は明治三十九年頃から親しく交際した達賴罕旗の臺吉（王の一族）包德玉なるものを訪れんため迂回して梅倫營子の渡河點を涉りて午後四時三十分ウンドルベーなる包家に到著した鄭家屯から九十支里（我十五里）である。

包家には大正三年に宿泊してから丁度二箇年半振りであるから一族（六戶）寄り集つて蒙古式の馳走を作り鄭重に優待をせられ夜もすがら別後の話を問ひつ語りつした、人情は何國も變りのないものながら質朴なる蒙古人の交情は又格別に眞深なものがある。

十一月二十一日早朝出發の豫定であつたが中々に手のかゝる馳走振りにてとう〳〵八時三十分に別を告げたが同人は余が先途を案じて其長男に騎馬で隨行する樣に命じた一行は更に一人を增して西進し船口で遼河を南に渡り潛家店を過ぎ午後五時趙胡營子に著いた此日の行程大約八十支里。

十一月二十二日午前五時出發同八時錢家窩棚の錢家店で朝食をした、丁度此家に張督派遣の荒務土地丈量局の耿某の一班が宿泊して居つた。

耿氏は日露戰役に我軍の通譯として從軍したこともあり東京にも遊んだことのある人で一見舊知の如く頗る歡迎して便宜を與へてくれた。

同氏の談に依ると久しく問題となつて居つた達賴罕王及び達賚公の土地拂下は從前丈量したことがあつたが其係員は徒らに私利を計り作業進捗せぬ許りか國家の收金甚だ少きが爲め張督軍更めて十二班（一班十二、三人）の測量員を派し目下測量中に屬し其河南は既に結了し今後河北に移らんとする所で拂下地の總面積は孔家窩棚から前大罕にかけて河を挾んで三千五百方地（一方地は四十五晌地我約三十三町二反三畝歩なる故總面積は我十一萬三千五百五町歩）にして土地の等級を左の三等に分つといふ。

	一晌地	一方地	一方地の手數料其他	拂下價格
上地	一二圓	五四〇圓	一六〇圓	七〇〇圓
中地	九	四〇五	九五	五〇〇
下地	六	二七〇	三〇	三〇〇

（一兩は時價に依り不同あるも今は銀一元七角金一圓六十錢位）

なりと。上中下の割合は上三、中四、下三位で下地は水害を被り易き地又は沙質多き地なり然れども之れを洮南附近に比ぶれば此地方の下地は該地の上地に相當し又奉天附近に比べると此地の上地は該地の中以下に下る云々。

昨日から今日にかけて途上牛群を鄭家屯方面に送るもの丁度八組（一組は百二、三十位）に逢遇した之れは露國人の買收するもので先般から一萬五千頭の大買占に從事して居るとのことである。

彼是話して居る間に大部時間も經過したから耿氏と再會を約して十一時出發し孔家窩棚を經て午後三時白音他拉の日光洋行に著いた。

ホ、白音他拉（バインタラ）の近況

日光洋行は添田澤三氏の經營する所で五年七月に開店し甘草の買付（七月以來二萬五千斤）に從事して居る、添田氏は當部の囑託を受け大正四年以來東蒙各地の產業調査に從事せられたが赤峰方面以外世人の注意して居ない甘草が當地方面にも多量に存在することに著眼し斷然之れに身を投じ昨五年七月經驗もなく言語も知らぬ元氣旺逸なる令弟春雄（二十五歳）早川光一（二十五歳）及び阿部衡平（二十六歳）の三名を伴ひ來白しまだ此方面の支蒙人の甘草は如何なる所にあるべきかも知らざる者に掘出方を指導し傍ら我商品を紹介せんと企て苦心慘憺して地盤を築きつゝある而して右三人は克己努力して余が視察の際は既に日常の言語も通じ地方支蒙人の信用を得るやうになつたのみならず甘草は附近一帶に多量に存在するを以て資本だに十分ならば一箇年百萬斤位の出廻は敢て困難でないと話して居つた、同氏はボルト及びオルバコの二箇所に蒙人と合辦の支店を出し所謂物々交換の方法に依り盛に斯業發展を計らんため奔走中であるが前途頼母しき青年商店として余は誠心敬服したと共に我內地に徒食する有爲の青年が氏の此企の如く著々滿蒙の廣い天地に入りて有望なる事業に著手し自己前途の幸福を計ると共に邦家百年の長計に資せんことを切に勸むるものである。

此地方にも獨り甘草のみならず牧畜、農業を初め羊毛、獸皮の買出、杏實の搾油、曹達の採取其他有望な事業は澤山にある。

大正三年余が當地に來たときは邦人は一人も居なかつたが今は二十名に達し其職業別は雜貨商一、醫院一、質屋一、賣藥商六、料理店一、計九戸である。

醫院は滿鐵の經營する所で博愛醫院と稱し太田勤氏が本年十月一日から開いたのである。

十一月二十三日滯在白音他拉の邦人及び張管代(大隊長)巡警局商務會等を訪問し此夜は張管代劉副官慶源湧燒鍋主公凌雲氏等と日光洋行内に小宴を張り交情を暖めた。

白音他拉の事情も他日詳細を紹介するから茲には近況の二、三を記することにする。

此地方は大正元年開放せる卓哩克圖王府の拂下地(二千五百方地)にして大正二年から開墾を始めし位にて同三年七月余等通過の際は當市は未だ建築中に屬し東大街(七十戸位)西大街(五十戸位)の二つが五支里を隔て別々に發達しつゝあつたが二年半經過せる今日は全然面目を一新し以前の東大街は百戸許のものが空屋多く商況不振の狀なるに引替へ西大街は戸數八百五十人口八千と稱せらるゝ實に異數の發展である。

當地に置縣の說あるも未だ實現に至らず大正三年遼源縣の一鎭として通遼鎭を置いたに過ぎぬ。

此地の人口は巡警局長の話に依ると九千と稱し商務會及び市民は一萬餘と稱し甚しきは二萬と稱するものすらあるけれども東西兩街を合して戸數九百五十人口一萬と見れば大差あらざるべき乎、新開のことゝて戸數の割合よりは人口多く且つ出入增減常なく官憲すら其詳細を知悉する能はざる狀態である。

舊西大街卽ち今の白音他拉市街は東西大街三條南北二條より成り長方形(東西十八町南北十二町位)の土壘を以て圍み東西南北の四門を有する。

商戸は五百と稱し主として東西兩門に通ずる大街に集中し最前線の蒙古貿易市場として鄭家屯舊來の繁榮を奪ひ非常な雜沓を極む從つて當市商人の十中七、八割は鄭家屯商店の支店で取引關係も直接奉天、營口等に有するものが皆無とは斷じ難きも殆んど鄭家屯市況に左右せられて居る次に當地商店の主なるものを揭ぐれば左の通り。

遼源通遼鎭商家(出票は私帖を發行するを云ふ小街基は元の東大街なり)

中街

德源興　隆慶公　福源順　慶源大
福興恒(出票)　三義合　寶隆興(出票)　三盛合
福豐厚　恒義盛(出票)　茂林祥　元增厚(出票)
源聚東(出票)　德慶會　廣盛長　天合永
義記　同玉和　連盛長(出票)　德升慶

順興當（出票）　太古源（燒鍋出票）　福合成　福順公
隆興裕（出票）　永興源　阜丰東　福盛和（出票）
福聚長　德慶公（出票）　謙恒義

小街基

鼎和興　天慶東（燒鍋出票）　豐源慶（出票）　永興隆
祥發太（出票）　永盛隆（出票）　福順成（出票）　合興隆（出票）
德順成（出票）　茂盛興（出票）　德和永（出票）　萬議當
順盛明　興記　興元盛（出票）　裕勝當（出票）
福德成（出票）

北街

慶源湧（燒鍋出票）　義和永（出票）　長興泰　東泰興（出票）
同源興　元興盛

如斯急速の發達を來せるは開放地の地味良好なるは勿論蒙古人は多くの漢人部落を過ぎて遠方の市街に用を辨せんよりは價格の高低に拘らず近き市街に集中するを以ての故である

從つて當市の將來はまだ〳〵發達の見込あるものと推定が出來る視察當時當地の主なる物價は次の如し。

白音他拉穀物物價表（小洋錢建）　德和永

品目	價格（一斗に付）	品目	價格（一斗に付）
高粱（蜀黍）	元四九〇—	吉豆（大豆）	元一・二〇—
谷子（粟）	三八〇—	江豆（豌豆）	一・一四〇—
糜子（同）	六一〇—	小豆	一・二八〇—
莜麥（燕麥）	五八〇—	瓜子（西瓜の種）	二・二二〇—
大麻子（麻實）	七六〇	合豆（黑豆）	七九〇—
小麻子（同）	一・三六〇—	芝麻（胡麻）	一・〇〇〇
包米（玉蜀黍）	一・八二〇	小麥	二・二七〇—
	八八〇—		二・〇〇〇—
	九七〇		二・四二〇
	四四〇—		
	五八〇		

然れども當市發達上偉大なる障碍は大正五年に連發した即ち(一)三月(陰曆以下同じ)大洪水ありて市街の全部は浸水し中央大街及び南街は一尺内外北街の如きは三尺に達したり(二)六

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

月に大旱魃來り五穀旱枯して粟、高粱一斗の代價實に二元五十仙乃至二元八十仙（平常は高き時も一元以下）に達し四民飢餓に瀕し年末に於て尙ほ穀物の價格鄭家屯より遙かに高率なるが如き反對の現象を呈せり（三）八月蒙匪襲來の噂に依り俄かに塹壕を掘り城壁を作る等不景氣の間から一萬元内外の費を投じ商民之れを負擔せり（四）九月蒙匪討伐に向ひし第二十七師の兵千餘名當地に來り約三十日間も駐屯して市民に軍餉を强要し亂暴到らざるなく之れが爲め市民の被りし損害莫大にして蒙匪の襲來を被らざりしと云ふ丈にて損害に於てその襲來と擇ぶなしと。

以上四大災難は當市發展上多大の障害なるは言ふ迄もないが此間自然に一種の迷信より來る浮説が傳つて更に發展の前途を撓めんとするものがある、何ぞや他でもないが白音他拉開設前北方五、六町の所に小丘ありて丘上に喇嘛の建てたる一つの鄂博（オボ）（蒙古には處々に鄂博あり境界を表するものと信念に基くものと二種あれども何れも佛像經典を裡に藏し蒙古人は痛く之を信仰崇拜す恰も我が辻地藏の如きものなり）あり治水の爲め建てられたるものと言ひ傳へらる、然るを漢人の此地に移住するや之を毀ちしを以て佛爺怒て此天災を與ふるものと云ふ一事である、此説は早く傳りしを以て四月新たに同丘上に鄂博を修築し喇嘛を請じて讀經し芝居を獻じて祝福を祈りしが災害相續て到り今尙ほ迷信止まずと云ふ。

（附記）　白音他拉は新開の地なるを以てまだ多く世人に知られないから日誌外ではあるが滿日（新聞）に掲げた大塚氏（滿鐵慰問主任）の談を參考として玆に轉記する（記事中の數字の如きは概ね信を措き難し）。

白音太來は大正二年度擴下げられたる土地にして當時支那人僅かに四、五十戸に過ぎざりしが其後急激に增加し大正五年には人口一萬二千餘に達する盛況にして白音太來とは之れを譯せば善良なる畑と云ふ意味なる由なれば名の知く同地附近は農作に適し白音太來に集まる物資は年額六千萬圓にも達すべしと傳へらる、されば支那人の移住頗る盛にして東蒙全體の蒙人が六十萬と稱せらるゝに比し支那人は約十萬に達し實に支那人種は蒙古人種を壓迫して益々四方に驅逐しつゝある顯著なる事實を認め得るものなり、將來蒙古人は遠く外蒙に迫ほれ東蒙は全部支那人種の移住發展する所となるべきは想像に難からず邦人の白音太來に居住せるもの約二十餘名あり何れも藥種商、雜貨商、質商、金貸業等を營みつゝあるが中には成功せるものありて三年前三百圓の資本を以て同地に來住し支那人に對する金貸業を營み三年後の今日七千餘圓の資産となり利子のみにても七百餘圓の收入あるの身分となりたるものもあり云々。

終にバインタラの意義を述べて參考としやう、バインタラとは蒙古語で其意「バイン」は「富める」・タラは「平地」で換言すれば肥沃なる耕地に相當するが、支那人は蒙古語の發音正鵠を得ざるもの多く加之同音であれば異つた漢字を地名に當て欲め平氣で濟すことが滿蒙には少なくないが、當地の如きも蒙音バインタラなる語音を人に依り種々に書かれ次の樣な

全く別の地名かと思ふことがある、注意を要することであらう。

叭白	巴八
印音	音音
達他	大他
來拉	來拉

二、白音他拉四平街間

兩地間は白音他拉ソンドルベイ間を往路と異なる途をとりたる丈にて其他は既述のものと同一路を通過したゝ今其距離を示せば次の通り。（振假名は漢音を用ひたもの）

地名	距離	戸數
白音他拉	一里	一〇〇戸
九家子	一五	二〇
ソンドルベイ	二〇	三〇
ツチヨルボコ	一〇	一〇
ルユル營子	一五	二〇
營子	一〇	三〇
ネムタイ	一〇	二〇
バイタラ	一〇	一〇
ホロハイ廟	二五	一〇〇
トルフクル	一〇	一五
アブクネラ	一〇	一五
ホルケン廟	二〇	四〇
莊頭屯	七	三〇
四家子	八	九
四平街	八	八
鄭家屯	九〇	四二〇〇
四平街	二〇〇	一

計

十一月二十四日午前七時日光洋行を辭して白音他拉の北門を出で市民迷信の鄂博を西側に眺め、小丘下を北進し約五里で西遼河を渡つた、下流では多量の水量なるに此處では全く涸れて沙濱になつて居る、顧ふに三月の洪水に河床を變じて南方を流れるものであらうが何處から變河せるかを確める閑はなかつた。

渡河後約十里で九家子を過ぎ方向を東に轉じて午前九時より營子に著いた、未だ晝食には早いが此地に丈量班が五班程あつて其中に王翰臣といふ十年前の友人が居ることを聞いたから訪ねたが達賴罕王府に行つた留守で逢へなかつた、丈量班員に種々土地開放に就て尋ねたけれども耿氏に聞いた所と符節を合するから略する、要するに此附近から前大罕迄河南と同樣開放せられるといふことで河南よりは河北の方が概して土地が不良の所が多いといふに過ぎぬ。

十一時マリ營子(ノヒラ)を出發東行砥の如き平坦道を馳驅して午後四時白音他拉と同名異地のバインタラに著いて李功と稱する八戸人(パホレヌ)の家に泊つた。

八戸といふのは昔時清皇室が蒙古懷柔のため其公主(皇女)を蒙古王公に降嫁せしめるに際し公主に滿漢と全く異つた不自由な蒙古の邊僻に於て多少にても慰安を得せしめん爲め御側使は勿論大工左官農家等各種のものを附隨せしめたもので、此數は或は三十戸或は五十戸、百戸と其時に依り數は異るも兎に角公主一代に仕へ其死後は其陵を守護せるものなりと李功は詳しく說明した、而して日露戰役頃迄彼等は小劄子附近に住んで居たのが達賴罕王から土地を貰ふて十年許り前に此地に移住せりと云ふ從つて飯々進上(メシ〳〵シンジヨウ)とか歸ろ〳〵とか二、三の日本語を知つて居つた。

今日通過した所は十年前とは全く見違へる程土地が開墾せられ人家も稠密となり耕地も非常に多くなつた。

此夜は李功の四方山の話で夜を更かしたが彼は日本人と合辦にて土地開墾を希望することを繰返して話して居つた。

十一月二十五日午前四時出發、星明りに涸れた小川を渡り西遼河の河干から離れて高地を東北進して夜明けにホロハイ廟に達し休憩した、ホロハイ廟には喇嘛僧約三百人許りあるが丁度讀經中でほの暗い大伽藍の中で太鼓を打ち一間もある長い喇叭樣のものをブー〳〵と吹き鳴し百餘の大小僧が勤行する樣は如何にも殊勝に見受られた、蒙古の寺は本堂を中

心にして周圍に幾多の僧房を建造し恰も市街の形をして居て本堂以外に副寺樣のもある、僧侶は圓髏で法衣、袈裟を纏ふこと我僧と異らぬ彼等は一生無妻で寺院に暮らす規定になつて居るが實際は種々なのがある、僧侶は徒弟的に教育せられ十二、三歳にて出家し一切其親家から食料等の仕送をなすので從前は一家の嗣子を除く外の男子は悉く喇嘛となる習慣であつたが今は廢れて居るらしい、併し一人出家すると九族浮ぶといつた樣な信仰は今尙ほ盛で現今に於ても每戸大抵一、二人の喇嘛を出さぬことはない、喇嘛の階級は活佛以下大喇嘛、管事喇嘛其他諸種の名稱があつて其社會に對する信用も厚く軍事行政以外社會全般の事皆關係せぬものがない、されば蒙古に於ては從來產業方面に牧畜、社會方面に喇嘛此二つを研究すれば全般の事柄が皆判るといふ程のもので之れに關する事を記すれば幾何でもあるが餘り冗長に涉るから他日に讓りて擱筆する。

余が護衛に任ずるものは支那兵二名であるが蒙古人は之れを蛇蝎の如くに厭ひ且つ恐れる從つて彼等に對しては有るものも無いと稱して出さないが、邦人には頗る厚意を有し至る所で歡迎し所有便宜を計つて與れるのみか日本人に便りたい氣風が一般に見透される、蓋し氣風の似通ふ點言語の發音が同じき等蒙古人と邦人間には先天的に離れ難い關係がある樣にも思はれる。

午前七時ホロハイ廟を發し十一時莊頭屯に著いて晝食した。

往路及び昨日迄通過した地區は農業適地で今日通過した過半は牧場適地である、從つて昨日迄は十頭か十五頭の牛馬群を稀に見たに過ぎなかつたが今日通過した所には五十頭百頭位の馬群又は牛群、羊群等が三、四箇所に見受けられた、十年前此附近を旅行した頃とは大部牧畜數が少くなつた感じはするが兎に角古趣味が朧げながらも味はれる、此牧畜の減少するのは漢人の畜盜が主な原因ではあるが、時勢の推移上牧畜時代から漸次農耕時代に變りつゝあることも其半面に窺はれる、蒙古人は漢人の漸進に伴れ生存競爭に耐へずして興安嶺に向つて西北に退きつゝあるから頓て數十年後には此一帶の地には蒙人の影を沒する時代が來るかも知れぬ。

午後一時に出發して午後六時日暮れてからウンドルベイの包家に著いた。

十一月二十六日包德玉及び其弟の二人を伴ひ午前九時出發し途中休憩することなく一直線に鄭家屯に急ぎ午後の四時についた。

十一月二十七日は鄭家屯に滯在して包氏に日本の新築旅館を見せたり、日本料理の馳走し

たり、或は日本人發展の狀況を見せ、領事館に伴ふて紹介する等の勞をとつた、彼等は非常に滿足して十二時出發歸途に就いた。

十一月二十八日午前三時半出發八時半三江口著此地から內藤鄭家屯駐屯隊長の鐵嶺行と同道して十時同地を出發した、此日は遼河結氷して氷上の通過が出來た、一行は道を急いで午後三時半八面城著一泊。

十一月二十九日午前六時出發十時四平街に到著した、十八日當地出發以來十二日間行程一千餘支里(我百六十餘里)一日平均十三邦里餘で駈步旅行の一つであらう。

三、四平街近況

余が明治三十九年末當地通過の際は誠に寂寥たるもので露國の遺物たる鐵道附屬家屋の外には僅かに臨時小屋樣の家屋數戸ありしに過ぎないが爾來鐵道の貨物吸集政策は買賣街、八面城方面の貨客を引き異常の發展を遂げ十月末の現在に依れば實に次の通りである。

日本人(軍隊を除く)	二七三戸	五一八人
朝鮮人	二	一
支那人	七一四	五三三二
計	九八九	五八六一

當地は大市街と稱する迄には行かないが其街衢の整頓家屋の構造市街の商況共に有望な前途を有することを語るもので殊に四鄭線の起工は當市に多大の活氣を添へ益々繁華を加へつゝある。

四鄭線の延長は僅かに五十四哩甚だ長からざるにせよ東蒙開拓の基礎線で此鐵道に依つて將來當市の受る利益は蓋し鮮少でないことが推察せられる。

東蒙古の鄭家屯商流圈內は工業原料に富むも燃料に乏しく水質過硬にして白音他拉、鄭家屯共に工業地として缺くる所が少なくない四鄭線開通後當地迄送致して加工せば更に一層利便とするものあらん、有識の士は該線開通後否該線が更に延長後に於ける當地の價値を考査して蒙古啓發の根據地とせば機先の效大なるものあらん乎。

將來に於ける四平街は單に滿鐵の一通過驛にあらざることは勿論にして鐵道當局の執るべき政策如何に依り蒙古鐵道の延長に伴ふ當地の發展は看過する能はざるものがあらう。

翻つて今日四鄭線布設の好機に達したのは慶して賀すべきことで日支人共に其享受する福

利は偉大なものである、然り而して其今日あるは悉く先輩多年の苦心と十數萬犧牲の賜物であることを忘却してはならぬ、それかあらぬか當時四平街では次の樣の俗謠が流行して居るのは兎に角殊勝なことに感じた。

四鄭線、滿鐵經營のあの鐵道は、蒙古啓發第一歩、之れも先輩苦心の御蔭、忘るな十餘萬の戰死者を。

四、今昔の感

曾つて滿洲の野雲亂れて砲煙散ぜず彈雨未だ歇まざるの時に、いち夙く戰後經營に著眼し或は利源調査委員の派遣に或は試驗農園の施設に其他港灣、交通、市街等の設計は云ふも更、貿易の促進、工業の企圖さては新聞の經營、學校の創立等に至るまで兵馬倥偬の間日に夜をついで之れが任に當つた軍衙ば今の關東都督府の前身遼東兵站監部であつたことは知る人ぞ知るのである、當時の兵站監井口將軍を輔けて軍政を施行せるは高山、齋藤、與倉各將軍を始め其他各所の軍政官なりしことは申すまでもないが直接帷幄にあつて謀を囘らし專ら策を獻じたのは西川將軍、辻村主計總監等の人々であつたことも亦知る人ぞ知る所であらう、噫囘顧すれば最早十餘年の昔話となつた、各將軍の鬢髮霜を交ふる亦自然の數であるまいか、爾來此萌芽は歷代の當局者に依りベストを盡され今や在滿邦人十一萬に垂んとし貿易額其他邦人の經營は戰役直後の數十百倍に達し殊に工業の勃興は一新紀元を劃せんとするのみならず蒙古啓發の四鄭線亦今明年に全通せん好況を呈して居る。

戰後經營に對する企劃は獨り右に止まらず其當時邦人の夢想だもせなんだ北滿の富源、東蒙の沃野を踏査し他日の發展に資せんことを案出し適材を拔いて之れに當らしめ明治四十一年には東部蒙古誌(菊版三冊二千五百頁位)を、同四十四年には滿洲一般誌、滿洲地方誌、滿洲接壤地方誌(十四冊一萬二千頁位)を印刷し汎く天下の有志に頒つて滿蒙の事情を紹介し爾來今日に至るまで幾多の印刷物を刊行頒布して陰に陽に滿蒙啓發に努力せられたことは是亦人の認むる所である。

余亦不肖の身を以て滿蒙調査員に加へられ百萬の將士が名譽を擔ふて凱旋の途に上りつゝある明治三十九年の二月初旬奉天城で仕度を整へ、同月の八日零下三十餘度に降る雪積む寒夜に無蓋の軍用列車に乘り九日の未明に昌圖の街に著いていきなり牢獄の憂目を見たこともあつた。

其頃はまだ我鐵道は昌圖が終點で、四平街、八面城の線には敵軍の前哨線があり軍人軍屬以外は鐵嶺以北に旅行することは許されて居なかつたが余は十三人の一行と共に巧に敵の前哨線を脱進して二月中旬に鄭家屯市街に著いて兎に角邦人草分の根據地を定めた、此市街は其頃まだ邦人には知られて居らなかつた許りか地圖にも記入せられて居ないが當時の人口二萬五千（接續村落を含む）許あつて支那人の蒙古貿易市場として可なり賑つて居た、さればそれから先きの蒙古地帶に何があるか勿論判らう筈はない、鄭家屯は有名な彼のミスチェンコ將軍が率ゐた露國騎兵の大集團が陣取つた處であつたが余等の著いた時は恰も退陣した許りで幸に足を停むることが出來たのである。

余が本來の任務は尚ほ北滿深く入るべきであつたが到底目的の遂行困難なのと平和克復後危險を冒す丈けの必要もなかつたから方向を轉じて達賴罕王府から莫爾廟、白音他拉、溫都爾貝などを經て一先づ蒙古調査の見當を附けて歸府し更に準備を改めて入蒙する順序を取つたが今日から考へると馬鹿々々しい程非常な艱苦と闘ひ幾多の辛酸を嘗めて任務を遂行したのであつた。

今回の旅行に現今の發展を見て無量の感慨にうたれ昔日と比較して何とも謂へぬ快感を覺わたと云ふのは初めは前記の通りで勿論四平街から入蒙が出來なかつたから何日も昌圖から不便な交通路を辿り、三十九年末頃から四平街、八面城の線を通過したけれども未だ支那商貨物輸送路は新民屯、營口中心になつて居て此線を來往するもの甚だ少く從つて四鄭間は馬賊の横行絶ゐず仕入品を此線から引くのは余等の營む旭東號商店許りで甚だ不安なものであつた、それが段々沿線も開け交通も便利になり日本人も増加したが明治四十二年頃から排日熱で邦人の退去を强制せられ大正三年頃までは悲慘な狀態であつた。

然るに例の八面城事件で同年八月から俄かに此沿線に軍隊が駐屯する樣になり退去命令も何時しか消ゐて邦人は大威張に居住營業することが出來又四鄭鐵道が愈々敷設せらるゝことになつたので益々繁昌を極むるに至り現今では大約次の樣に増加した。

四平街（軍隊を除く以下同じ）	五三〇人	支那人	五、五〇〇人
八面城	四三 同		一五、〇〇〇
三江口	一六 同		一、五〇〇
鄭家屯	二〇〇 同		三〇、〇〇〇
白音他拉	二〇 同		一〇、〇〇〇

開魯	三人　支那人	一二〇〇人

右の内明治三十九年末に邦人が居つたのは四平街に鐵道從事員の外數戸の營業者と鄭家屯に二十人あつた許りで三江口の如きは全くの寒村であつたのが川船が上航する樣になつてから俄に市街の形をなしたのである、又開魯は同四十二年、白音他拉に至つては大正二年に開放せられたのである。

鄭家屯から西方には耕地らしい耕地を見ることが出來なかつたのが今では殆んど開魯に至るまで耕地が斷續的ながら開墾せられ人口も非常に稠密になつて經濟的價値を增し邦人の發展上にも有利になつて來た。

殊に從來見ることの出來なかつた日の丸國旗は八面城、曲家店、三江口、鄭家屯に於て飜飜たるのみか各地とも我軍隊の威風堂々たるものがあつて市街の所々嚴しき帝國の武裝した歩哨を見るに至つては心强からざるを得ない況して鄭家屯には奉天の領事分館が置かれ八面城にも警察官吏派出所があつて邦人の保護上何等の不安がなくなつた、如斯狀態を見て今昔の感に堪へず重複を厭はず、既往と現在を對比紹介することゝした讀者之れを諒せよ。

五、掏鹿視察

十一月三十日民政部から來合せた小山屬員と共に四平街を發し開原に至り同地の用務を了り掏鹿視察の準備をした。

開原驛より掏鹿までは百四十支里(二十三里)で其通過路の主なる村落は次の通り。

地名	距離 支里	店(支那宿)數 戸
開原驛		
開原城	一五	約二〇〇
敖場	八	五
馮家屯	三	三
三家子	二	二
開原站	五	七
馬爾堡	五	二
威遠堡門	一二	八

二道河子	支里 五	戸 八	
松樹咀子	一五	四	
杏樹	一〇	四	
河羅堡	三	四	
高家店	五	五	
鵓子窩	一二	二	
大青秧	一五	一八	
乂溝	一三	二	
公合屯	六	一	
掏鹿（西豐）	六	三〇	
計	一四〇	一五四	

此店卽ち支那宿の數を掲げたるは本街道の交通頻繁なることを紹介せんが爲めである、毎年十月下旬から翌年三月下旬に至る約五箇月（內舊正月は殆んど半月位休むもの多し）間に此街道を旅行するものは何人も其穀物運送馬車數の夥多なのに一驚を喫するであらう永年掏鹿に住んで居るものは右五箇月間の一日平均發車數を二千輛位と見當を附けて居る、今假りに一車平均二噸の重量を積載し一箇年に四箇月間運搬するものとすれば

2×2,000×120＝480,000
噸　輛　日　噸

卽ち四十八萬噸の大數が開原方面に出廻る此他走物運物等を加へ一箇年少くも五十萬噸を內に入ることは斷じてないのは明白である開海鐵道敷設の有望なるは此一事を以ても推知することが出來る、此他海龍城、朝陽鎭方面からは多くの木材が出る、麻、煙草の如き特產物も少なくないから同線の經濟關係は素人考にも採算が出來る樣である、此故に屢々支那人間に其敷設を企圖せられたけれども何時も資本の不足な爲めに沙汰止となる模樣である、但し此線も滿蒙五鐵道の一なれば早晩我投資に依り實現する時機の到來するならんを信ずる、黑人筋の談に依ると本線は百二十哩敷設費は大約千四百萬圓であらうと。

十二月一日午前三時開原を出發し杏樹で晝食をなし午後四時に掏鹿領事分館に著いた。此地は鐵嶺の領事分館で吉原氏が主任であるが開設（大正五年十月十一日）後日淺く殊に支那家屋の改造中にて氏の居室さへ完成しない所であつたに拘らず同氏は非常なる好意を以て迎へられ深更迄調査上の便宜を與へられたことは感謝に堪へない次第である。

掏鹿は戸數二千八百五十戸人口二萬一千七百人を有する此方面に於ける古き市街であるが茲に省略する。

余が掏鹿の調査は吉原君、西尾醫師其他の談話を聞きしに過ぎないのみか此地には當部員の派遣もあるから別項古曳囑託の掏鹿に於ける邦人の狀況に讓る。

十二月二日午前三時掏鹿出發午後開原驛に著いた。

昨日街道上に於て實見せる馬車數は往復共にて實に六千七百餘輛を數へた之れは單に道路上にあるもの許りで店に休憩中のもの別路を通過して數へ能はざりしもの夜中の逢遇車等を推測すると少くも八千以上に上ることは疑を入れない、又此日は掏鹿に向ふて歸る車輛のみを數へたが二千三百五十許りであつた其中雜貨等返荷を積むものは僅かに百餘車に過ぎない。

斯る大數であるから掏鹿開原間の路上は馬車絡繹として殆んど絶間がない普通往車と復車は複線形に行交ふて居るが道幅狹き所は畑中を迂回して三條四條と岐れて行進する所を認める其遠望は實に偉觀を呈し其狀況は到底筆紙に表し難く實見せざれば信じ難き程盛なるものである。

沿道に日本人の住するは高家店に一戸の質屋を見たるのみ。

開原城には鐵嶺領事館の巡査二名ありて邦人數は左の通り。

料理業	二戸	人口	男	二一人
質屋	一二戸		女	三三人
賣藥	七戸			計五十四人
牛肉販賣	一戸			
支那妾	三戸			七人
朝鮮人	一戸			

である。

開原驛の人口は次の通り。

日本人	一千百十二人
朝鮮人	十五人
支那人	七千六百七十二人
計	八千七百九十九人

日本人職業の主なるものは次の如し。

官吏	五二戸	會社員	二三四戸
醫師	二	獸醫	一
藥劑師	一	農業	一六
商業	一〇一	工業	六二
雜業	二七	勞力	一
無職	二	藝妓酌婦	七九
計	三三〇戸		

人口男五七八 女五三四 計 一、一一二人

外に朝鮮人一戸男 女一〇五 計一五人

六、鐵嶺以南

十二月三日は鐵嶺を視察して奉天に著す、四日以後奉天に滯在すること一週間にして十日錦州に至り十三日奉天に再歸し十四日遼陽及營口を視察し十七日歸府した、沿線の事項は既に概況を周知せられあるを以て他日一事項毎に記載することゝし次に錦州の近況を掲げて本日誌を完ることゝする。

七、錦州邦人の發展

錦州の一般事情は第三號に掲載せるを以て茲に省略して專ら邦人發展の狀況を紹介しやう大正四年春夏の頃屢々新聞に傳へられた通り當地は支那地方官の遼西非滿洲、非開放地なる狹義の解釋に依つて三井店員の宿屋住一人の外邦人の居住は容易に許容せなんだのが事實であつたが都督府派遣の吉村少佐が駐在せらるゝに至つて地方官との折衝に努め日支親善の眞意義を解せしむるに至り四年末は既に二十四名に達し爾來新民及營口、奉天方面から邦人の來錦するもの次第に增加し五年末に於ては百三十名を數ふるに至つた今其主なる職業を擧げると

三井物産出張員	五十嵐氏
商品陳列館員	石光氏、外六
警察官吏	山元警部補、外一

都督府及領事館員　齋藤少佐、小笠原氏、後藤氏
赤十字救療所員　山崎氏、外三
盛進商行出張員　和泉氏
質屋二戸　賣藥一五戸　宿屋兼料理業三戸
理髮店一戸　大工二戸
等である。

三井は主として綿絲布を、陳列館は雜貨を、盛進商行は雜貨中砂糖、マッチ、石油、其他米穀を販賣して何れも相當の賣行あるのみならず支那人の信用厚く唯賣藥及料理業に至つては他の各地と等しく支那官憲の最も警戒する所であるから日支親善上今後邦人に於ても其意に反する營業を逐漸改良する方が堅實な發展に近づくであらうと思はれる。

近時當地の支那人も文明の光輝に近づかんとする傾向ありて合辦的事業經營上利便少なからざるに至りしは喜ぶべき現象である。

停車場より城内に至る輕便線は目下敷設中にて電燈會社も亦新に起らんとしつゝある。

當地に貨物を引き土產物を送致する京奉線が未だ責任輸送をなさゞると常關（總稅務司管下に屬する舊稅關なり）なるものありて高き稅を徵するとは邦人の苦痛とする所なるも是等は漸次之れを避くるの方法を講究するも遲きにあらざるべき乎。

左に營口及奉天よりする運賃諸掛を掲げて參考とする。

（一）錦州營口間運賃

京奉線運賃　哩數九六哩三（鐵路二七〇支里）

等級	一車扱	小口扱	等級品名內譯
頭等品	四八・五〇元	四・九〇元	棉絲布、奚服物、熟毛皮類、酒、麥酒、其他高等雜貨
二等品	三三・九五〇	・三三〇	麥粉、穀物、豆餅、果實、油類、蔬、野菜類
三等品	一七・〇〇〇	・二五〇	石炭、石灰、肥料、牛骨、生獸皮、木材類
危險品	七二・七五〇	四・八五〇	燐寸、其他危險品

右の外一車扱の場合左の通り諸費を要す。

脚行（積卸賃）　大洋三元
溝帮子棧饑（軌道轉樞料に當る）　同一元

脚　　力（荷卸苦力料）　小洋二元五角

上乘人夫費　一日約　同　一　元

棧　　錢（到著驛の運送店荷物監視料に當る）　同　三　元

營口運送店組合に於て協定し居る錦州迄の各貨物に對する運賃左の如し。

品目	單位	運賃	品目	單位	運賃
白糖	每包	元二・三〇〇	大連絨	每件	元五・三〇〇
紅糖	同	二・〇〇〇	雜貨	百斤	二・五〇〇
氷糖	百斤	一・五〇〇	煙草	同	四・〇〇〇
洋線	每件	六・〇〇〇	洋蠟	每箱	・三〇〇
粗布	同	四・〇〇〇	洋粉連紙	每扛	・八〇〇
大連布	同	三・七〇〇	洋毛邊紙	包	二・〇〇〇
坎布	同	二・八〇〇	洋釘子	百斤	一・三〇〇
大尺布	同	二・二〇〇	鐵絲	同	三・〇〇〇
市布	同	七・〇〇〇	牛奶	每箱	・八〇〇

備考　一、右運賃は營口遼河船賃及常關稅錦州到著より院內迄の運搬賃を加算せしものなり（全部小洋建）

脚　　行　　錢（手數料）　同　三　元

棧　　錢　　同　三　元

新民府滿帮子棧　錢（コンミッション）　同　二　元

上乘人夫汽車賃及日當　同　六　元

錦州棧錢　小洋　三　元

合　　計　大洋　六十四元七十五仙　小洋　三　元

右手數料は十噸に對するものにて二十噸は其倍額を徵收せらる。

十噸は白米百五十俵、砂糖は一百二十俵、石油は二百八十箱、燐寸は三百六十箱（卽ち六十噸）、麥粉は四百五十袋を積載する。

將來邦人の著目すべき事業は鮮少にあらざるも當地は深き奥地を有するに拘らず適當なる港を有せざるを以て京奉線に依り他に移送せらるゝか又は當地に寄らずして直ちに西海口に出すを常とする、故に先づ西海口（連山灣の築港完成は逆睹すべからざるのみならず本港は支那側にて軍港となすの說あること前號所載の如し）を修築して小汽船の寄港に支障なからしめ當地西海口間に輕便線を敷設して錦州停車場に聯絡する交通機關の日支合辦經

營を急要とする、然る後各種工場（製紙、小規模紡績、骨粉、製粉、膠、毛皮鞣、石鹸、硝子、鑵詰其他）の經營、金融機關の創設、土產原料の買收等何れも有望ならざるはなからう。

二、右品目中子口單を有するものは右運賃より大約半額を減ず。

之れを一車扱になすときは大約左の如し。

營口錦州間頭等品一車運賃諸費（同義棧と盛信商行との協定運賃）

汽車賃（千噸、二萬六千八百斤）	大洋	七十元
	小洋	七元
遼河渡河船賃（同）	同	三元
錦州驛棧錢（同）	同	五元五角
倉敷（棧錢）（車站より倉庫迄の運搬賃）	同	五元五角
合計	大洋	七十元
	小洋	二十一元

（但し子口單附のもの）

盛信商行の今日迄支拂したる運賃は左の如しと。

品目	單位	運賃	品目	單位	運賃
砂糖	一俵	一・〇〇〇元	麥粉	一袋	一・八〇元
石油	一箱	四〇〇	麥酒	一箱	一・〇〇〇

燐寸	一頓（小箱六箱）	三・二〇〇	シトロン	一箱	・六〇〇
白米	一石	一・三〇〇	清酒	一樽	一・五〇〇
醬油	大一樽	二・〇〇〇	氷糖	一箱	・六〇〇
同	小一樽	・三五〇	鑛詰	同	・六〇〇
ミルク	一箱	・六〇〇	雜貨	百斤	一・〇〇〇

（二）奉天錦州間運賃　鐵道哩數 一四三哩三　陸路 四九〇支里

等級	一車扱（十噸に付）	小口扱（二噸に付）
	元	元
一等品	七五・五〇〇	・八五〇
二等品	五三・七五〇	・六一〇
三等品	三九・二五〇	・四七〇

京奉線は荷物に對し責任を負はざるが故に荷主が荷物發送の場合は荷物を監視附添を要し不便尠からず。

奉天錦州間麥粉十噸一車の運賃諸費

汽車賃（四百五十哩）　大洋　五十元七十五仙

落村					
高野	鷄	二	一	一	一
冷水	木	一	一	一	一
泉	子	一	一	一	一
高家	店	一	一	一	一
小李	樹河	一	一	二	一
合計		三一一	三四	三八	七一一
		3,930			28,620

二、職業

掬鹿市中に於ける邦人職業別左の如し。

官吏　五　醫師　一　賣藥商　七
質商　三　特產物商　一　雜貨商　一
料理店　二　理髮師　一

官吏　凡て領事館員とす卽ち書記生二名、警部一名、巡査二名。

醫師　大正二年以來居住す初めは經營困難を極めたれども漸次支那人間に信用を得又昨秋赤十字の救療所設置せられ之が囑託醫となる。

掬鹿に於ける邦人發展情況竝に有望なる事業

賣藥商　賣藥商は東山地方各地と同じく實に邦人職業の第一位を占む該商は一時巨額の利益ありたれども同業者の増加するに從ひ勢ひ競爭を免れず他に移住するものを生じ漸次減少して現今は七戸となれり藥は主として嗎啡にして仁丹、健胃劑、寒冒藥竝に各種膏藥等多少の賣行きあれども殆んど論ずるに足らず利益は賣上高の一割乃至三割と云ふ。

尙昨年の輸入高を示せば大約左の如し。

仁丹	六、〇〇〇円	實丹	一、五〇〇円
大學眼藥	三、〇〇〇	清快丸	五〇〇
中將湯	二、〇〇〇	合計	二〇、〇〇〇
蚤取粉（虎龍印）	三、〇〇〇（將來增加の見込少なし）		
其他各種藥品	一五、〇〇〇		

昨年十月中に於ける賣上高左の如し。

最高賣上者	七八五円	最低賣上者	一七四円
七戸合計	二、五三〇	一戸平均	三六二

之を一年前卽ち大正四年十月中に於ける平均一戸賣上高二百七十圓なるに比すれば同業者

掏鹿に於ける邦人發展情況竝に有望なる事業

（大正六年一月十七日）

掏鹿に於て　古曳囑託

目次

一、戸口
二、職業
三、邦人關係商店
四、有望なる事業
　イ、電氣事業
　ロ、米作竝に精米業
　ハ、特産物買出就中大豆の先物買
　ニ、金融業
　ホ、鹽乾魚輸入
　ヘ、時計商及び寫眞師
　西鬱縣及び掏鹿事情に付ては滿蒙經濟調査復命書第六に概述したれば本報告に於ては專ら最近の邦人情況其他に付て述ぶ又本報告に於て邦人又は日本人と稱するは單に內地人を指し朝鮮人を含まず。

一、戸口

掏鹿に於ける邦人發展情況竝に有望なる事業

掏鹿は東山地方（掏鹿海龍一帶の地を云ふ）に於ける城鎮中鐵道沿線に最も近く邦人の居住も年所を經ること久しく日露戰爭後居住者百名を越ねたれども當時の居住者は多く空拳無賴の徒にして大半我官憲の退去を命ずる所と爲り其後賣藥商移住し來り再び百名を越ねたれども同業者の增加は自然競爭を惹起し漸次戸口減少し現今男女合計五十七名に過ぎない之を一年前卽ち大正五年一月男女合計五十八名なるに比し客秋領事館設置せられ館員及び其家族の增加あるも尙ほ一名の減少を見る。

掏鹿市中に於ける居住者と西豐縣下各村落に於ける居住者と合して西豐縣日本人居留民會なるものを組織す居留民會には正副會長各一名相談役六名を置く。

大正六年一月現在掏鹿市中に於ける戸口竝に西豐縣下各村落に於ける戸口（亞拉比亞數字は支那人）左の如し。

地名		戸數	人口 男	人口 女	人口 計
市中 掏鹿		一一一 2,550	二六	三一	五七 21,700
平崗		三一 450	三	三	六 3,200

官當を除き十戸の合計資本約二萬二千七百元に過ぎず三十餘戸を合するも十萬に達せざること遠し當地には中國殖邊興業商業銀行及東三省官銀號、黑龍江省官銀號各支店又は出張所あるも地方的金融機關たらざるを以て質屋が該機關たる所以にして其三十餘戸の多數に達し興廢常なく互に利益を競爭するに至りしは既記の如く（一）邦人に對抗すること（二）特權制の破れしことに起因す。

特產物商　開原特產物商泰東號より大豆の批買（先物買俗に靑田買と云ふ）の爲め出張し居るものにして昨年約二千石の先物契約を爲し目下現物受取中なり。

此地方に於ては大豆批買の如きは最も有利なる事業の一とす詳細は後に記す。

雜貨商　實は日用食料品商にして掏鹿に於ける邦人約二十戸村落に散在する邦人數戸を顧客とするのみにして甚だ振はず。

料理店　合計二戸藝妓一名酌婦六名あり專ら支那人を顧客とす花代は一時間二元一夜五元とす一名一箇月の稼高平均五六十圓とす酒肴料は極めて僅少なり。

理髮師　理髮賃は二角內外にして相當繁榮す。

村落の居住者は凡て賣藥商にして質商を兼業す。

三、邦人關係ある商店

以上は現に居住せるものゝみに付て述べたるが今邦人にして掏鹿に支店又は出張所若くは代理店を有するものを述ぶれば左の如し。

開原雜貨商同益源支店　原と三井洋行の代理店として綿布、麥粉、砂糖、燐寸等の雜貨を輸入したるが大正三年火災後業務を縮少し目下一名の支那人店員を置き若干の麥粉を輸入しつゝあるのみ。

此地に入る雜貨は約三分の二は本邦品の占むる所なれども凡て支那雜貨商の手により輸入せらる、掏鹿には支那大雜貨商十四戸あり其中最も大なるものを東興順となす五萬元の資本金を擁し七十餘名の店員を使用し一箇年の賣上高實に五十萬元に上る其他の十三戸亦何れも資本金二三萬元にして各々店員四五十名を使用す、故に邦人若し資本金其他取引經驗等に於て此等を凌駕するとせばいざ知らず然らざれば之と競爭すること甚だ困難なり唯だ邦人は現今銷場稅（落地稅—稅率從價百分の二）を納め居らざるの特典あり。

奉天石炭商松昌公司出張所　原と燒鍋用として撫順炭を輸入したるが大正四年來支那人店減少せる爲めか各戸の賣上高は稍々好成績なるを見る。

質商　專業者一戸あり其他は賣藥商の兼業に係る兼業の認許を得居るもの六戸あれども現在營業し居るものは三戸とす從來質商は支那に於ては重稅を課し特許營業とせり掏鹿には大當舖（當舖とは質屋のことなり）一戸のみなりしが邦人が續々開業したれば支那官憲も之に對抗すべく續々支那人に許可し大中小當舖は雨後の筍の如く起り邦人營業者は大に打擊を蒙むるに至れり目下當地の支那側當舖は大當舖六戸、中當舖六戸、小當舖二十戸あり、大當舖と稱するは月利三分流質期限を十二箇月とし中當舖は月利六分流質期限十二箇月乃至六箇月小當舖は日利にして貸金一元に付一日銅貨一枚、五十日乃至二箇月を以て流質期限とす。

邦人質商は普通一元に付一日銅貨一枚若くは月二割、五十日乃至二箇月を以て流質期限とす故に大中當舖に比し甚だ高利なれば或は地照（地券）を質に取り或は極く細民の金融機關となり自然質物は保證不確實なるを免がれず何んとなれば地照は多く訴訟沙汰となり細民の質物は流れ易く利益薄ければなり。

昨年十月中に於ける邦人質商三戸の貸出高左の如し。

最多	五〇〇・六六円	中	一五六・三〇円
最少	一三六・九〇	平均	二六七・六二

之を一年前卽ち大正四年十月中質商五戸あり一戸平均貸出高二百三十五圓三十二錢なるに比し大差なし。

序に支那大當舗は資本金五萬元乃至一萬元一箇月の貸出高數千元、中當舗は資本金一萬元乃至一千元一箇月の貸出高一千元內外、小當舗は資本金一千元以下にして一箇月の貸出高は數百元とす邦人質商は小當舗と比儔すべし。

尙支那側當舗中主なるもの〻屋號及資本額を示せば次の如し。

官當(官營)	五〇、〇〇〇元(休業)	東盛當	一〇、〇〇〇元
福興當	一、〇〇〇	廣益當	五、〇〇〇
榮生當	一、〇〇〇	慶豐當	一、五〇〇
巨源當	九〇〇	天德當	一、五〇〇
廣義當	五〇〇	東升當	一、〇〇〇
銘記當	三〇〇		

今參考の爲め此地に於ける工業情況を述ぶれば左の如し。

燒鍋　三戸あり一戸は三鍋他の二戸は各々一鍋を備ふ。

油房　機械油房六戸あり十六馬力の蒸汽機關一臺を備ふるもの一戸八馬力の石油發動機一臺を備ふるもの三戸六馬力の石油發動機一臺を備ふるもの一戸とす其他土法油房四戸あり各々二碾を備ふ。

磨坊　約三十戸あり概ね二磨を備ふ。

精米所　未だなけれども其經營は有望ならん。

ロ、米作竝に精米業

當地方は蒙古地方と異り既に業に開墾を了し殆んど未開墾地を殘さず唯東豐縣界把哈撥地方に未拂下荒地約八十方地(一方地は二百四十畝とす)存すれども土地磽确而かも拂下價格は一方地千二、三百元の高價を稱ふ之を拂受けて開墾するも有利ならざるべし。

大正五年支那巡警局の調査に依れば朝鮮人は西豐縣下に八十戸男三百十五名女百六十九名合計三百八十四名居住すと而して朝鮮人は凡て米作を業とし其方法は先づ支那人と小作契約を爲し水田を作り收穫物は分益法に依り地主と折半(卽ち對半青(トイスンチン))又は地主四分小作人六

分の割合(卽ち四六青(スリウチン))にて分配す其割合は凡て當初の契約に依りて定まる朝鮮人十戸の耕作力は三天地乃至五天地なり而して一天地の收穫高は一昨年は稍々凶作にて粃五石(十石は我一石七斗六升とす)昨年は稍々豐作にて粃十石を得たり故に昨年西豐縣下に於ては三百天地の水田を作り三千石の粃を收穫せりと見て大過なからん。

一方支那農民は現今資金缺乏の際とて金錢の融通を希望するもの多きを以て西豐縣下一天地の一般借地料は十元乃至二十元なれども金錢の融通を希望する者より比較的に安く借地し得べし尙ほ(二)項に述ぶる方法に依り典權又は商租權を取得せば更に有利なり今假りに一天地を十二元にて借り之を四六青の契約にて朝鮮人に作らしめ粃八石(二年間の平均作)を得るとすれば朝鮮人には粃四石八斗を分與せざるべからず然れども實際米を與ふる必要なく其日の相場にて金錢を與ふれば足る今日の相場は粃一石六元二十錢なるを以て之に依り收支計算を立つれば左の如し。

收入	
四十九元六十錢	粃八石代
支出	

員を置き小賣も始めたり大正五年は薪安價なりし爲め石炭の賣行き良好ならず僅かに二百五十萬斤を賣りたりと。

掏鹿は撫順炭と大疙疸炭との競爭地にして前者は火力强き爲め燒鍋用に適し後者は火持長き爲めストーヴ用に適し目下互角の勢にあり小賣價格は切込炭百斤撫順炭は八角半、大疙疸炭は七角とす此の外に飯館子及び風呂屋用として西安縣鴨子園の無煙炭輸入せらるれども撫順炭と其用途を異にすれば之とは競爭の問題を生せず。

鐵嶺石炭商怡信洋行出張所　支那人店員を置き大正四年冬鍛冶屋用としてコークス約六十萬斤を輸入したれども是亦賣行き良好ならず。

當地に於ける石炭一箇年の輸入高は大約次の見當なりと。

撫順炭	五百萬斤
大疙疸炭	八百萬斤
粉炭	九百萬斤
本溪湖炭	四十五萬斤

東亞煙草公司代理店　支那人三合鹹を代理店と爲す大正五年は蜜蜂印、樹牌及朝日等合計

約二百箱を輸入したりと云ふ該代理店の手を經ずして輸入せらるゝものも多少ありて一箇年の輸入高は一萬五千元位なり因に英米トラストは一箇年十四萬元、其他八千元、我官煙と共に輸入高は一箇年十六萬三千元内外なりと。

太平洋生命保險會社代理店　大正五年邦人の代理店を置き邦人には加入者ありたれども未だ支那人にまでは及ばず。

四　有望なる事業

イ、電氣事業

電氣事業に就ては予は全くの門外漢にして其の收支計算を立つるが如きことは到底爲し能はざる所なり唯だ專門家の一顧を乞はんと欲する而已。

掏鹿には既に電信電話は架設せられたれば次に興るべきものは電燈なり市街地の戸數約三千多くは商賈とす而して今日の如く石油高價なれば電燈の需要多からん現に一二支那人間に内議あれば之と合辦事業とし傍ら電力を製酒、製油、製粉及び精米等の動力に供給せば妙ならん。

十二元	借地料（朝鮮人に支拂ふ粟四石八斗の代）	
二十九元七十六錢		
殘		
七元八十四錢	利益	

地租竝に土地に關する公課は凡て支那人の負擔とす卽ち最初十二元の投資にて七元八十四錢の純益を得然れども朝鮮人は多く無一文の流民なれば收穫時期に至るまで食糧の前貸をなさゞるべからず又稻刈取の際に稻を詐取せらるゝ虞あれば十分監督せざるべからず。

西豐縣下の地質たるや腐植質土にして耕土の深さ五六寸乃至三尺あり地味頗る豐沃にして各種の農作物に適し米作にも好適にして良米を產すれども精白に至りては十分ならざるが故に當地居住邦人中には白米を鐵道沿線に仰ぐものあり茲に於て精米業兼營の必要を認む最初は小規模の精米所を興し先づ居住邦人の需要に應じ漸次支那人に及ぼし（支那人は精白不十分なる米に慣れ居れば急に彼等の需要を喚起することは困難なり）又金銀相場にて引合はゞ鐵道沿線に輸出するも可ならん。

西豐縣下に於ては朝鮮人が水稻を作る外支那人に陸稻を作るものあり民國三年農務會の調

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

査に依れば陸稻作付畝數は六四、七五〇畝收穫量は一九、四二五石一畝の收穫量は三斗と云ふ。

ハ、特産物買出就中大豆の先物買

前きに述べたるが如く開原邦人特産物商泰東號の如きは昨年中西豐及東豐縣下に於て約二千石大豆の先物を買ひ又大連齋藤油房其他若干の先物を買ひたりと雖も何れも巨額なりと稱するべからず東山地方の特産物は殆んど凡て支那人一手によりて鐵道沿線に出だされ邦人の原産地に買出しに來るは稀觀事に屬す。

特産物の買出就中大豆の先物買は最も有利なり現物に就ては別に述べず先物取引には批賣買及び期賣買の二種あり批賣買とは穀物收穫前卽ち代金の全部又は一部を支拂ひ秋收後現物を授受する賣買契約を云ふ昨年の例に就きて見るに舊曆六月初めて相場立ち當時大豆一斗六角半なりしが漸次騰貴し七月には七角より八角に九月には九角に上れり（運賃及び出産稅は最初の契約に因りて定まれども普通掏鹿に於て授受するとして立契す）而して今日現物の相場は一元十八錢なり故に七月八角にて批買したりとせば今日一斗に付三十八錢の利益あり。

然れども其間の金利あり又現品授受の際に於ける相場及び金銀相場の變動による損失竝に凶作にて農家が手附金を取りながら現品を納むる能はざる等による損失をも算入せざるべからざれば如斯簡單ならざるは勿論なり但し昨年は豐作にて農家は凡て契約通り納めたりと。

期賣買は投機にて危險なるものなり取引方法の詳細に付ては既刊の「穀物取引慣習」及「滿蒙經濟調査復命書第六」に讓る。

ニ、金融業

貸出　現今支那農民は資金甚だ缺乏の際なり其理由を繹ぬるに近年屢々凶作なりしこと、利益は商人に壟斷せらるゝこと、官の追求多きこと、竝に昨年土地清丈の結果新に多額の登記料を支拂ひ土地の登記を受けざるべからざること等に在り掏鹿には中國銀行、奉天省興業銀行、交通銀行、商業銀行、東三省官銀號及び黑龍江省官銀行等の支店又は出張所あれども本店に資金豐富ならざれば支店又は出張所の如きは容易に貸出し能はざるものゝ如し利子は普通邦人の想像するが如く高率ならず月二分乃至三分なれども貸出高は尠し土地を擔保とせば貸出高は普通地價の十分の一以下とす故に此際資金十分なる我金融業者來ら

ば相當に貸出しあらんこと必せり擔保品は土地最も可なり。

爲替　特産物の出廻期に於ては此地と鐵道沿線とは一日五六千元の爲替を取組めども商人間相互に「傳手」を求めて取組み「傳手」なきとき銀行に依頼す銀行の取扱高は極めて尠し爲替料は甚だ高價にして中國銀行の爲替料は左の如し。(毎日多少の變動はあれども)百元に付

開原　一元　　鐵嶺、奉天等　二元　　營口、大連等　三元

爲替料は此の如く不廉なれば料金を低廉にし爲替を吸收すること容易なり。

預金　此地の農家は市中の信用ある商人に金錢を預け銀行に預金するものは殆んどなし是れ一は銀行の貧弱なるに因るべし。

金融業は大雜貨商又は此地に於て農業を經營するものが兼業として營むも可なり。

ホ、鹽乾魚輸入

昨年予は旅行中朝陽鎮に於て日本のイワシの鹽漬輸入せらるゝを見斯る僻遠の地に日本の魚類を輸入する程までに支那人は魚類を嗜好するかと驚きたるが今掏鹿北大街を通過すれば道路の兩側數箇所に鹽乾魚類の山積し居るを見る關東州よりすれば東山地方は看過すべからざる販路なり。

掏鹿に於て魚類商の最も大なるものを北大街三梨合窰となす掏鹿に於ける鹽乾魚類の輸入情況左の如し。

種類	輸出地	一箇年輸入高	百斤價格
鰕	大連	二十萬斤	四元
黄花魚(ゲチ)	大連又は營口	五十萬斤	十元
刀魚(サンマ)	營口	十萬斤	八元
大頭腥(タラ?)	安東	五萬斤	四元
鯉	鄭家屯、伯都訥方面	十三元	
肝頭魚		二十萬斤	十二元

ヘ、時計商及び寫眞師

掏鹿には支那人に專門の時計商なければ邦人時計商兼時計修繕師一名入來らば有望なり。

又掏鹿には一名支那人寫眞師あれども技術巧妙ならざれば邦人寫眞師一名位は容るゝ餘地あり唯だ專業者は維持困難なるべし可成他業と兼業するものを可とす。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

滿洲の工業に就て

滿洲は今尙農業を本位とする所謂農業殖民地で未だ製造工業地と謂ふことは出來ない一般の土著民は其の生活程度が甚だ低級で且つ單純なる生計を營んで居るから日用品の如きも極めて小部分を外國產品に仰ぐの外は總て不完全不體裁なる手工品に滿足して居る有樣で工藝技術は頗る幼稚の狀態である然し滿洲の地は由來各種工業原料極めて豐富にして燃料は殆んど無盡藏で加ふるに勞力は非常に低廉で得られるから漸次文化開發に伴ひ生活程度の向上發展と共に大に各種工藝品の需要が起ることは疑ふべからざる事實で滿洲工業界の前途は頗る多望である。

滿洲には舊來搾油、釀造、製粉、製紙、窯業、染色、製革等種々の工業があるが孰れも一家三四人の職工を使役する極めて小規模の家內工業で就中比較的規模大なるものは搾油、釀造及製粉業である搾油業は實に滿洲工業界の大宗で到る處油坊の設けの無い處は無い往時滿洲各地では食用品として麻油の製造が盛んであつたが今より六十年前頃から豆油を以て之に代用することが頗る低廉なるを覺り玆に始めて豆油の搾取を見る樣になつたのであ

る其の當時は單に食用其他に需用せらるゝばかりで其の用途は極めて狹かつたが近頃では遠く歐米諸國に輸出せられ歐米各地では豆油を分解してグリセリン又は脂肪酸となし更に之を硬化して其性能を昂むることが盛んに行はれ其の需要は年と共に增加しつゝあり豆粕も亦肥料及家畜の飼料として本邦及南支那方面に輸出せらるゝものが頗る巨額で在來の人力及馬力等による舊式の油坊では到底其の需要に應ずる事が出來なくなり遂に時代の必要に應じて電力或は蒸汽力等の動力による新式の工場所謂機械油坊は恰も雨後の筍の如く勃興して來た然れども孰れも設備は甚だ不完全で加ふるに技術も亦頗る幼稚であるから油の搾出率も含油量の三分の二以上を超ゆることは出來ない大正四年末滿鐵から鈴木商店（店主は神戸の鈴木よね）に讓渡した抽出式油坊は能く含有量の八、九十%を收め得且つ其の豆粕は含油量が僅かで窒素肥料たるの本質を損することが少なく其效果は大いさうである要するに油坊に就ては今後尙ほ改良工夫を施すの餘地は充分にあるであらうと思はれる現在の油坊數は大連五十六戸營口二十四戸鐵嶺十一戸開原九戸公主嶺六戸長春十三戸哈爾賓三十二戸等で其の他滿洲各地都邑には多くは十戸少なくとも二戸位は必ず存在して居る表中に記する油坊は關東州內のものゝみで他は煩雜を避くる爲め省略することゝした。

釀造業は油坊と共に滿洲の二大製造業と稱せられて居る滿洲の土民は從來滿洲各地より產出する高粱より高粱酒なる一種の燒酎を釀造して日常の飲料に供して居る高粱酒は粟を以て釀造する黃酒と共に滿洲に於ける釀造業の重要なる地位を占めて居るもので高粱酒釀造業者は之を燒鍋と稱し滿洲に於ける燒鍋は約百十餘戸で其の年產額約三十萬石內外に達し主要產地は遼陽及び蓋平等である其の釀造方法は殆んど全部滿洲舊來の固形醱酵法によりて頗る經濟的に行はれて居るが如何せん醱酵蒸溜不完全なる爲め殘糟中に尙ほ多くの澱粉を遺留するを以て學理上大に改良を加ふべき點があるであらうと思はれる大正二年頃大連の九鬼榮助氏（元奉天に同樣の業を經營せることあり）小崗子に一燒鍋を創立し新式機械を應用し釀造方法にも改良を施し一年約千四百石の燒酎を製出し逐年良好の成績を擧げて居る燒酎と共に邦人の研究を要するのは醬油の釀造である古來支那には淸醬と稱する固有の醬油があるが風味頗る劣等である近來日本醬油輸入せられ先づ都市の料理店等に試用せられ漸次一般支那人の家庭に及び又一方邦人の移住年と共に增加するに從ひ日本醬油の需用漸次增加し來り大連旅順營口奉天哈爾賓等の邦人醬油釀造業者は多く支那人向の廉價品を製出し相當の利益を收めつゝある現況で醬油釀造は燒酎釀造と共に將來有望の一事業である

と思はれる表中に記する燒鍋は關東州内のもの〻みで他は煩を避くる爲め略することゝした。

製粉業のことは經濟事情第二號に記載してあるから略することゝする。

機織業は多く綿布商の副業で近來紡績絲の輸入と共に營口遼陽錦州方面で盛んに行はれて來た然し孰れも舊式器械數臺を使用する小規模の家内工業である最近長春の森崎某なる者同地に株式組織の一大工場を設立せんと計畫し株の募集に著手したが應募者非常に多く忽ち滿株となつたから早晩開業の運びに至るであらう。

其他大正五年に開業せられしもの或は本年創設せらるべきもの〻内主なるものを擧ぐれば大連に都督府經營の硫酸工場、合資組織の大華公司（資本金三十萬圓氷糖及副産物の製造販賣卵粉製造及販賣）大連油脂製造株式會社、粉條子（豆素麵）製造工場、滿洲製綿公司、滿洲皮革商會、旅順に麥酒釀造所、タオル製造所、龍頭公司、普蘭店に硫化バリウム工場萬家嶺に柞蠶製絲工場、營口に三益公司、製紙會社、奉天に南滿洲製糖株式會社、滿蒙化學工業合資會社、渡邊製革工場、哈爾賓にマンチユリアンプロデイウスエキスポート會社等がある要するに滿洲の工業は頗る有望で殊に柞蠶絲の如きは大に研究を要すべき問題であらうと思はれる今關東州内外に於ける最近の各種工場の名稱資本額生産額等を擧ぐれば次の通りである。

諸工場の一　邦人經營の部

名目	所在地	資本額	製造品 品名	單位	數量	價格
旅順醬油釀造合名會社	旅順朝日町	二五、〇〇〇円	醬味噌	油升	一、八九五、九九九	二九、三八七円
吉村商店	同乃木町	八、〇〇〇	醬味噌	油升	三八、三〇〇	一二、三五六
齋藤瓦工場	同金比羅町	五〇	瓦土管	枚箇	九七〇、〇〇〇 六一、六〇〇 三四、〇〇〇 二〇〇	一五、五二〇 一九、七一二 一、二〇〇 三五
旅順石鹼製造所	同乃木町	約一、〇〇〇	洗濯用石鹼 アイボリ同 水・石鹼	同 同 樽	一〇、九一〇 三、一四三 七	九八一 三六一 一七
絲山鐵工場	同朝日町	二、〇〇〇	諸機械及建築材料		一	一、二〇〇
岩崎鐵工場	同乃木町	五〇〇	船具建築材料ノ製造修理鑄物類		一	一、二〇〇
柏木鐵工場	同朝日町	三、〇〇〇	諸機械建築材料及鑄物		一	四、五〇〇

野間鐵工場	旅順乃木町	五〇〇円	諸機械建築材料及鑄物		—	一、〇〇〇円
野中榮一	同西町	一、〇〇〇	粉條子（豆素麵）		休業中	
武田煉瓦工場	旅順管內	五、〇〇〇	瓦	箇	一六、七〇〇	六六八
同上	旅順大島町	一、〇〇〇	煉瓦	同	二〇、〇〇〇	一二〇
大口井再製鹽工場	旅順管內	約九、八〇〇	再製鹽	斤	四、四二一、〇三〇	四八、六三二
龍頭公司	旅順外七箇所	三三、〇〇〇	製帽		—	—
那須清涼飲料水製造所	同名古屋町	—	サイダ	打	八、〇〇〇	四、五〇〇
旅順タオル製造所	同新市街	—	タオル		準備中	
旅順麥酒釀造所	同金比羅町	投資金額一〇、〇〇〇	麥酒		同	
旅順耐火煉瓦工場	同桃園町	同三〇、〇〇〇	耐火煉瓦		試驗中	
日清豆粕製造株式會社	大連軍用地區	七五〇、〇〇〇	豆粕	枚	九七九、〇〇〇	一、二三三、五四〇
			豆油	斤	四、〇五六、〇〇〇	四四七、九八五
三泰油坊	同	三〇〇、〇〇〇	豆粕	枚	六三〇、〇〇〇	七九三、八〇〇
			豆油	斤	二、六一〇、〇〇〇	二九三、八〇八
小寺油坊	同	三〇〇、〇〇〇	豆粕	枚	八一九、〇〇〇	一、〇三一、九四〇
			豆油	斤	三、三八〇、五〇〇	三七三、三七六
齋藤油坊	同	一〇〇、〇〇〇	豆粕	枚	三五九、〇〇〇	四四七、三〇〇
			豆油	斤	一、四八一、〇〇〇	一六三、五七六
吉田油坊	同	五、〇〇〇	豆粕	枚	八〇、〇〇〇	一〇〇、八〇〇
			豆油	斤	三三三、二五〇	三六、八〇七
鈴木油坊	同寺兒溝	五〇〇、〇〇〇	自大正四年十一月 豆粕	枚	一七、二五七、〇〇〇	—
			至同五年六月 豆油	斤	二、七九四、〇〇〇	—

三太利油坊	大連小崗子	三〇、〇〇〇	豆粕	枚	二一五、〇〇〇	二七〇、九〇〇
			豆油	斤	八九四、〇〇〇	九八、九四八
和盛利油坊	同軍用地區	三〇、〇〇〇	豆粕	枚	一九五、〇〇〇	二四五、七〇〇
			豆油	斤	七九九、〇〇〇	七九九、〇〇〇
營口煉瓦製造所臭水分工場	大連管內	八五、〇〇〇	煉瓦	箇	二、〇〇〇、〇〇〇	一七、六〇〇
營口煉瓦製造所三春柳分工場	同	一二五、〇〇〇	煉瓦	箇	二、二三〇、〇〇〇	一九、六二四
			煉炭	噸	五、〇〇〇	四〇、七五〇
福昌公司煉瓦製造所	大連寺兒溝	五、五〇〇	煉瓦	箇	一、二三八、〇〇〇	一〇、八九四
大連煉瓦合資會社	大連管內	三〇、〇〇〇	煉瓦	同	一、一〇〇、〇〇〇	八、五〇〇
宮崎商會煉瓦工場	同	一五、〇〇〇	煉瓦	同	一、二一三、〇〇〇	一〇、六七四
福田煉瓦工場	同	一五、〇〇〇	煉瓦	箇	六〇〇、〇〇〇	五六、二八〇
			瓦	枚	六一〇、〇〇〇	二三、四八五
石田煉瓦工場	大連朝日町	三、〇〇〇	煉瓦	箇	二六〇、〇〇〇	二、二九〇
宮崎製瓦工場	同山城町	五〇、〇〇〇	瓦	枚	—	二〇、〇〇〇
小林煉瓦工場	大連管內	二、〇〇〇	瓦	同	二〇二、〇〇〇	七七八
菲石灰工場	同	二二、〇〇〇	石灰	斤	二、三四五、〇〇〇	六、八〇〇
株式會社川崎造船所大連出張所	大連濱町	一〇、〇〇〇、〇〇〇	造船及船舶修繕		—	九〇、〇〇〇
大連鐵工所	同大山通	八、〇〇〇	諸機械製造及修繕		—	四〇、〇〇〇
戸田鐵工所	同乃木町	一〇、〇〇〇	同		—	二〇、〇〇〇
中村鐵工所	同西通	一五、〇〇〇	諸機械製造及修繕並船舶修理		—	五〇、〇〇〇

鳥羽洋行鐵工所	大連近江町	一五,〇〇〇円	建築用金物及修繕		—	五五,〇〇〇円
兒島製氷サイダー工場	同公園	一二〇,〇〇〇	製氷 サイダー	貫 (四打入)箱	四四五,四五〇 一四,一〇〇	二三,三七三 四三,七一〇
兒島製壜所	大連管内	二〇,〇〇〇	各種瓶類ノ製造		—	三〇,〇〇〇
月星合資會社	大連西通	一〇,〇〇〇	サイダー	(四打入)箱	八,三四〇	二六,六八八
萬玉洋行石鹸工場	同松林町	三〇,〇〇〇	化粧石鹸 洗濯石鹸 洋蠟		—	一一,七三八 一五,九〇二 三,〇〇〇
滿洲石鹸製造所	同加賀町	五,〇〇〇	洗濯石鹸		—	一四,三六五
畑中石鹸製造所	同能登町	二,五〇〇	化粧石鹸 洗濯石鹸		—	六,六〇五 六,一八五
小野田セメント製造株式會社大連工場	大連管内	一,〇〇〇,〇〇〇	セメント	樽	一八〇,〇〇〇	五四〇,〇〇〇
玉置硝子工場	大連出雲町	七,〇〇〇	硝子器		—	一四,二三八
大連製材所	同北大山通	三〇,〇〇〇	製材		—	八,五〇〇
合資會社向井骨粉工場	大連管内	一八,〇〇〇	骨粉	噸	三,〇二〇	一四一,九四〇
大矢組精米所	大連朝日町	一〇〇,〇〇〇	精米	石	三,六〇〇	五,〇〇〇
ソーライト製造工場	同淡路町	一〇,〇〇〇	ソーライト タンタルス	磅	二〇〇,〇〇〇 五〇,〇〇〇	一六,〇〇〇 一〇,〇〇〇
勞働保護會製紙場	同松林町	一,五〇〇	紙	貫	七五〇	九七五
精工舍	同八幡町	三,〇〇〇	柳行李	箇	一,四七三	一,八一六
木村屋製菓工場	同信濃町	二〇,〇〇〇	ビスケツト キヤラメル		—	九〇,〇〇〇

滿鐵沙河口工場	同山城町	六,〇三〇,八三三	車輛及器具機械製造修繕		—	二,四九二,〇〇〇
植田龍商店	同若狹町	七,〇〇〇	味噌	貫	七〇,〇〇〇	二四,〇〇〇
中堂洋行	同能登町	七,〇〇〇	同 酢	貫 石	七三,〇〇〇 七〇〇	二一,一七〇 七,〇〇〇
巴商行	同小崗子	七,〇〇〇	海布苔 醬油 味噌	 石 貫	二一,〇〇〇 一,二〇〇 四〇,〇〇〇	六,〇〇〇 一八,〇〇〇 九,六〇〇
池田醬油釀造所	同西通	二〇,〇〇〇	醬油	石	二,二〇〇	三三,〇〇〇
丸太商店	同紀伊町	三,五〇〇	味噌	貫	三六,〇〇〇	八,六四〇
小川洋行第二釀造所	同安藝町	一〇,〇〇〇	醬油 味噌	石 貫	一,五〇〇 二五,〇〇〇	二三,五〇〇 六,七五〇
滙泉湧燒鍋	大連管内	二五,〇〇〇	高粱酒、混成酒		一,〇〇〇,〇〇〇	八〇,〇〇〇
南滿化學製品所	大連軍用地區	二五,〇〇〇	脂肪酸 グリセリン	キロ	一,二一〇 —	二,〇〇〇 五〇〇
乾製薬場	同	三〇,〇〇〇	甘草及エツキス	斤	六〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇
山葉洋行	大連 拂込	六〇〇,〇〇〇 六〇〇,〇〇〇	製材	才	九〇,〇〇〇	五,〇〇〇
池田商店	同伊勢町	一,〇〇〇	鍍金	自轉車 各工場製品一般依賴	一一〇	三三〇 九〇〇 一五〇
石川商店	同岩代町	一,〇〇〇	同	箇	一,四五六	一,六〇〇
丸徳煉炭製造所	同小崗子	七,二一〇	煉炭	同 大 小	二〇,〇〇〇 三五〇,〇〇〇	一,〇〇〇 四,〇六〇
杉尾鐵工場	同紀伊町	三,〇〇〇	瓦斯鎔接法	同	二,〇〇〇	九,〇〇〇

大連油脂工業會社	大連軍用地	一,〇〇〇,〇〇〇円 拂込 二五〇,〇〇〇	硬化油(目下の數量は唯殆假工場のみの製造高にして新工場は極めて少量なり)	斤	一,五二七	三一九円
滿洲皮革商會	同 小崗子	五,〇〇〇	製皮	坪	三〇,〇〇〇	一五,〇〇〇
アカシヤエロー商會	同 北大山通	六,〇〇〇	染料	斤	六,三〇〇	一三,二三〇
大信洋行製鋼所	同 軍用地	七〇,〇〇〇	製錬	同	銅 一六七,五〇〇 亞鉛 六五,八六〇	六七,〇〇〇 一四,四八九
小山寛豆酒製造所	大房身	投資額約 一〇,〇〇〇			準備中	—
石綿採掘所	金州管内	一五,〇〇〇	石綿	斤	二五一,七〇〇	一二,五八五
日本鹽業會社製鹽煎熬工場	普蘭店	五〇,〇〇〇	製鹽	同	六,九七一,五二六	六一,〇〇〇
小山煉瓦工場	同	六〇〇	煉瓦、瓦		休業中	—
硫化バリウム工場	同	—	バリウム		準備中	—
田中精米所	松樹	二〇,〇〇〇	精米	石	一,〇〇〇	一四,〇〇〇
滿洲野蠶公司	萬家嶺	不明	柞蠶絲		—	—
入江洋行	熊岳城	五四,〇〇〇	高粱酒		—	二八,〇〇〇
營口煉瓦製造所	營口牛家屯	五四,八七八	煉瓦		—	賣上高 一五,七〇〇
東亞煙草株式會社營口製造所	營口	三,〇〇〇,〇〇〇	煙草	梱	六〇,〇〇〇	四,八〇〇,〇〇〇
米藥醬園	同	三〇,〇〇〇	醬油	石	二,五〇〇	六〇,〇〇〇
宮下木局	同	六,〇〇〇	製材	才	一,二〇〇	五,〇〇〇
小寺油坊	營口牛家屯	二,〇〇〇,〇〇〇	豆粕 豆油	枚 斤	八〇〇,〇〇〇 三,六〇〇,〇〇〇	一,〇四〇,〇〇〇 四三二,〇〇〇

營口硝子株式會社	營口	二〇,〇〇〇	硝子器		—	二八,八〇〇
盛進商行精米所	同	二〇〇,〇〇〇	精米	石	一,五〇〇	二三,五〇〇
旭龍公司	同	五,〇〇〇	酒及醬油		—	賣上高 一,〇〇〇
公隆行	同	不明	レイス絲		—	—
滿洲製紙合資會社牛家屯工場	營口牛家屯	一〇〇,〇〇〇	紙		準備中	—
三益公司	營口	—	鹽化加里、硫酸加里、炭酸加里		—	—
滿鐵遼陽工場	遼陽	二四九,六六〇	車輛及器具機械の製修	件	五,一〇〇	三四八,五〇〇
林洋行煉瓦工場	同	一〇,〇〇〇	煉瓦	箇	一,五〇〇,〇〇〇	一六,五〇〇
大矢組醬油釀造所	同	二〇,〇〇〇	醬油 味噌	石 貫	五九二 八,八〇〇	八,八八〇 二,二〇〇
奉天精米所	奉天附屬地	一五,〇〇〇	精米	石	一,七二〇	一二,六〇〇
西宮精米所	同	五,〇〇〇	同	同	八〇〇	九六〇
烏合石鹼製造所	同	五〇〇	石鹼	箇	八〇,〇〇〇	九,六〇〇
清澤鐵工所	同	一,二〇〇	鐵工具		—	八,〇〇〇
瀬川鐵工所	同	一,〇〇〇	同		—	三,〇〇〇
神谷燒酒公司	同	一,〇〇〇	燒酒	石	一,四四〇	六〇,〇〇〇
宮崎製瓦所	同	三,〇〇〇	瓦	箇	五〇,〇〇〇	一,七五〇
滿蒙化學工業合資會社	同	五〇,〇〇〇	製セラチン粉		準備中	
穂積玻璃工廠	奉天	一五,〇〇〇	硝子器		—	五二,〇〇〇

松茂洋行工業部	奉天	一五、〇〇〇円	煉瓦	箇	二、〇〇〇、〇〇〇	二、二五〇円
三五洋行玻璃工廠	同	四、〇〇〇	硝子器		—	三、五〇〇
勝弘精米所	同	不明	精米		—	—
順陽精米有限公司	同	同	同		—	—
渡邊製革所	同	同	製革		—	—
伊豫組醤油醸造所	同	同	醤油		—	—
義和順鑄鐵公司	同	五〇、〇〇〇	ストーヴ	箇	二、〇〇〇	六、〇〇〇
南満洲製糖會社	同	一〇、〇〇〇、〇〇〇	砂糖		準備中	
撫順(煉瓦工場	撫順	一五、〇〇〇	煉瓦	箇	一、三五〇、〇〇〇	一〇一、二五〇
千金寨製粉所	同	四、〇〇〇	麥粉 包米粉	石	四、八一九	三三、六九九
千金寨精米所	同	五、〇〇〇	精米	同	一、七〇〇	二五、五〇〇
東三號精米所	同	五、二〇〇	同	同	一、四二二	一三、七六四
⑦商會	同	二、五〇〇	高野豆腐	箇	九五、〇〇〇	四七五
四一商會	同	一、〇〇〇	豆粕、豆油	石	四〇〇	三二八
古城子土管、瓦製造所	撫順古城子	二、五〇〇	瓦 土管	枚 箇	一〇〇、〇〇〇 二、〇〇〇	四、〇〇〇 四、五〇〇
満洲製粉株式會社鐵嶺工場	鐵嶺	一、〇〇〇、〇〇〇	小麥粉	袋(六貫目)	三七四、三〇〇	八九八、三二〇
義和湧	同	銀三五、〇〇〇	燒酒	斤	二〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
倉岡煉瓦工場	開原	四〇〇	煉瓦	枚	五八〇、〇〇〇	四六四

上郡山煉瓦工場	同	二五〇	同	枚	二六〇、〇〇〇	二〇八
植木煉瓦工場	四平街	二、〇〇〇	同		四五〇、〇〇〇	三、一五〇
松茂洋行煉瓦工場	同	五、〇〇〇	同		—	—
濱田鐵工場	公主嶺	三〇〇	建築材料及家具	箇	八二一	九二七
久保田鐵工場	同	三〇〇	同	同	三九一	三一六
煉瓦工場	同	四、〇〇〇	煉瓦	同	一五〇、〇〇〇	一、八〇〇
満洲製粉會社長春分工場	長春	一、〇〇〇、〇〇〇	小麥粉	袋(六貫目)	一、一三〇、〇〇〇	二、八二五、〇〇〇
高橋商會製材工場	同	一〇〇、〇〇〇	製材	坪	九五、〇〇〇	一一三、〇〇〇
長春製材合資會社長春工場	同	一〇、〇〇〇	同	同	四〇、〇〇〇	四一、二〇〇
松永製材工場	同	三、〇〇〇	同	同	四、二〇〇	三、三六〇
吉長鐵工場	同	三、〇〇〇	建築材料及金屬類器具の修理		—	二、一〇三
朝日鐵工場	同	一、〇〇〇	鑄物類及諸機械破損の修理		—	二、五五〇
猪熊鐵工場	同	六〇〇	同		—	二、八六二
和登鐵工場	同	二、〇六六	同		—	四七八
和登煉瓦工場	同	八、〇〇〇	煉瓦		—	—
守平煉瓦工場	同	九、八〇〇	同		—	—
工棟組煉瓦工場	同	一一、〇〇〇	同	枚	三八二、〇〇〇	四、二〇〇
吉林燐寸株式會社長春支店	同	一八〇、〇〇〇	燐寸		—	—

名目	所在地	資本額	品名	單位	數量	價格
日清燐寸株式會社	長春	三〇〇,〇〇〇円	燐寸	噸	一八,二〇〇	二〇八,八〇〇円
伊藤硝子工場	同	一,〇〇〇	硝子器	打	三〇,六〇〇	九,三六〇
煤鐵有限公司製鐵所	本溪湖	大洋銀 七,〇〇〇,〇〇〇	製鐵	噸	三五,〇〇〇	二,八〇〇,〇〇〇
伊藤煉瓦工場	同	二〇,〇〇〇	煉瓦	箇	三,〇〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇
伊藤石灰工場	同	一,〇〇〇	石灰	斤	一,五〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇
野村石灰工場	同	一〇,〇〇〇	同	同	七,〇〇〇,〇〇〇	一七,〇〇〇
飯塚石灰工場	同	一二,〇〇〇	同	同	七,二〇〇,〇〇〇	一八,二〇〇
安東燐寸製材株式會社	安東	五〇,〇〇〇	燐寸軸木原木製材	尺締	一六,四二〇	八二,〇〇〇
鴨綠江製材無限公司	同	五〇〇,〇〇〇	建築材鐵道用製函	同	一〇〇,〇〇〇	三五〇,〇〇〇
山下商會製材所	同	五〇,〇〇〇	製材	同	一〇,七〇三	六四,二一四
石崎商店製材所	同	一〇〇,〇〇〇	同		—	年賣上高 四二三,五五五
加來商店製材所	同	一〇,〇〇〇	同		—	八〇,〇〇〇
川崎商店製材所	同	五,〇〇〇	同		—	二〇,〇〇〇
西播洋行精米所	同	一〇,〇〇〇	精米		—	四七,〇〇〇
勝武洋行精米所	同	三,〇〇〇	同		—	七五,〇〇〇
大東洋行精米所	同	一五,〇〇〇	同		—	三一,八〇〇
田中洋行精米所	同	七,〇〇〇	同		—	五九,〇〇〇
逢磨商會精米部	同	一七,〇〇〇	同		—	年賣上高 一〇七,五〇〇
日東洋行精米部	同	五〇,〇〇〇	同		—	同 六九三,〇〇〇
本莊精米所	同	五,〇〇〇	同		—	同 三〇,〇〇〇
西和精米所	同	一〇,〇〇〇	同		—	同 四六,三六〇
安東窯業株式會社	同	五〇,〇〇〇	煉瓦、瓦		—	同 四二,〇〇〇
松村瓦工場	同	五〇〇	瓦		—	同 二,〇〇〇
逢磨商會窯業部	同	五〇〇	煉瓦		—	同 三,〇〇〇
大生絲廠	同	八〇〇	柞蠶絲		—	同 一一,四〇四
吉田玻璃廠	同	一,五〇〇	硝子器		—	同 八,〇〇〇
吉林燐寸株式會社	吉林	一八〇,〇〇〇	燐寸	箱	約 長春を含む 二一,五二五	約 一〇〇,〇〇〇
北滿製粉會社	哈爾賓	五〇〇,〇〇〇	小麥粉	袋	約 五〇〇,〇〇〇	約 一,二五〇,〇〇〇
加藤醬油製造公司	同	不明	醬油	石	約 六〇〇	約 一〇,〇〇〇

諸工場の二　支那人經營の部

名目	所在地	資本額	製造品 品名	單位	數量	價格
宏記織物工場	旅順大島町	五,〇〇〇円	絹紬（大正四年以降染料及原料騰貴の爲め中止）	反	八二九	一,九〇六円
魁順窯	同	三〇〇	煉瓦	箇	八五,〇〇〇	四六八

雙福窰	旅順大島町	六〇〇円	煉瓦	箇	一二〇、〇〇〇	六六〇円
福裕窰	同	三〇〇	同	同	八三、〇〇〇	四五六
順記窰	同	四〇〇	同	同	一〇〇、〇〇〇	五〇〇
張乃娍	旅順管内	五五	石灰	斤	二、〇〇〇	一六
天興窰	同	六〇〇	同	同	二九七、〇〇〇	一、七八二
公記窰	同	五五〇	同	同	三〇〇、〇〇〇	一、六〇〇
裕盛窰	同	一七〇	同	同	二三八、〇〇〇	一、二五四
潘殿臣	旅順柳町	一〇〇	酢	升	四二二	八四
于鴻逵	同朝顔町	四五〇	黄酒	同	二七、一〇〇	六七七
王效義	同西町	六〇〇	同	同	三一、八〇〇	七九七
史潤亭	同黒金町	四〇〇	同	同	一四、八〇〇	三七〇
王緒德	同新市場町	四〇〇	同	同	一、八八〇	四七〇
孟奎三	同白金町	五〇〇	同	同	九、〇〇〇	二二五
福順成油坊	大連軍用地區	八〇、〇〇〇	豆粕	枚	五二一、〇〇〇	六五六、四六〇
			豆油	斤	二、一五〇、〇〇〇	二三七、四六八
成裕昌油坊	同	五五、〇〇〇	同	同	三一四、〇〇〇	三九五、六四〇
			同	同	一、二八八、五〇〇	一三一、三一五
聚成祥油坊	同	四一、〇〇〇	同	同	三八四、〇〇〇	四八三、八四〇
			同	同	一、五七六、五〇〇	一七三、九一二

東永茂油坊	大連土佐町	三〇、〇〇〇	同	同	四二八、〇〇〇	五三九、二八〇
			同	同	一、七三五、五〇〇	一九一、六八六
福元油坊	同軍用地區	三〇、〇〇〇	同	同	二六八、九〇〇	三三八、八一四
			同	同	一、一〇二、五五〇	一二一、七七七
新順洪油坊	同	二五、〇〇〇	同	同	一六二、〇〇〇	二〇四、一二〇
			同	同	六六三、〇〇〇	七三、二二八
義祥油坊	同	三五、〇〇〇	同	同	三九八、〇〇〇	三七六、四八〇
			同	同	一、二三〇、〇〇〇	一三五、八五四
同聚厚油坊	同	二五、〇〇〇	同	同	二〇九、〇〇〇	二六三、三四〇
			同	同	八六一、〇〇〇	九五、〇九七
乾聚和油坊	同	一九、〇〇〇	同	同	一八七、〇〇〇	二三五、六二〇
			同	同	七七二、〇〇〇	八五、二六七
裕成東油坊	同須磨町	二七、〇〇〇	同	同	一五九、〇〇〇	二〇〇、三四〇
			同	同	六五四、五〇〇	七四、八八六
豐成油坊	同軍用地區	二一、七〇〇	同	同	一八九、五〇〇	二三八、七七〇
			同	同	七七二、七五〇	八五、二四〇
同聚永油坊	同	二八、〇〇〇	同	同	二三五、〇〇〇	三〇六、一〇〇
			同	同	九六九、五〇〇	一〇七、〇八一
和生祥油坊	同	四〇、〇〇〇	同	同	一六一、〇〇〇	二〇二、八六〇
			同	同	六七一、〇〇〇	七四、一一二
德聚澄油坊	同小崗子	四〇、〇〇〇	同	同	一七九、〇〇〇	二二五、五四〇
			同	同	七四二、〇〇〇	八一、九五四
萬慶長油坊	同軍用地區	三〇、〇〇〇	同	同	二四四、四〇〇	三〇七、九四四
			同	同	一、〇〇一、八〇〇	一一〇、六四九

振成油坊	大連軍用地區	四〇、〇〇〇円	豆粕	枚	一九八、〇〇〇	二四九、四八〇円
			豆油	斤	八一九、〇〇〇	九〇、四五九
昇源油坊	同	三五、〇〇〇	同	同	二二〇、五〇〇	二七七、八三〇
			同	同	九一三、七五〇	一〇〇、九二四
泰豐源油坊	同	二五、〇〇〇	同	同	三二、〇〇〇	四〇、三二〇
			同	同	一二八、〇〇〇	一四、一四八
恒昌公油坊	同須磨町	二八、〇〇〇	同	同	一七四、〇〇〇	二一九、二四〇
			同	同	七一九、五〇〇	七九、四六九
同泰油坊	同軍用地區	二五、〇〇〇	同	同	一八四、〇〇〇	二三一、八四〇
			同	同	七六一、〇〇〇	八四、〇五二
德豐和油坊	同須磨町	二二、〇〇〇	同	同	一一二、〇〇〇	一四一、一二〇
			同	同	四六一、五〇〇	五〇、九七三
同聚洽油坊	同軍用地區	七、〇〇〇	同	同	一五一、〇〇〇	一九〇、二六〇
			同	同	六二六、〇〇〇	六九、一五二
義順甡油坊	同	三〇、〇〇〇	同	同	二一〇、〇〇〇	二六四、六〇〇
			同	同	八六九、〇〇〇	九六、〇二二
福聚恒油坊	同	二〇、〇〇〇	同	同	一一二、二〇〇	一四一、三七二
			同	同	四五九、九〇〇	五〇、七九六
恒昇油坊	同	二二、〇〇〇	同	同	一七一、〇〇〇	二一五、四六〇
			同	同	七〇七、五〇〇	七八、一四三
成德油坊	同	一〇、〇〇〇	同	同	五三、〇〇〇	六六、七八〇
			同	同	二二二、〇〇〇	二三、四一五
達昌油坊	同朝日町	一三、〇〇〇	同	同	一一二、〇〇〇	一四一、一二〇
			同	同	四六七、〇〇〇	五一、五八〇

信昌東油坊	同越後町	二〇、〇〇〇	同	同	一二一、〇〇〇	一五二、四六〇
			同	同	五一〇、〇〇〇	五六、三三〇
萊永春油坊	同軍用地區	八、〇〇〇	同	同	三〇、〇〇〇	三七、八〇〇
			同	同	一二〇、〇〇〇	一三、二五四
政興利油坊	同	八、〇〇〇	同	同	三九、〇〇〇	四九、〇〇〇
			同	同	一五六、〇〇〇	一七、二三〇
晋豐油坊	同小崗子	六〇、〇〇〇	同	同	三八二、〇〇〇	四八一、三二〇
			同	同	一、五七八、〇〇〇	一七四、二九〇
天興福油坊	同	三六、〇〇〇	同	同	三二五、〇〇〇	四〇九、五〇〇
			同	同	一、六四八、〇〇〇	一八二、〇二三
政記油坊	同	七五、〇〇〇	同	同	三六七、〇〇〇	四六二、四二〇
			同	同	一、五二六、〇〇〇	一六八、五四七
興祥恒油坊	同	四〇、〇〇〇	同	同	六〇、〇〇〇	七五、六〇〇
			同	同	二四〇、〇〇〇	二六、五〇八
同聚祥油坊	同	三六、〇〇〇	同	同	三八〇、〇〇〇	四七六、八〇〇
			同	同	一、五六七、二〇〇	一七三、〇九七
裕增和油坊	同	三〇、〇〇〇	同	同	二二八、五〇〇	二八七、九一〇
			同	同	九四四、七五〇	一〇五、三四八
雙和棧油坊	同	二一、〇〇〇	同	同	二〇三、五〇〇	二五六、四一〇
			同	同	八三五、二五〇	九二、二五三
安惠棧油坊	同	三〇、〇〇〇	同	同	一六〇、〇〇〇	二〇一、六〇〇
			同	同	六六二、〇〇〇	七三、一一八
福順成油坊支店	同	一〇、〇〇〇	同	同	八一、〇〇〇	一〇二、〇六〇
			同	同	三二四、〇〇〇	三五、七八六

除玉	長	復	天	洪	長	天	天				
家畜											
窯頂											
食	鉄	豊	順	盛	盛	登	盛				
乍刻											
家家											
窯同	窯同	窯同	窯同	窯同	窯同	窯同	窯同	金州管内			
湖洲の工業に鉄て											
二〇〇〇	一〇〇〇	三八〇	三五〇	八〇	七〇	八〇	二〇〇〇	小瓦鍋			
蜜鉢瓶	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同				

鉢瓦

同笛	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同
一組											
三三〇〇	三三〇〇	七五六	六五〇〇	一〇〇〇	五〇〇〇	一〇〇〇	一一〇〇	一一〇〇	七〇〇〇	一一〇〇	四三〇〇
六三〇〇	六三〇〇	五六	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇

一四八	一〇三	一〇八	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六
九六	一〇三	一〇八	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六

廣順	公玉	泰怡	成雙	德盛	盛順	福					
增	成昌	興	順	聚興	永盛	順					
盛	玉合	東	和福	成慶	和特						
油	鐵油	油	油	油	油	油					
坊金	廠同	坊同	坊同	坊同	坊同	坊同	坊同	坊同	坊同	坊大	坊小
州										闘	闘
										子運	
四〇〇〇	七〇〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
豆豆	請機製造修繕	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	豆豆
油組											油組
斤枚	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	斤枚
四九〇〇	九八〇〇	三三八四〇〇	五二四〇〇	三九六〇〇	一八〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇
九六〇〇	一	三三八四〇〇	五二四〇〇	三九六〇〇	一八〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇
四九三一	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六
九六	一〇三	一〇八	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六	一〇三	一〇六

天福園	金州	六〇〇円	黄酒	斤	一八、五五〇	一、二九九円
			清酒	同	四、一八〇	二九三
永興居	同	三〇〇	同	同	八、六六〇	六〇六
			同	同	二、八八〇	二〇二
寶興居	同	三〇〇	同	同	八、四五〇	五九二
			同	同	二、四五〇	一七二
長興居	同	四〇〇	同	同	九、七〇〇	六七九
			同	同	一、三六五	九六
同春館	同	八〇〇	同	同	二、〇〇〇	一四〇
			同	同	一、六七五	一一七
和興居	同	一〇〇	同	同	六、三九〇	四四七
			同	同	九〇〇	六三
中和居	同	二〇〇	同	同	五、一四〇	三六〇
			同	同	一、九六〇	一三七
義和居	同	二〇〇	同	同	七、一〇〇	四九七
			同	同	二、五八〇	一八一
榮發長	同	七、〇〇〇	荷馬車	臺（五〇円）	六三	三、一五〇
永遠興		五、〇〇〇	同	同（五五円）	一〇四	五、七二〇
呂家窰		五〇〇	石灰	斤	一二五、五〇〇	六二八
馮萬祿		一〇〇	同	同	一〇六、〇〇〇	五三二
順記窰		三五〇	同	同	一六三、〇〇〇	八一五
增盛窰		四〇	同	同	一〇九、〇〇〇	五四五
干湧		三〇〇	帽子	箇	二、五〇〇	五〇〇

董家溝炭礦	金州管内	一〇、〇〇〇	石炭		一	一
寧海粉廠	同	二、〇〇〇	粉條子	斤	二、七〇〇	四四〇
廣增油坊	普蘭店	一五、〇〇〇	豆油	斤	二五四、六一五	一三、九一五
			豆粕	同	五、四三七、五〇〇	一〇八、七五〇
				箇	一〇八、七五〇	
益興油坊	同	一〇、〇〇〇	同	同	八〇、一〇〇	七、二〇九
			同	同	六六五、〇〇〇	一三、三〇〇
				同	一三、〇〇〇	
潤興德	普蘭店管内	二、〇〇〇	同	同	六、〇〇〇	八四〇
			同	同	六〇、〇〇〇	一、九八〇
				同	一、二〇〇	
聚順樓	同	一、二〇〇	同	同	二八、八〇〇	三、一三三
			同	同	三六〇、〇〇〇	一〇、八〇〇
				同	七、二〇〇	
劉本同	同	二、〇〇〇	同	同	三二五	三二
			同	同	二、二五〇	七四
				同	四五	
信順窰	同	一五〇	瓦	枚	二〇、〇〇〇	一〇〇
			盆	組	七〇〇	二一〇
			煉瓦	箇	一、五〇〇	三三
和順窰	同	一五〇	同	同	六〇、〇〇〇	三〇〇
			同	同	七五〇	二三五
			同	同	三、六〇〇	五四

成順窰	普蘭店內	一五〇円	瓦	枚	五〇、〇〇〇	二五〇円
			盆	組	八〇〇	二四〇
			煉瓦	箇	二、五〇〇	三七
雙合窰	同	一四五	煉瓦	箇	一五〇、〇〇〇	一六〇
資成窰	舊普蘭店	一〇四	同	同	一一〇、〇〇〇	一一〇
長奐窰	同	二〇〇			—	—
長盛窰	同	二〇〇			—	—
慶奐窰	普蘭店內	一〇〇			—	—
楊殿仕	同	一五〇			—	—
義和窰	同	一五〇			—	—
方家窰	舊普蘭店	一八〇			—	—
德盛窰	普蘭店內	一七〇			—	—
永發窰	同	一五〇			—	—
劉新太	同	一〇〇			—	—
集源油坊	貔子窩	一〇、〇〇〇	豆油	斤	九九、二〇〇	一一、五九六
			豆粕	枚	一九、八四〇	二七、七七六
益昌油坊	同	八、〇〇〇	同	同	一九一、二五〇	二四、八六三
			同	同	三八、二五〇	五三、五五〇
雲集油坊	同	七、〇〇〇	同	同	一五三、五〇〇	一九、九五五
			同	同	三〇、七〇〇	四二、九八〇

永慶油坊	同	一〇、〇〇〇	同	同	一七七、二五〇	二三、〇四三
			同	同	三五、四五〇	四九、六三〇
常泰油坊	同	二〇、〇〇〇	同	同	一九五、〇〇〇	二五、三五〇
			同	同	三九、〇〇〇	五四、六〇〇
新順油坊	同	二五、〇〇〇	同	同	一五〇、九五〇	一九、六二四
			同	同	三〇、一九〇	四二、二六六
協隆油坊	同	一五、〇〇〇	同	同	一九一、二五〇	二四、八六三
			同	同	三八、二五〇	五三、五五〇
永興油坊	同	六、〇〇〇	同	同	一五四、五〇〇	二〇、〇八五
			同	同	三〇、九〇〇	四三、二六〇
兌隆油坊	同	一五、〇〇〇	同	同	一二九、〇〇〇	一六、七七〇
			同	同	二五、八〇〇	三六、一二〇
鄭德貴	貔子窩管內	一二〇	同	同	二〇〇	二八
			同	同	四〇	六〇
福合油坊	同	一一、〇〇〇	同	同	一三四、五〇〇	一七、四八五
			同	同	二六、九〇〇	三七、六六〇
福金油坊	同	一、〇〇〇	同	同	二六、三〇〇	三、六八二
			同	同	五、二六〇	七、三六四
東油坊	同	一、五六〇	同	同	一、八五〇	二五九
			同	同	三七〇	五一八
西油坊	同	一、六八五	同	同	一、八〇〇	二五二
			同	同	三六〇	五〇四
戴家油坊	同	二〇〇	同	同	一、〇〇〇	一四〇
			同	同	二〇〇	二八〇

鄭洪城	貔子窩管內	八五〇円	煉瓦	箇	一六、〇〇〇	三二四円
鄭春合	同	八五〇	同	同	四八、〇〇〇	六七二
張家窰	同	八〇〇	同	同	三〇、五〇〇	四二七
			瓦	同	一一、三〇〇	五七
天成窰	同	一、二五〇	同	同	二八、〇〇〇	三九二
			同	同	二一、〇〇〇	一〇五
天發窰	同	九五六	同	同	二四、〇〇〇	三三六
			同	同	一八、〇〇〇	九〇
天興窰	同	九三五	同	同	二七、〇〇〇	三七八
			同	同	一九、〇〇〇	九五
天增窰	同	八九七	同	同	二三、〇〇〇	三三二
			同	同	二一、〇〇〇	一〇五
天盛窰	同	六〇〇	同	同	一四、八〇〇	二〇七
			同	同	一一、〇〇〇	五五
德源海	貔子窩	一、二〇〇	燒酒	斤	三七、〇〇〇	五、五五〇
瑞興泉	同	一、五〇〇	同	同	二七、〇〇〇	四、〇五〇
新順號	同	二、〇〇〇	同	同	一五、一二〇	二、二六八
福興海	同	二、二〇〇	同	同	六一、三二〇	九、一九五
福順湧	同	七〇〇	同	同	一三、八〇〇	二、〇七〇
永成居	同	九三〇	黃酒	同	一〇、三四〇	五一七
德成居	同	四〇〇	同	同	一〇、四三〇	五二三
福興居	同	六〇〇	同	同	一一、三五〇	五六八
永盛居	同	七〇〇	同	同	一〇、二一〇	五一一
福海居	同	五〇〇	同	同	一〇、六四〇	五三二
常順祥	同	一三〇	醬油	同	六六〇	三三
王家房	同	一五〇	同	同	一、〇五〇	五三
于家房	同	一〇〇	同	同	七七五	三九

諸工場の三　滿洲支那人經營の部

名目	所在地	資本額	製造品	生産額
				一日の製造高
關東火柴公司	營口	銀三〇、〇〇〇元	燐寸	二六箱
東華興織布工廠	同	同 二〇、〇〇〇	綿布	六〇疋
惠中織布公司	同	同 一五、〇〇〇	同	五〇
魁興永織布工廠	同	同 五、〇〇〇	同	四〇
大業工廠	遼陽	同 八〇、〇〇〇	同	約八、〇〇〇
竹宜工廠	同	同 三〇、〇〇〇	同	約三、五〇〇
三林煙公司	奉天	同 二〇、〇〇〇	煙草	銀七八、〇〇〇元
官立織布工廠	錦州	銀一五、〇〇〇元	綿布	四、〇〇〇疋
第一織布工廠	同	同 一五、〇〇〇	同	六、〇〇〇
第二織布工廠	同	同 一〇、〇〇〇	同	六、〇〇〇
集成織布工廠	同	同 八、〇〇〇	同	六、〇〇〇
貧民習藝所	同	不明	同	三、〇〇〇
和聚正絲棧	安東	銀二〇〇、〇〇〇	柞蠶絲	四〇〇個
福增源絲棧	同	同 五〇、〇〇〇	同	五〇

名目	所在地	所有者又ハ代表者氏名	資本額	製造品	生産額
同同露亞粉會社	營口	フ	五〇〇〇〇〇〇元	豚毛梳選	同
同同露國製粉會社	營口	ケ、ス、エ、ム、サ、リ、ア、ヤ、ヒ、ベ、ル、ド	五〇〇〇〇〇〇留	參粉	同
同哈爾賓	營口	ケ、ス、エ、ム、サ、リ、ア、ヤ、ヒ、ベ、ル、ド	五〇〇〇〇〇〇	同	四、二一〇〇
同哈爾賓	營口	ケ、ス、エ、ム、サ、リ、ア、ヤ、ヒ、ベ、ル、ド	五〇〇〇〇〇〇元	同	五、六〇〇
同一面坡製粉會社	營口	カレ、バ、ヨ、ベ、ゴ、ル、ゲ、ヨ、フ、ル、キ、ン	不明	板麩參粉豆油	一一〇〇〇〇枚
同仕河露國製粉會社	營口	カレ、バ、ヨ、ベ、ゴ、ル、ゲ、ヨ、フ、ル、キ、ン	一〇〇、〇〇〇	同	二、一〇〇〇〇箱
同仕河露國製粉會社	營口	カレ、バ、ヨ、ベ、ゴ、ル、ゲ、ヨ、フ、ル、キ、ン	一〇〇、〇〇〇	同	一一〇〇〇〇枚
同仕河露國製粉會社	營口	カレ、バ、ヨ、ベ、ゴ、ル、ゲ、ヨ、フ、ル、キ、ン	一〇〇、〇〇〇	同	一一〇〇〇〇箱
同仕河露國製粉會社	營口	カレ、バ、ヨ、ベ、ゴ、ル、ゲ、ヨ、フ、ル、キ、ン	一〇〇、〇〇〇	同	一一〇〇〇〇枚
同一面坡製粉會社	營口	カレ、バ、ヨ、ベ、ゴ、ル、ゲ、ヨ、フ、ル、キ、ン	一〇〇、〇〇〇	同	一一〇〇〇〇箱
同一面坡

滿洲に於ける正金銀行特貸現況

大正五年十二月末の正金銀行特別貸出金現在高は金貸付では二百九十三口百九十三萬六千七百八圓銀貸付では三口二十七萬八千六百圓で同年六月末の金貸付の二百八十一口百九十八萬四千四百六十五圓銀貸付の四口三十一萬一千三百圓に比較すれば金貸付では口數では十二口を増して居るが金額では四萬七千七百五十七圓を減じ銀勘定では一口と三萬二千七百圓を減じて居る今地方別業務別により其の貸出金額を示せば次の通りである。

正金銀行特別貸出金明細表

（大正五年十二月三十一日現在）

業務別＼地方別	大連		臭水子		鞍子高		普蘭店		三十里堡		旅順		營城子		牛莊	
	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額
一、運送業																
海運及陸運	5	七〇六五円														
二、農業及牧畜																
農業	4	七、一〇〇	1	一五〇〇			1	三〇九九九	1	一、五〇〇			2	三、五〇〇		
牧場及牛乳搾取	3	一二八〇〇													1	一〇〇〇

三、

| | | |

業務別 / 地方別	合計		雜業		倉庫業		醫業		浴場業		寫真業		貸家業		旅館業	
	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額
瓦房店	169	二六六〇〇	13	四九七	1	二四五	4	二〇一四七	1	六〇〇〇	1	四〇〇	16	五〇一四七	1	四七〇〇
大石橋																
熊岳城	3	六五〇〇														
遼陽																
鳳凰	1	五〇														
安東	2	二〇四五														
奉天	1	一五〇〇														
撫順	25	三五八四三	2	四二五	1	二〇四〇	1	一四三五	3	六〇〇〇	1	三一五	1	四六三〇	1	三七〇〇
本溪湖	2	三五〇〇														
	16	四九七三五〇	1	一八					1	一八七五			1	三三八七〇		

業務別 / 地方別	電燈電力供給及水道	土木建築請負造	洋式家具製造	「セメント」製造	燐寸製造	精米製造	硝子製造	油脂製造	瓦煉瓦製造	鐵工業	石鹽製造	煙草製造	油脂製造	醸造
	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額	數口	金額
瓦房店	1	一〇〇〇												
大石橋													1	二七〇〇
熊岳城														
遼陽														
鳳凰													1	一〇〇〇
安東														
奉天														
撫順	1	八七五九	1	一〇					1	一〇九〇〇〇				
本溪湖														

業種別 / 地方別	雜貨商業	旅館業	家具商業	雜貨商業	貸金業	質物商業	貴金屬時計商業	貴金屬商業	貴金屬商業	木材商業	洋服商業	新聞紙商業	書籍商業	食料品商業	和洋雜貨商業	雜貨商業
數口	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
金額 円	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二六〇〇	三一六	—
數口	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
金額 円	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

| | | |

合計	雜貨商	倉庫業	爲替業
2	9	1	1
二五二〇〇〇			
五一〇五九七			
七〇四			
4			
五八五六一			
六一二六			
7			
一一六五〇〇			
3			
三六二〇			
2			
一九五〇〇			
4	1		
一一九七〇〇	三六〇〇		
3	293	18	1
銀 一一七八六〇〇	一九三六七〇八九	一一	一四
	三四〇〇	九四七一	一一八一三一
	一四五〇〇	六	一四五〇〇
	二五		

烏丹城事情

本事情は當部三原屬員が大正五年十月該地方の調査報告せしものにして多少冗長に亙る點もあるが該地方の組織すべきには好材料と思考し其儘記載して參考に供することゝした。

一、一般狀況
　イ、官公衙
　ロ、市內交通機關及衛生
二、交　通
　イ、商業通路
　ロ、運送機關
　ハ、通信機關
三、商　業
　1. 商戶營業別
　2. 雜貨舖及商品
　3. 棧店及居店
　4. 外國商店
　5. 其　他
　6. 開　市
　7. 商務會
四、物資集散及取引狀況
　1. 輸入品、輸入徑路及取引狀況

2. 土產品
　イ、農產物
　ロ、畜產物　附牧場及看守料
　ハ、藥草及菌類
五、製造工業
　イ、燒鍋(酒造業)
　ロ、磨房(製粉業)
　ハ、毡行(毛氈製造業)
　ニ、油行(搾油業)
　ホ、蠟行(蠟燭製造業)
六、金融及通貨
七、度量衡及勞銀

一、一般狀況

烏丹城は蒙古語ボロホトと謂ふ、赤峰を距る北方百八十支里に位しチャカンムルホの平野に發達せる一市場である、往時は赤峰に次で久しく東蒙に於ける重要商業都市として又蒙古行商隊の根據地として可なりの繁榮をなして居つたが北方林西縣東方開魯縣の開設と蒙匪の跳梁とにより從來領有せし商業範圍は多く上記兩地に奪はれたりと雖猶當地行商人は遠く大小巴林の南部並に阿爾科爾沁の一部及び東翁牛特の一部を領有し赤峰の前衛として發展すべき將來を有して居る、市街は東西二支里南北一支里の土壁を以て圍繞せられ人口三千、戶數三百餘商戶約百を有し街衢雜然たり、大なる商戶は主として第四崗及び稅局の街にある。

イ、當地に於ける官公衙

警察事務所　赤峰縣中第八區より第十一區に至る四區を管轄す舒土標（貴陽人森芝と號す）之れが長たり。

熱河巡防馬隊劉營第二連　連長を贊有淸と稱す。

電報局　張克均(浙江人)之れが長たり。

徵收局　赤峰分局にして局長を常福瑾(直隸寧晉縣人善亭と號す)と云ふ其下に書記三、巡査二、斗級二あり。

商務會　張禮(本地人)之が會長たり。

鹽稅局　赤峰分局にして局長を何信臣(順天府房山縣人)と稱す。

郵便代辨所　長盛隆藥舖の代辨に係る。

初等小學校　校長は于金璋（赤峰人琳如と號す）にして生徒二班三十餘名あり。

東爺牛特貝子府公爺局　富明安之に長たり。

公爺局に就て附言して置かねばならぬのは滿蒙の統治關係である、公爺局は單に蒙古人間の訴訟事件を處理する處で貝子府（烏丹城）、蒙政廳（熱河）、藏蒙院（北京）の順に再審する、滿人對蒙人の訴訟事件中些細なるものは烏丹城警察事務所に於て裁判し少しく大なる事件は赤峰に押送し更に審決出來ざる場合は熱河蒙政廳に送る蒙政廳には旗人のみを以てなる蒙旗科がある。

ロ、市内交通機關及び衛生

市内の交通機關に至つては殆んど論ずるの價値はない街衢は亂雜で而かも道幅三四間甚しきに至りては一臺の車輛も辛うじて通行し得る狀況だから市内の交通機關は勿論附近村落に至る小車さへ十臺に足らない位ゐで多くの場合返車又は騎馬による外はない。

衛生設備の不完全なのは當地ばかりに限つたわけでなく支那全般通有の事だが此處も同樣である唯一つの澡堂（湯屋）があつて三日に一度浴水を交換して居るのに徵しても推測が出來るであらう。

二、交　通

イ、商業通路

今當市を中心とせる商業通路並に距離を示せば

林西街道	二百八十支里
赤峰街道	百八十支里
大坂上街道	二百四十支里
敖漢街道	百六十支里
廣德公街道	八十支里
錦州街道（西海口）	六百三十五支里

の六つである左に各街道の概況を述べて見やう。

林西街道　本道路は交通少なく貨物は直接赤峰より仕入るゝを以て（土城子經由、哈把沁に木橋あり）此道路は比較的寂寞の感がある。

赤峰街道　赤峰烏丹城間は大道にして大車の通過に支障なく甘草に次で鹽の南下するものが多數ある。

大坂上街道　本街道は蒙古行商隊の通過路ではあるが商業路としては價値がない。

敖漢街道　は沿途蒙古人部落のみで且匪賊の出沒盛んだから支那人は多く之れを通行しない。

廣德公街道　は穀物の輸送路として有名なるも相場の關係上赤峰に直輸せらるゝから此道を採るものも亦甚だ稀である。

錦州街道　は甘草の輸送路として且又雜貨輸入路として駄子の交通頻繁である今是が通過村落及び里程を擧ぐれば

烏丹城—四〇—白銀華（支里）—四〇—房身口—四〇—小哈拉道口—四〇—小河沿—三〇—步登高—四〇—菜園子—三〇—三官營子—二〇—新地—八〇—四家—五五—青溝梁—八五—朝陽—一八〇—錦州

因みに西海口に至るには新地から分岐して次の各地を通過する

新地—四〇（支里）—老楊坡—四〇—馬明水—四〇—黃家店—二〇—八里堡（朝陽を距る八支里）—四〇—戴家口—四〇—二十家子—二〇—大屯—三〇—沙鍋屯—四〇—虹螺峴—四〇—高橋—五—西海口

赤峰に至るには

馬明水—將拜臺—五〇（支里）—海山鎬—四〇—老新店—五〇—黑水—三〇—莫里河—四〇—赤峰

錦州街道は駄馬に依り運貨せらるゝも車馬の往來に支障なく八日間にて到達する事が出來る、駄馬は毎月必ず一回往復して居る是れによる輸出入品の主なるものは

輸出品　牛皮、羊皮、狗皮、甘草

輸入品　打連布、洋大線、各種紙類、棉花、紅白糖、香油、蹄鐵、其地雜貨

にして運賃は毎百斤小洋三元、稅金は蘭家屯稅局にて棉花毎百斤大洋三角三、烏丹城にて落地稅三角三を課せられる。

序に各地に至る運賃及び行程日數を示せば

至　赤　峰	二日乃至三日	毎百斤	三　吊—五　吊
至　林　西	四日乃至五日	同	十　吊—十四吊

至　錦　州　八日乃至九日　毎百斤　十五吊—三十吊

其他は蒙古人又は支那人自家用の牛馬車又は駄運によるが爲め一定の運賃はない。

ロ、運送機關

當地に於ては牛馬車を主なる運送機關とするも馬車は赤峰、林西に多く錦州街道は驢騾駄子、大坂上及廣德公其他蒙古奥地との交通は牛車によるものが多い、蒙地は騎馬又は牛車に依り同地方への送荷には其返車を利用して居る。

ハ、通信機關

郵便　當地に代辨所を置き林西よりの歸路又は往路立寄るものにして隔日とす、一箇月發送信書平均數は

封書　六、七百件　書留　三十件　小包　二十件

端書を發送するものは極めて稀である。

電報　南赤峰、北林西に通ずる一箇月の電報取扱數は僅かに三十餘件にして其收入額四十元にも達しないさうだ、今十月一日より同月二十九日に至る發電數を擧ぐれば

林西　五　熱河　十二　赤峰　二　建平　一

因みに林西では羅馬綴の電報一切取扱はず總て電報取扱者の了解し得るものでなければ受けつけない。

三、商　業

今烏丹城に於ける各種輸出入品を見るに其大部分は赤峰經由にして僅かに甘草毛皮の錦州西海口に直接輸出せられ其返駄子の布疋棉花紙類を輸送し來るに過ぎない從來林西、開魯の發展しない以前にありては奥地蒙古の通商は當地を經由して行はれたけれども現今に於ては林西の輸出入品は直接取引せられ東方蒙古の行商は開魯に其範圍を奪はれ市況逐日衰色を示しつゝあるけれども取引の三分の二は蒙古人の顧客であるから未だ赤峰の前衛として蒙古行商隊の根據地として東蒙に於ける主要都市たるを失はない。

1. 當城に於ける主なる商戸營業別

雜貨舖	三〇	燒鍋	一	藥舖	二	磨房	一一
車店	一一	皮店	一二	成衣舖	三	紙房	一
靴鞋舖	三	飯館子	四	鹽局	一三	染房	七

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

鐵匠舖　五　毡子舖　二　蠟行　一　木匠舖　一五
澡堂　一　小店　五　麻行　九

等であるけれども赤峰、錦州、林西等取引關係密切なる各都市の支店又は本店にして何れも各地と聯絡を有し數種の營業を兼ねざるはない。

2. 主なる雜貨舖（帖子發行の）

店名	掌櫃的姓	在籍地	店名	掌櫃的姓	在籍地
榮發合	王	赤峰	瑞成祥	時	口裡
福聚合	于	玉田	福德慶	趙	同
榮陞號	黃	口裡	德增合	張	同
福盛成	張	同	益合成	劉	同
福陞德	崔	同	益合泉	周	本地
榮增德	王	同	會源發	王	卉城
協慶昌	張	同	福興隆	劉	本地
德順昌	羅	錦州	福元德	李	山東
福盛和	黃	赤峰	聚德永	李	山西
永德昌	松	口裡			

主なる商品に就て附言すれば

イ、綿布

花旗布　龍頭牌最も賣行良好にして幅裁尺二尺七寸、長百七、八尺、毎疋城錢二十吊餘、其他馬狗、單牛頭、三兎等は價格高き爲め本年春入貨せしのみで其後影を見ない。

打連布　雙鳥、龍頭牌にして他は賣行が惡い、雙鳥は幅二尺二寸長百尺あり。

愛國布　實砥北京より來る、婦人及び子供の著用するものにして蒙古人は花旗、打連を購ふもの多く愛國布は是等に比し需用が少ない。

頂尖布　新集產にして一梱三十疋、長大尺四十尺幅八寸にして白布卸相場四吊二百（赤錢）漢人の需用多く蒙古人は少ない。

中尺布　錦州より來るものにして幅大布尺五寸、蒙古人の需用あるも大尺布に及ばない

白布最も賣行が良い。

ロ、綿絲

藍魚印（一梱四十碼、城斤八斤半、市價大洋六元）あるも腿帶子等織布するもの少なきを以て銷路は少ない。

ハ、棉　花

悉く錦州より來る今發貨店永順店に付き聞くに錦州にて仕入れの際は一斤（十六兩）小洋四角なるが當地にては賣價同一なれども重量は十二兩である。

ニ、腿　帶　子

東鄉牌、孔雀牌等の日本製品あるも賣行良きは支那製帶子だ。

ホ、カタン絲

獨逸及び佛國製多く掛國旗、フクロ、錨、鐵亞鈴印等多く一箱一打入一吊三百三十文とす。

ヘ、石　鹼

眞黑香皂、仙鶴、鹿、日光、桂蘭齋等賣行良く日光印一箱二箇入市價二十仙、桂蘭齋一箇二仙にして何れも北京、天津より輸入す後二者最も銷路が廣い。

ト、白　粉

支那製如意爲記（上一箇一角、下一箇三百四十文）、氷磨粉（一箇四百文）等が多い。

チ、砂　糖

蒙古人に賣行良きは紅糖にして白糖少なく何れも湖南產と稱するも信疑明かでない。

リ、茶

蒙古人に賣行良きは磚茶、廣茶にして何れも多倫より來る、廣茶一串は三簍にして一簍の重さ十斤小賣相場小洋三元卸賣二元六角なり、磚茶は一箱大なるもの六十四塊小なるもの三十二塊入にして一箱（大）卸賣大洋票二十二元小賣二十五元なり、多倫より烏丹城に至る運賃は每百斤城錢十二吊にして多く駱駝背にて來り牛車によるものは稀れだ、多倫の茶莊は大合店にして當地に於ける卸商は福盛和（黃姓赤峰人）である。輸入額廣茶一箇年五、六千串、磚茶一千五百箱に達する。

ヌ、海　產　物

昆布、海參、蝦、鮑等錦州より輸入す。

ル、染　料

藍靛は圍場より輸入するも各種染料は天津より來る。

ヲ、燐　寸

黄燐のみにして跑馬、漢印、二騎馬等悉く日本品である。

ワ、頭髪油

佛國製頭髪印(一瓶六角)、英製芙蓉印(三角)を見るも銷路は少ない。

カ、西洋蠟燭

鷹印多く支那製は稀である。

ヨ、石　油

美孚、亞細亞共に代賣店なきも美孚銷路廣し、亞細亞は油煙多しとて好まない樣だ日本品はまだ見當らない。

タ、齒磨粉

ツバメ、ライオン及び支那製共和牙粉あるもライオン賣行良し。

レ、木　材

多く圍場より來る。

ソ、卷煙草

東亞煙はアイリス其他二三を見るも英美煙草の代售所は榮發合にして一箇年の賣上高及び卸相場を示せば

種類	卸相場	毎包	一箇年賣上高
孔雀	十二吊五	五〇盒	二箱乃至十箱
單刀	二十五吊	同	
雙刀	十九吊五	同	二、三箱
品海	二十二吊	同	
雲龍	十四吊	同	
三砲	六吊	五〇本	

賣行良きは孔雀、雙刀の二種にして雙刀牌は箱を好むもの〻樣だ。

3. 棧店及び皮店

當地には糧店なるものなく總て店に宿泊し賣者自ら買者を求めて取引をして居る、今主なる店名を擧ぐれば

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

店名	掌櫃的	在籍地	夥計	資本	房租	站錢 大車	站錢 小車	站錢 駄子	站錢 客	備考
崔家店	崔孝石	口裡	四	—	—	一吊五百文	二仙	—	糧石囊者宿泊す	
韓家店	王玉亭	同	一〇	一千餘吊	大洋一五	一吊五百文	四仙	四仙	朝陽、錦州の駄子、糧石車多し	
洪昇店	三洪恩	平泉	一〇	一千餘	一〇〇	八百文	四百文	三仙	三仙	糧石の車及駄子
永順店	王國勳	昌黎	二〇	二萬餘	一〇〇	—	—	—	—	錦州の駄子
張家店	張德	朝陽	八	—	—	五百文	—	—	—	糧石車多し
曹家店	曹慶元	山東	五	—	—	五百文	—	—	—	
德利興	劉文季	順天	一七	—	一二〇〇	—	—	—	—	赤峰よりの車輛、錦州よりの駄子
德聚棧	張緒春	蘇州	三〇	三萬餘	二〇〇	—	—	—	—	甘草の取扱店、布疋の代賣店
興盛店	張子星	山西	—	—	七〇〇吊	なし	同	同	同	蒙古行商人の宿泊
寶豐店	黃興	直隸	—	—	—	—	—	—	—	旗人の宿
公發店	王京奎	本地	八	—	—	一吊八百文	—	騾馬一〇〇文	—	牛馬羊の仲買店

皮店を擧ぐれば

店名	掌櫃的	在籍地	店名	掌櫃的	在籍地	店名	掌櫃的	在籍地
德昇亭	郭		慶豐泰	王	寶砥	裕盛恒	姜	錦州
德裕興	呂	錦州	德記棧	張	口裡	裕德成	陳	口裡
德聚棧	張	蘇州	乾玉豐	同	同	三慶長	賈	同
德春泰	谷	朝陽	榮林和	王	建昌			
廣泰興	夏	口裡	萬興和	王	口裡			

4. 外國商店

外國商店が毛皮の出廻期に臨時に出張員を派し來るは稀にして何れも三聯單を支那商店に賣却し支那商店は單に外國商店の旗を掲げ毛皮の買收に從事し外國商店と直接何等の關係を有するなく甚しきに至りては同一名義の外國商店四五に及び互に其數をも知らざる奇觀を呈して居る今當地に於ける外國洋行名は

魯麟洋行　禮和洋行　仁記洋行　福山洋行　瑞記洋行

にして主として羊毛の買收をなして居る。

5. 其　他

イ、廠行(多く雜貨店の兼業)の主なるものを示せば。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

店名	掌櫃的	在籍地	店名	掌櫃的	在籍地	店名	掌櫃的	在籍地
永德興	朱	赤峰	福增廣	夏	赤峰	洪昇永	馬	本地
福盛昌	趙	玉田	魁盛號	苑	本地	永聚成	方	同
永慶和	田	本地	福盛魁	沈	同	福義成	史	玉田

毎年輸入額一萬餘斤にして赤峰最も多く錐子山少し、本地産は擧ぐるに足らない其運賃は赤峰毎斤一仙、錐子山(天寶山)毎斤一仙半にして小賣相場は

別廉　毎斤　二角二仙　　混廉　一角半

ロ、鹽　局

當地には赤峰蒙鹽分局がある、其下に左の鹽局ありて鹽販賣に從事して居る。

甲　福盛和、永德興、三合隆、永德昌

乙　なし

丙　聚發合

丁　福盛成、寶泉長、三合永、福合盛、福成德、永盛棧、義益和、吉慶昌

にして甲級の四家は自ら西烏珠穆沁に採鹽に行き丙、丁は甲級より卸賣を受けて販賣して居る。

一箇年の營業税は

甲　五十元　乙　二十元　丙　十六元　丁　六元

ハ、染　行

店名	掌櫃的	在籍地	店名	掌櫃的	在籍地
福盛染	張	口裡	聚昇染	張	赤峰
永盛染	劉	本地			
源增永	劉	本地	義和永	李	饒陽
福義增	張	口裡	德盛染	李	口裡

(以上藍色)

(以上雜色)

藍靛は本地に産するもの少なく悉く圍場産にして各行は直接に買入れて居るが毎百斤に付き銀六錢の運賃を要する。

福盛染に就き見聞した所によれば該行の染料一箇年使用高は二萬斤に達す、而して染料

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

は天津より來るものは圍場産に比較して高價なるも色が強い、圍場の相場は毎百斤大洋九元にして馬車(七頭曳)にて積載し來る、藍色に染むる布は頂尖布大部分を占め大線布は少ない、毎百斤につき淺藍なれば六十疋(頂尖布)深藍は三十疋を染色する事が出來るさうである。

其他雜色の染料は何れも天津から輸入される。

ニ、飯館子

店名	掌櫃的	在籍地	店名	掌櫃的	在籍地
廣慶館	朱	本地	義順園	孫	本地
東成園	關	同	三慶園		(仮住)

其他小館子二十四、五戸あり今廣慶館につき聞くに顧客は漢人二、蒙古人一の割合にて一日平均百人位(冬季往來頻繁時に於て)の客があるさうである。

ホ、藥　行

店名	掌櫃的	在籍地	店名	掌櫃的	在籍地
長盛隆	高	河南	大德昌	馮	河南

ヘ、澡　堂

從前二箇所あつたが現在は肅姓の開業せるもの一箇所にして三日に一度浴水を交換し若し註文により水を換へんとする時は大洋二、三元を要求する、浴客は漢人のみにして蒙古人は一人もなく一日平均七、八十名内外なりと。

6. 開　市

糧市、牛馬市及柴市共に稅局又は關帝廟前に於て毎月二、四、七、九の日に開かれ午前六時頃より十二時に至る間蒙支人雜踏し通行が出來ない場合がある。

7. 商務會

商務會は十年以前よりの開設に係れども大正四年訴訟事件の爲め一時閉鎖し昨年九月再び開會せるものにして現今に於ては單に官憲又は兵士の來往に要した金錢及土城の修築に要

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

する會計事務等を掌る丈けで會費は巡警費と共に各商戸の負擔に歸して居る會費は一箇年一萬餘吊を要すと。

四、物資集散及取引慣習

當地は原と赤峰の分身として發達せるものなれば輸出入品共多く赤峰を經由し錦州との直接取引は少數の諸雜貨の輸入に止まつて居るが林西、經棚、開魯に先ち發達せるものなれば現在に於ても遠く阿爾科爾沁及び巴林旗は烏丹城行商人の勢力範圍に屬して居る樣だ。

1. 輸入品

當地は蒙古人を離れて商業なく蒙古人を離れて物資の來集するものなければ當地輸入貨物は少數の漢人向貨物を除く外は悉く蒙古人向きのものにして開市日に來集する附近蒙古人の數は遙かに林西、經棚を凌ぐ有樣である。

イ、輸入徑路

今各店に就き其商品の輸入徑路を見るに

韓家店　は朝陽、錦州より來れる駄子其他赤峰より林西方面に至るもの〻宿泊する處にして錦州よりは大線布、紅白糖、香油、各種布疋、蹄鐵其他雜貨を輸入し何れも當地に於て消費す、駄子は馬、騾、驢あり毎月必ず百餘の駄子錦州より來る。

調査當時圍場より松材を積載せる牛一頭曳の車輛十餘臺來鳥せしが一臺十本(一本三十斤)を積載し居れり、當地の相場は一本三吊五乃至六吊なり、圍場に至る里程三百支里にして七日を要する。

永順店　錦州よりの各種雜貨輸送駄子毎月多き時は百餘駄に達し少なきも八十頭を下らない。

運賃は毎駄(二百四十斤)大洋票四元にして小駄子は九十斤内外を積載するも一件百二十斤の運賃を支拂ふ。

德利興店　錦州より駄子毎月百五六十頭來り主に紅白糖、紙類、雜貨を輸入する、運賃は一般に陰曆七月前は安きも普通百斤につき城錢二十吊文である。

赤峰より雜貨を輸送し來るものは總て此店に宿泊し毎月百臺を算するが夏期は少ない。

大車並に駄子は返り荷として毛皮、甘草を積載し歸るもの多く特に昨年は甘草の輸出多額であつた。

德聚棧　甘草の取扱店並に布疋の代賣所にして新集より愛國布、打連布(布尺にて幅八寸、長四丈)を、錦州より花旗布、打連布を輸入す、新集よりの運賃は赤峰まで一塊(三十疋)十吊、赤峰より烏丹城迄一塊五吊(城錢)にして赤峰よりの再輸入額一箇年百塊内外である。

福盛和　多倫より磚茶、廣茶を輸入す、詳細は前商品の項に記したり。

ロ、雜貨取引慣習

雜貨仕入方法に二あり、大なる商舗にして仕入地たる赤峰、錦州に取引先を有するものは直接仕入をなすも中以下の商舗にして取引先を有せざるものは發貨店を介して取引す、其際發貨店は手數料を徴收するが其額は店によりて多少異なり一定せずと雖も民國五年正月六日永順店、德利與の合議に係るものを示せば

(一)　貨　　物

契約濟の貨物にして客自ら賣却せるもの	賣主より一分を徴す(客自起貨)
客自ら賣却せるもの	賣主より二分を徴す(客自賣貨)
店の媒介により賣却せるもの	賣主より三分を徴す(店賣客貨)
客に糧石及麵、油を購買し與へたる時	買主より二分を徴す(與客買糧石、麵、油)
店が石炭及び木炭を代賣せる時	賣主より五分を徴す(客賣煤、炭)
店が黑磁及び黑煙子を代賣せる時	賣主より五分を徴す(客賣黑磁、黑煙子)
店が果物を代賣せる時	賣主より五分を徴す(客賣果品)
店が皮類を代賣せる時	賣主より三分を徴す(客賣皮張)

備考　客は店に貨物を預け且店に宿泊するものとす。

(二)　牲畜賣買手數料(賣買兩者負擔)

羊	每頭	小錢 三百文	猪	每頭	小錢 一吊
騾	同	八吊	牛	馬 同	三吊
驢	同	一吊五	駱駝	同	十吊

備考　(一)、(二)共に店が各種稅金を代納する際手數料を徴收するものとす。

(三)　宿泊料、車底及び站錢

店飯	一日	小錢 一吊六	客宿泊	一日	小錢 二百
馬站	同	二百四	大鐵車	同	一吊
驢站	同	二百	雙套車	同	七百

花咕嚕車　一日　小錢　七　百　轎車　一日　小錢　七　百

單套汗車　同　六　百　小蒙古車　同　五　百

備考　賃却する貨物を運び來りたるものには徴收せず。

以上の如くにして萬一是に違反せる時は百吊の罰金を徴するの規定がある。

代價支拂の方法は鏢期拂、節季拂及び現金拂の三種あり。

鏢期拂とは一年六回鏢局の往復する際是に託し現金輸送をなすものにして其間の利子は例へば布疋の時は百吊に對し四吊を附するが如く大抵一箇月二分の利息を拂ふが貨物賣行の良否により多少の増減がある。

節季拂とは陰暦五月五日、八月十五日及び年末拂にして例へば一節季拂として砂糖百斤四百吊を仕入るゝ時は節季に至り四百二十吊を仕拂ふのだが當地には錢舖及び票莊等の金融機關が無いから大概鏢期拂及現金拂による。

2. 土　産　品

烏丹城を中心とせる土産品は農産物畜産物及び藥草にして他に多少の製造工業品あるも擧ぐるに足らない。

イ、農　産　物

當地税局に就き調ぶるに一箇年間に當地に來集する農産物は細糧(瓜子、小麥、芝麻の類)一千二、三百石、粗糧(粟、高粱、大小豆の類)一千三、四百石に達する、是等は廣德公、穆家店、頭分地等より來るものなるも附近燒鍋は地方産の雜穀を原料とするから直接當地に來集するもの比較的に少なく且つ穀物相場は一般に赤峰に比し安價なれば普通の場合は赤峰に出づるを例とする。

今各店につき來集車輛數(牛車一輛一石内外を普通とす)及び集散狀況を聞くに

崔家店　西百支里沙冷庄(多)、六十支里達拉罕腦庄等より來る糧石車(穀物積載車輛)宿泊し春は一箇月平均十五臺、夏十臺、秋百餘臺、冬百餘臺の來集あり。

韓家店　附近より來るもの少なく白銀溝庄(百支里大道)より來る大小車輛駄馬多く夏七八臺、秋三百餘臺、冬三百臺内外あり。

曹家店　張家店と共に春夏は營業せず秋冬穀物集散期に至り開業するものにして秋は一箇月三百餘臺あり、何れも西百四、五十支里の地方より來るものにして南方より來るもの其の約十分の一である。

當地には穀物問屋なるものなく以上列記せるは皆車店(車宿)である穀物買出人は是に宿泊して買出をする然し直接各個に取引するものは稀にして多くは開市前日に附近より糧石車來集し翌朝市場に於て賣買する萬一開市日に於て賣却することが出來ない時は次の開市を待ち賣却するか又は店に預け置き相當の相場になつた時を見て取引をする。

調査當時の相場を示せば

種別	十月二十七日	十月二十九日	十一月一日	十一月四日	大斗(一斗斤量)
小麥	一七・〇—一四・〇 帛	一五・六—一四・五 帛	一六・〇—一五・〇 帛	一五・二—一四・五 帛	六五 斤
蕎麥	八・二—七・五	八・六—八・四	八・五—八・〇	八・一—七・八	六〇
高粱	八・〇—七・八	八・六—八・〇	八・二—八・〇	八・二—八・一	五三
元豆(大豆)	一三・〇—一〇・〇	一二・〇—一一・〇	一三・五—一〇・〇	—	七〇
元米(黍)	一六・〇—一四・〇	一四・〇—一三・〇	一四・五—一三・〇	—	七五
吉豆(大豆の一種)	一七・三—一五・〇	一七・〇—一六・〇	一六・五—一六・〇	一七・五—一七・〇	八〇
谷子(粟)	七・五—七・〇	—	—	—	六五
小米(精粟)	一六・〇—一四・〇	一五・〇—一四・〇	一五・三—一四・〇	一五・〇—一四・五	七五
燒酒	一・〇—一六・〇	一・〇—一六・〇	一・〇—一六・〇	一・〇—一六・五	一
青鹽	三〇・〇	三二・〇	三二・〇	三〇・〇	一〇〇
豌豆	一〇・〇—九・二	一〇・〇—九・〇	一一・〇—九・〇	一一・〇—一〇・〇	八〇
麻油	—	一六五・〇—六〇・〇	六五・〇—六〇・〇	八〇・〇—七六・〇	一〇〇
白麵	〇・三六	〇・三六	〇・三二	〇・三二	一
瓜子兒	—	—	—	(少)	六五
芝麻	—	—	—	六〇	六〇
太麻子兒	—	—	—	—	六〇
小麻子兒	—	—	—	—	五〇
芥花	—	—	—	—	五五
大麥	—	八・五—八・〇	八・五	七・五	五五
合豆(黑大豆)	一〇・〇—九・〇	一一・〇—一〇・〇	一一・〇—一〇・〇	一二・〇—一〇・〇	七〇

備考　以上は毎年の相場である、當市には原と粗斗、細斗及加三五斗の三種があつて、粗斗は細斗より一升餘大にして加三五斗より小いから小斗と呼んで居たが現今は一般に粗穀細穀共に細斗を用ゆる故に小斗なるものなく唯細斗及加三五斗の二つだけである細斗(市斗)は又大斗と呼び市場取引に用ひ加三五斗は專ら百姓の用ゆるものにして大斗より三升五合大い。

ロ、畜　産　物　附牧場及看守料

烏丹城附近は最も收畜(牛、羊)盛んにして東爺牛特貝子府に至る十八支里間に於て散見せ

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る概數を示せば牛約千頭、羊約四百頭に及んで居る。

(一)　今此間に於ける牧場並に看守狀況を見るに

陳家場	五六畝	孫家場	六七畝

其他五爺府に二場(一は三四畝、一は四五畝の牧場)あり、牧草は何處でも何等の制限はないが、看守料は一年を二期に分ち(三月清明節及び十月一日)一吊五百文を拂つて居る、然し五爺府の牧場は蒙地に近いので蒙地の草を食するから飼養者は更に一期に一吊五の草錢を支拂はなければならない、今東甸子(東方五支里)に於て聞きたる處に依れば子供三名(兄弟)を雇ひ百頭の牛を看守させる、而して飼養者は一定の看守料及び草錢を看守人に渡すが貝子府に支拂ふ金は看守人の自由にして從前最も多く支拂へる際に於ても八十吊を渡せる丈けで殘りは看守人の利得となる譯だ若し他より之れに看守を依頼せんとする場合には一日一百文の看守料を徴するが看守中の逃亡又は損害は看守人が辨償する。

蒙古人は貝子府の西方二支里の境界線たる山上から常に看視して居る。

(二)　牛馬店・烏丹城に於ける牛馬店は唯一つの公發店あるのみで該店は一昨年七月より開業せるもので其の取扱に係る買出數及び手數料を示せば

一昨年長春より來れる支那人の買出せる數は二千餘頭(牛多數を占め馬は少なし)及び羊一千餘頭。

昨年三月より哈爾賓信昌公司(露人)牛馬の買出に來り九月迄に買出せる數三千餘頭(牛多く馬少なく)、羊及び山羊二千餘頭(他の支那人)の多數に及んで居る今露人の買出狀況を聞くに洋行主は刀塊子と稱し店員三名を派し來り十月迄に二名は牛二千四百頭を附近三百支里以内の地方にて買入れ苦力百名(一箇月大洋十元の給與)を使役し開魯、鄭家屯を經長春に歸つたさうである。而して彼等は相場の關係によりては長春にて賣却し賣殘りの良牛は汽車にて、小牛は放牧しつゝ哈爾賓に送る、其經過日數は當地より長春迄一箇月、長春より哈爾賓迄十日を要す、相場は烏丹城にて一頭四十元内外のもの長春にて四十五元位である前記露人は四十元乃至二十元の牛を買出して行つたさうである。

公發店の手數料は(賣買兩者負擔)

馬	三吊	牛	三吊
羊	三百文		

何れも烏丹城錢にして其外に若干の辛苦錢(謝禮)を要する。

公發店は常に二名の夥計を派し更に多數の牛馬販子(伯樂)を使役して居る。

左に畜類相場を示せば（城錢）

種類	牛	馬	騾	駱駝	驢	山羊	棉羊	猪（豚）
上一頭	四五〇吊文	五〇〇吊文	七〇〇吊文	六〇〇吊文	一五〇吊文	三五吊文	四五吊文	一〇〇吊文
中同	二〇〇	二五〇	四〇〇	三五〇	八〇	二五	三〇	七〇
下同	一二〇	一〇〇	二〇〇	二七〇	三〇	一〇	二〇	四〇

備考　綿羊の最上は五〇吊に達するものあり、此等は單に相場に止まり牛、羊、馬の賣買最も多く駱駝等の取引は極めて少ない。

(三)毛皮　牛羊皮及び羊毛最多く牛皮の集散高一萬張に達する、此等は大抵行商人の手で買集められたもので行商人は直に赤峰方面に輸送するから當地の皮店の手を經ざるものが少なくない、蒙古人にして直接皮店に賣却するものあるけれど至つて少ない。

德裕興皮店にて聞知せる處によれば山羊皮、牛皮、狗皮は錦州の廣增店、益發店、榮順長等の皮店に輸送し代賣價格の二分を手數料として徵せられる、赤峰では德聚皮店に委託販賣するが別に手數料を拂はず唯年末に多少の謝禮をなすに過ぎず但し同店に於て買主より二分の手數料を徵する由。

外國商店は主として羊毛の買出に從事するものにして天津に輸送するが一箇年三、四十萬斤の集散高を見る。

昨五年十一月の相場は

山羊板皮	毎斤	六吊	山羊皮	毎斤	八吊乃至五吊
綿羊皮	毎張	十二吊乃至六吊	狗皮	毎張	十八吊乃至六吊
春羊毛	毎（十八兩）斤	三吊	秋羊毛	毎（十八兩）斤	三吊
馬皮	毎張	二十八吊乃至二十三吊	驢皮	毎張	十六吊乃至十三吊
大牛皮	毎斤	五吊	小牛皮	毎斤	一吊五
駝毛	毎（十八兩）斤	三吊六	狐狸皮	毎張	七十吊乃至六十吊四十六吊

ハ、藥草及び菌類

藥草として最も多量なるは甘草にして其他防風等を產するが其額は少ない、菌類も多少產するが何れも蒙古地帶より出づる蘑菇木耳等の二三種に止まり擧ぐるに足らない、當地に於ける甘草取扱店は

德聚棧　義順成　廣泰興　福聚和　慶發合

の五店にして內前二者を以て其主なるものとする。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

甘草の一箇年產額は稅局の調に依れば十餘萬斤なりと稱するも大正五年は前年に比し約倍額の產出ありて德聚棧の春秋二季に於ける取扱額のみにても十四、五萬斤に上り其內三萬斤は赤峰德記洋行に他は當地に於て販賣し殘餘は西海口に送つたさうである、西海口の取引先は德成店、廣瑞店、盛聚店の二店とし運賃は每百斤錦錢二十二吊乃至二十六吊にして西海口に於ける斤量により支拂ひ總て該地到著拂として居る（但し雜貨等の輸入は一半又は三分の一前渡す）代金の支拂は互に取引先に於ける振替方法により現金を輸送する事はない、德聚棧は夥計三十名を有し內十五名は常に百支里乃至五十支里の地にありて買出に從事して居る。

生甘草は二十四兩を以て一斤とするが乾燥せる時は百斤のもの十八兩の秤にて五十斤に減ず。

收買の方法は先に代價を與へ後甘草を採掘させる、大正五年の前渡金は六萬餘吊（城錢）に達せるも實際採掘は四萬吊位だとか過剩前渡金額は返却することになつて居る。

採掘期は陰曆三月—五月、八月—十月が最も盛んにして烏丹城に於ける生甘草一斤の相場四仙乃至五仙である。

五、製造工業

當地に於ては製造工業として擧ぐるに足るものはないが今其二、三を示せば

イ、燒　鍋（酒造業）

燒鍋に慶泉隆の一家あり資本金小洋一萬元にして一班を有し製品は悉く本地に於て消費せられる。

ロ、磨　房（製粉業）

當地の磨房は次の通り。

店名	掌櫃姓	在籍地	資本	班數	備考
三合永	孫	玉田	四、五萬吊	三	
吉慶昌	楊	口裡	二十萬吊	三	
復義興	劉	山東	四、五萬吊	三	
寶泉長	婁	口裡	二十萬吊	三	
德興泉	高	遷安	二十萬吊	三	

成發永	陳	薊州	一	二
大有享	趙	赤峰	一	兼雜貨代賣
義成號	王	口裡	一	一
益合成	周	本地	一	一 兼雜貨代賣
福成棧	保	定	一	一
乾蔚興	賈	山西	一	三
董				

以上は專ら製粉に從事せるものだが需用の多少により增減がある、其他副業として之に從事するもの百戸に達するであらう。

大正五年十月頃に於ける大有享に於ける卸相場は(琥錢)

白麵	毎斤	三〇三文	蕎麥麵	毎斤 二〇五文
小米麵	同	二〇六	豆麵	同 二〇五

內白麵は蒙古人の需用多く製造高最も多い。

ハ、氈　行(毛氈製造業)

當地に於ける氈行は

党氈鋪	本地	義順通	王	山東	
隆德興	党	張	山	東	

義順通に於ける製品を見るに

包圍子　蒙古包(蒙古の天幕式家屋)の圍子にして長さ我九尺三寸六分幅四尺三寸八分あり白青の二色ありて白は羊毛、青は山羊毛を用ひ材料は共に十二、三斤を要す、價格は白色にて大洋票三元、青色は二元半。

馬韉　乘馬の際用ゆるものにして緬羊の頸の黑毛を用ひ原料五斤を要す、價格八吊文。

馬底　馬韉の下部に用ひ長さ一尺八寸、幅二尺四寸六分、原料約三斤を要す價格は白色九吊五、青色六吊五なり、馬韉と共に蒙古人の需用が多い。

布氈子　幅二尺一寸一分、長さ五尺四寸六分、原料は羊毛五斤山羊毛六斤を要す、價格羊毛製十七吊、山羊毛十一吊、青山羊毛八吊にして漢人多く用ゆ。

炕布　幅五尺二寸五分、長さ(二枚を以て一間房とす)八尺乃至九尺にして重さ三十斤あり價格は八十吊文である。

ニ、油　行(搾油業)

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

當地には油行はない唯附近農家の副業として大麻子油を製するも芝麻油は赤峰、錦州から輸入する。

ホ、蠟　行（蠟燭製造業）

永德昌（張姓、直隸人）福增廣（夏姓寶磁人）の二戸あつたが現在福增廣は閉店した、其原因は革油、棉花の騰貴に反し石油下落せし爲めにして一斤の蠟燭に羊油二十兩、川占（四川産にして外部に用ゆるもの價格一斤大洋三元）夏期二錢、冬期一錢六分を要すと。

六、金融及通貨

當地には金融機關たる錢舗、當舗と稱すべきものなく、且通貨は缺乏の狀態にある、特に最近交通票（交通銀行の兌換劵）の赤峰に於ける下落は當地に一大打擊を與へ市場に流通するものは帖子及び交通票のみに止まり硬貨は其影を認めずして小取引に支障を來して居る即ち赤峰では現在交通票一元は三吊乃至二吊八で通用して居るが當地は依然七吊八（赤峰の三吊一百二に相當す）にして金融機關の之れを調節するものなく商務會は拱手して唯市場恢復を待ちつゝあるの狀況である。

帖子は二十年前よりの發行に係り秋穀物の賣買盛んなる時に發行し冬季回收するを例として居たが濫發に濫發を重ねし爲め遂に本年八月以來之が發行を停止し回收に從事せしめて居るさうだが尙市場流通高二十七萬四千七百十五吊文の多額に達してゐる。

今商務會の調査に係る帖子發行店竝に帖子發行高を示せば

烏丹城發行帖子表

商號	帖子數	保證商號
榮發合	七、五〇〇	榮陞號　德順長　協慶昌　榮增
福聚合	七五〇	榮發合　德順長　協慶昌　會源發
榮陞號	一〇、〇〇〇	榮發合　德順長　慶泉隆　協慶昌
福盛成	一八、五五〇	永德昌　福陞德　福盛染　永盛染
福陞德	九、七五〇	永德昌　福盛成　福盛染　永盛染
永盛染	一五、〇〇〇	永德昌　福盛成　福陞德　福盛染
榮增德	二〇、〇〇〇	榮發合　德順長　慶泉隆　協慶昌
慶泉隆	四二、五〇〇	榮陞號　協慶昌　榮增德　寶泉長
協慶昌	一〇、〇〇〇	榮發合　福聚和　德順長　榮增德

德順長	九、〇〇〇	福聚和	三合永
福盛和	六、七〇〇	榮發合	福興隆
永德昌	六、〇〇〇	福盛成	福陞德
瑞成祥	五、〇〇〇	瑞德祥	福陞德
三合永	一九、〇〇〇	德順長	福盛成
福盛染	五、〇〇〇	瑞成祥	榮陞號
瑞成祥	一五、五〇〇	福盛和	榮發合
德增合	一〇、〇〇〇	榮發合	榮增德
福慶德	五、〇〇〇	瑞成祥	德順長
益合泉	一、〇〇〇	永德昌	福盛成
益合成	九九五〇	永德染	福聚和
會源發	五、〇〇〇	永德昌	福盛和
福興隆	六、〇〇〇	福陞德	榮發和
瑞德祥	五五五五	福陞德	瑞成祥
福元德	三、〇〇〇	永德昌	福盛染
積合成	四、〇〇〇	榮發合	福盛成
祥盛棧	五、〇〇〇	福盛和	復和盛
聚德永	五、〇〇〇	永慶和	興盛德
昂染	五、〇〇〇	福盛和	福泉和

協慶昌	榮增德	福泉和	益合成
瑞德祥	德增合	福盛和	三義永
福盛染	永盛染	復義興	德隆泉
福裕興	德興泉	德增合	德陞合
福陞德	永盛染	德順長	德興泉
福盛成	德陞合	榮增德	祥盛棧
益合成	德增合	榮發和	益合成
福盛成	福陞德	福盛和	復和盛
福聚和	榮增德	榮增德	益合成
福盛和	福陞德	福盛和	德增合
福盛染	福盛昌	福陞德	福盛成
福盛成	三義永	福盛成	益合成
福陞德	益合成	福盛成	復和盛
福盛和	三義永	永慶和	興盛德
福泉和	德隆泉	福盛和	益合成

計　二七四、七一五

備考　以上は民國五年九月現在調

此等帖子發行に對し商務會は何等制限を加へず發行者互に保證をして居る甚しいのは一商戸で十餘戸の保證をなすものもある、帖子を現金と引替ふる場合には現金を全部交付せずして幾分の現金と他所の帖子とを以てするから幾回も各店につき引替を要し爲めに商取引に至大の不便を與へて居る。

利息は金融機關がないから一定しない、互に面談の上定めて居る貨幣換算相場を示せば

（一吊は制錢百九十八箇にして銅貨十八とす）

大洋錢	一元	八吊五百文	大洋一票	一元	七吊八百文
小洋同		六吊五百文	一角銅貨		十二箇
一仙制錢		十一箇			

備考　當地に於て大洋を稱するは交通銀行兌換券のことである。

七、度量衡及勞銀

イ、度量衡

京尺　我曲尺　一尺一寸一分　裁尺　我曲尺　一尺九分
布尺　同　一尺六寸　木匠尺　同　一尺四分
大斗一升　我　二升七合　每斤　我　百三十六匁

ロ、勞銀

左官　一日　二吊　大工　一日　二吊
石工　同　三吊　苦力　同　繁忙期一吊八　閑散期四、五百文

備考　大工、石工、左官は共に食事を給することになつて居る頭梁は八九名の弟子を伴ひ來り仕事をやる一人宛二吊乃至三吊の工錢を與ふるも頭梁が弟子に與ふるは一吊宛位である。

農夫は收穫時には勞銀一日五吊位の時あるも閑散時に於ける除草は四、五百文である、春一箇月二十吊、八月頃四十吊にして一箇年は二百五十吊乃至百六七十吊内外とし何れも食事を給する、一日なれば二吊が普通である。

東蒙（小河子沿小哈拉道口地方）甘草集散狀況

大正六年一月十日

赤峰　三原雇員

甘草につきては既に添田、三浦両囑託の調査せられたるところなるも本年は平年に比し米商美盛洋行の之れが買收に從事せるがため約二倍以上の輸出額あり且收買價格も平年一斤三、四仙を普通とせるに大正五年は六仙以上の呼値を稱へたりと云ふ。余は單に集散狀況につき前記二箇所に於て昨大正五年十二月下旬調査せるものを掲ぐるに止め一般的事項に亜りては二囑託の復命書を參照せられんことを乞ふ。

甘草は東蒙古到る處之れを產せざるなしと雖も昨年十二月末小河子沿及び小哈拉道口を中心とせる一帶の產地を調査せるに依り其概況を報ぜんに同地方より北烏丹城に至る百六十支里、西元寶隆に至る六十支里、東開魯に至る五百支里、南四德塘に至る五十支里に亙る廣漠の地域は東蒙中最も多量なりと稱せらる、採取期は陰曆三月、五月、七月及び八月後半より十月に至る六箇月間にして是が採取に從事するものは多く支那人にして蒙古人は採掘せず、且又小河子沿附近は土地堅きがため子供の之れに從ふもの甚だ稀なり、土地は漠地たると蒙地たるとを問はず多數繁茂せるところを探して採取すと雖も地主の異なる耕地は收穫後ならざれば採掘すること能はず而して大人一日十七八斤（二十四兩を以て一斤と

す）を採取し得と、是れが買出に從事するものは草撥子と呼び草撥子は遠く錦州、朝陽方面より採取地に入り來り苦力の採掘し來るものを收買し（現金賣買多く前渡金を交付するは稀なり）西海口、天津等に送り更に芝罘其他に輸出するものなり而して小河子沿に於ける草撥子は店（宿屋）に宿泊し開市日たる一、六の日に上市するを收買するもの多く小哈拉道口に於ては採取地に赴き收買するもの多し、今小河子沿市場に集る附近村落名を擧ぐれば

東　海蘭王府（海力王府とも稱す）に至る三十支里

正南　太平營子　十支里、五家營子　十五支里、康家營子　十八支里

正西　白廟子　八支里、白斯郎營子　十五支里、卡岔　二十支里

西南　姚家營子　十二支里

西北　八撻營子　十支里、當坡地　五支里、大北海　二十支里

備考　每草撥子一日能く二十綑を收買し得と。

にして本年當地に來りたる草撥子は朝陽人最も多く小河子沿店に宿泊せるもの十二名に達せり今其內譯を見れば

謙和老局店　八名　天和廣　四名

草撥子名左の如し。（春秋二期共來りたるもの）

姓名	地名	收買高
楚朋令	朝陽宋家杖子	四五百綑
馬昌	朝陽紅廟子	二百五六十綑
楚朋秀	朝陽宋家杖子	四五百綑
王景祥	朝陽大屯河南水泉溝	七百綑
呂宏文	不明	一百餘綑
好萬山	不明	一百綑
常興隆	本地	一百四五十綑
楊鳳	紅螺峴	二三十綑（十月初めて來る）

以上謙和老局店に宿泊せるものにして楚姓は共に三世引續き來ると。

岳振邦	朝陽	三四百綑
楊鳳桐	朝陽	一百餘綑
李寶珠	朝陽馬泥水	一百餘綑（秋季來りしのみ）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

高老印　口裡（直隸省の長城より南方指す）　二百梱

この外小河子沿を根據として收買せるものに

永合德（正北三十支里菜子塘の燒鍋）　約二十五萬斤

德興順　當地菓子舖楊姓玉田人　百餘梱

永發合　同　雜貨舖陳姓樂亭人　百餘梱

李文升　同　農夫　百四五十梱

備考　永發合收買高中八十梱は永合德に賣却せるを以て小河子沿附近產額約三千三百梱（永合德は除く）にして滿草（生草）毎梱百二十斤として三十九萬六千斤乾草七十斤として二十三萬一千斤の產額ありたり。

是等草撥子は更に採取地に收買人（分撥子と稱す）を派す、其數多きは四五名に達することあるも本年の秋は春季に比し賣行捗々しからず從て分撥子の數少なかりしも今朝陽方面より來りたる草撥子の派せる收買人及び地名を擧ぐれば

草撥子名	分撥子地名	由小河子沿距離	分撥子數	備考
楚朋令	哈拉木頭	正西二十五支里	一名	
馬昌	忙牛營子	西北三十支里	一名	他に平泉より來りたる任佩軒の分撥子一名ありたり
楚朋秀	五家營子	正南十五支里	一名	
呂宏文	三道灣子	東五支里	一名	
好萬山	頭分地	正東五十支里	一名	此地の產最良好なりと稱す、分撥子は王景祥以外に山灣子より來れる張永、赤峰より來れる郭姓の二名ありたり
王景祥	六道灣子	東十五支里	一名	

而して分撥子は一期能く百梱を收買し草撥子との關係は或は利益分配の契約あるあり或は一箇月小洋五六元（自食）にて雇はるゝあり。

次に小哈拉道口につき見るに店に宿泊して收買せるものは高老印、岳振邦の二三に止り本年の收買高僅に四五百梱に過ぎざりしも各村落に於ける草撥子數は七十餘名に達し、チャバチル、敖兆木、哈拉木頭、一百家子、官家地等最も多く

チャバチル　東北五十支里にありて東西二部落に分れ東に一名西に二名の草撥子ありたり。

敖兆木　東北五十支里にありて二名の草撥子ありたり。

哈拉木頭　正北四十支里にありて二名の草撥子ありたり。

一百家子　正南十五支里にありて二名の草撥子ありたり。

官家地　五十支里河東にあり、該地商戸にして本年收買に從事せるものは德發號、福興源、世發永、榮昇號、雙合永、魁元永の六戸にして此附近一箇年の產額濕草五十萬斤と稱し本年永合德は約其四分一を收買せりと。

今當地方に於ける各商戸の收買せる梱數竝に稅局につき本年輸出高を見るに

一、小哈拉道口商戸收買高大約數

商店名	收買梱數	收買期間	商店名	收買梱數	收買期間
馬昌	二三百梱	三	三合興	三百餘梱	三
德合永	四百	三	成發合	一千	三
東瑞陞	一千二百	三	吉增號	五六百	三
同慶合	一百餘	一	福慶合	三百餘	三
當源成	一百餘	一	魁祥義	一百餘	三
增源廣	二百餘	三	永盛樓	三百餘	二

德興永　二百餘　三

備考　三季とは陰曆三、四、五月の春季と七月中旬より八月中旬に至る一季及九、十、十一月中旬に至る秋季を云ふ。

當地附近產額大約五千梱にして乾草約三十五萬斤あり、稅局の徵收額と大差あるは量目による差異なるが如し。

二、大正五年小哈拉道口稅局甘草輸出額（十二月二十六日調）

月日	發送者名	斤量	備考	月日	發送者名	斤量	備考
一月一日	成發合	三、二〇〇		四月三十日	成發合	一〇〇〇	
同	吉增號	一、九二〇		同	東瑞陞	一〇〇〇	
五日	常保元	六〇〇		同	同	一〇〇〇	
六日	吉增號	九六〇		同	同	一〇〇〇	
同	三合興	二四〇		同	吉增號	一〇〇〇	
七日	登姓	二八〇		同	同	一〇〇〇	
二月二日	吉增號	八〇〇		同	同	一〇〇〇	
四日	成發合	一、二二〇		同	同	五〇〇	
三月廿七日	成發合	二八〇		五月五日	三合興	四〇〇	
四月三十日	成發合	二、〇〇〇		同	岳振邦	八八〇	

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

| | | |

十二月廿九日	美隆公司	一八、五五五	
一月一日	同	二四、四七三	
二日	同	二二、二五二	
三日	同	一、七〇一	
四日	同	二、八七七	
一月五日	美隆公司	一、五〇〇	
六日	同	一、二六〇	
同	成發合	三、二〇〇	
計		四十三萬八千六十七斤	

備考　十二月二十六日後の日附は稅局の帳簿上繰越したるものなるも既に發送濟のものなり。

以上兩地收買狀況に於て明なるが如く本年最も多額に買占めたるは米商美隆洋行にして該洋行は赤峰三道街德記洋行に依賴し德記洋行は更に此方面の甘草收買に關し葦子塘の永合德燒鍋に代買を託せり永合德の本年收買せる額は大約

小哈拉道口稅局課稅數量　二十四萬二千六百二十八斤

小河子沿附近　二十五萬斤

小河子沿附近に於ける數量は稅局につき調ぶるも春草に關しては帳簿なきため土人の稱する數量を掲げたるものなるが秋草につきては左の如し。

十月八日　八十梱　五千二百五十五斤

十月十六日　百六十七梱　一萬一千七百二十七斤

十月二十八日　二百三十二梱　一萬四千六百九十六斤

十一月十四日　九十一梱　八千九百九十斤

計　五百七十梱　四萬六百六十八斤

備考　秋草約四萬斤に過ぎざるに一箇年二十五萬斤は餘り多きに過ぐるの感あれば或は土人の稱は湯草に非るなきか、湯草として十七萬斤內外なれば此數稍眞に近し。

而して永合德燒鍋の代買に關し小河子沿謙和老局店主の語るところによれば三月既に收買代金を受取り七月(春草につきて)赤峰渡一斤(十六兩)に付二百文乃至百八十文(四仙內外)にて契約せるもの〻如し。

本年美隆洋行の活躍は收買相場に一大變動を與へ平年一斤(二十四兩)に付三四仙を普通とせるに本年は一時六仙の高値を示し最も多く賣買せられたるは五仙內外なりき、而して秋季は需要俄に減少し八月十五日以後西海口に送れるものは空しく堆積せられて越年せる狀況なりと。

甘草の輸送先は每年西海口仕向を普通とせるに美隆洋行の甘草は赤峰、喜峰口經由天津に向けられたり(赤峰廣聚駝店につき聞くに甘草は半乾のもの十七兩を以て一斤とし百斤に

對し九十斤の運賃を當地に於て支拂ふも目減大なる時は駄主は運賃を返濟するの慣習あり十二月上旬林南倉行運賃は毎百斤四吊四百卽一元四五十仙なりき）今茲に最も注意を要するは甘草輸送に關し三聯單を用ふるの得否にして本年美隆洋行は悉く三聯單を用ひたるが小河子沿及び小哈拉道口稅局につき聞くに三聯單を用ゆれば必ず秤量し課稅せざるべからず、而して普通草撥子の輸送は秤量せず單に目量にて一梱を六十斤乃至四十斤と見積り課稅すと、然れども其間情實の纏綿して正確ならざるは明なり、由是觀之三聯單によるものは乾燥して輸送せざるべからず而して甘草は濕草の時毎梱十六兩の秤にて百二三十斤あるもの乾燥して八十斤內外あるを普通とす、故に今兩者につき出產、通過及び落地稅を比較するに

注　意

一、小子河沿輸送三聯單によるもの毎梱當斤量大約七十斤、六十六斤、六十三斤、九十九斤なるを以て平均一梱七十四斤五とす。

一、目量によるものを五十斤とす。

一、出產稅及び落地稅は毎百斤大洋四角にして通過稅は半稅とす。

一、三聯單によるものは通過稅なし。

毎梱稅額比較

	三聯單によるもの	然らざるもの
出產稅	二角九仙八	二角
通過稅	—	一角
落地稅	二角九仙八	二角
計	五角九仙六	五角

卽ち三聯單によるもの毎梱につき大洋九仙六の高きを見る、且、西海口行は後說の如く通過稅なし、されば小河子沿稅局長王炳文は稱して曰、三聯單による甘草輸出は本年を以て初とし明年若し德記洋行の收買に從事することあるも恐らく三聯單は使用せざるならんと西海口に於ける甘草取扱店は廣瑞店、德成店、盛聚店の三家にして何れも煙臺に連號を有し本年の取扱額約二百萬斤と稱す、而して當地間の輸送機關は駄子九（騾四、驢四、馬一）荷馬車一の割合にして運賃は毎百斤最高小洋四元最低二元五角なるも三元を普通とす、草撥子は甘草を駄子に託し西海口に輸送して代賣を依賴し店は手數料三分席皮錢五百文（錦

アジア経済資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

錢）を徴收す、八月節以前毎百斤の價格は上九十吊乃至八十吊、中七十吊、下六十五吊なりしが是等代價は或は馱子に託し當地に持來るあり或は更に必要なる雜貨の仕入を依頼するあり又、時に代金の至急必要を生じたる場合は馱主より臨時借用し西海口著の上馱脚（運賃）及び借用金の支拂を店に依頼する等兩地間取引盛なり。

馱子通過路に二あり。

一、小河子沿—歩蹬皐—菜園子—三家子—新地—四家樑子—馬家樓—熱水湯—青溝梁—大廟—廣家店—八里堡—溝門子—戴家店—大屯—沙鍋屯—虹螺峴—高橋—西海口（烏丹城事情參照）

二、小河子沿—五〇—四合塘（支里）—五〇—馬廠—五〇—建平—五〇—鐵家營子—五〇—七家梁—三五—霍家店—六〇—平房子—二〇—大平溝—三〇—楊山—四〇—缸窰嶺—三〇—暖池塘—四〇—虹螺峴—三〇—高橋—一五—西海口

而して馱子は平房子の朝陽徴收局を避けて第一路を採るもの多く、若し都合により第二路を採り通過税を徴收せらるゝことあれば悉く馱主の負擔とし草撥子は是が支拂をなさゞるの習慣ありて西海口行甘草は途中通過税なきを普通とす、試に本年楚朋令の收買高四百梱につき其收支を概算するに左の如し。

一、支　出　一六、一八六・一吊

内　譯

甘草四百梱買入代金　七、九九二・〇吊

毎梱十六兩秤百二十斤とし代價十八兩接半（二十四兩）五仙とせば總計銅貨十六萬箇是を錦錢に換算す　四、三二〇・〇吊

運　賃

西海口拂にて毎梱乾草六十斤（西海口秤は小河子沿に比し稍々大なり）とし毎百斤小洋三元とせば總計七百二十元之を錦錢（小洋一元を六吊文とす）に換算す　九二一・六吊

税金（出産税、落地税）

税局の目量を四十斤とせば大洋六十四元＝小洋七十六元八錦錢四百六十吊八にして此の二倍　五七六・〇吊

手　數　料

毎百斤八十吊賃として

席皮錢（場所及覆其他看守料等）　一八二

毎梱五百文とす　二〇〇・〇吊

苦力錢　四八〇・〇吊

一人一日二梱を選別包裝し得として二百日を要し一日苦力錢二角飯錢二角とせば（多く草撥子自ら整理する故に他に草撥子の生活費を計上せず）小洋八十元にして之を錦錢に換算す　三六〇・〇吊

繩代

毎梱につき五根兒の繩を要すとし一根兒代價三十六箇制錢とせば總計小洋五十元、之を換算す　約一三三六・五吊

利息

月三分とし七箇月間なるも常に融通し得る故に三箇月の利息を計上す　一九二〇〇・〇吊

一、收入　一九二〇〇・〇

甘草賣上代金

毎梱乾草西海口秤六十斤とし毎百斤賣價錦錢八十乃至八十五吊なるも假に八十吊とす

差引益　三〇一三・九吊

大洋一元を七吊二百文として大約四百十八元六の利益あるを見る。

因に烏丹城發小哈拉道口稅局にて通過稅を徵收せる甘草數を示せば

烏丹城發小哈拉道口通過甘草數

月日	發送者名	斤量	月日	發達者名	斤量
一月五日	常保元	二、二四〇	九月十二日	董萬發	二、三六〇
同六日	葛姓	四、四四〇	同二十七日	葛姓	二、六〇〇
二月三日	葛春山	三、四〇〇	十月十二日	登姓	八、四四〇
三月二十一日	同	二八〇	同二十四日	常保元	一、五六〇
九月三日	葛姓	八、七一五	同	葛春山	七、四〇〇
同十二日	王正柱	四、〇四〇	十二月八日	韓姓	三、六八〇
同	發升田	七、二〇〇	同二十一日	葛姓	二、五二〇
計		五萬八千八百七十五斤			

備考　烏丹城は赤峰縣にして小哈拉道口は建平縣なれば烏丹城より西海口行甘草は悉く當地に於て通過稅を徵收せらるゝものなり。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

松花江下流沿岸の農産物

本記事は宮村陸軍部嘱託の寄稿なり。

茲に松花江下流とは巴彦、木蘭、通河、湯源、賓、方正、依蘭、樺川、富錦の九縣を云ひ巴彦縣を除き一般に山地多く材木、獸皮、鑛物(金、砂金)を主要産物とする地方が多い、斯る地方では農産物は其地方人の需要を充すに過ぎない、又新甸地方では農産物を主とするが、水運により露領へ輸出の便あるより自然露領地方に需要多き小麥に重きを置く風がある、彦巴方面も其傾ありて北滿何れの地方も大豆の生産額は優に小麥の其れを凌駕する。

大豆産額及び移輸出額　例年大約五十萬石(約六千五百車一車は千布度)見當で面積の割合に其量が少ない

収穫率は南線地方に比して二割方少なく左なきだに地方消費量比較的多く其輸出額は二十八萬石(約三千六百車)見當である、則ち

巴彦地方	(巴彦縣及賓縣の一部)	一五〇、〇〇〇石
新甸地方	(木蘭縣、賓縣、方正縣、通化縣の中部)	一〇〇、〇〇〇

三姓地方（依蘭、樺川、湯源縣竝に通河縣の一部佳木斯其他よりも輸出さる）　三〇、〇〇〇石

小麥は

巴彦地方　一五〇、〇〇〇石

新甸地方　一四〇、〇〇〇

三姓地方　一〇、〇〇〇

合計三十萬石（四千車弱）見當の輸出量を有す、其他の雜穀は全部地方の消費に充てられて輸出の見るべきものはない。

昨大正五年度の作柄　元來同地方は一般に山丘多く地勢起伏せるを以て降雨の過多は比較的損害少なきに反し旱魃には打擊大である、然るに昨年六、七月の交大豆の發育期に降雨が無かつた爲に莖幹枝葉の成育十分でなく隨つて莢數少なく各莢も亦二粒多く三粒もの少なく加之に粒小さく不揃の氣味があつた、斯の如く一昨年度には北滿各地大不作であつたが尙平年作を收め得たやうに昨大正五年は一般の豐作に反して一晌四石見當の漸く平年作を擧げ得た程である。

大豆の作柄は斯の如くであつたが其他の雜穀の作柄は極めて良好で小麥の如きは數十年來の大豐作で一昨大正四年度に比し三割、例年の二割方增收である。

品質　大豆は粒小さく不揃の氣味ある事は前に記した如くであるが、收穫時天候佳良の爲め夾雜物の混入少なく乾燥十分であつたから不良と云ふ程でもない（重量約一、二％方輕し）雜穀は前述の如く其出來榮頗る佳良で而も收穫時晴天續きであつたから大豆同樣乾燥十分で夾雜物なく品質極めて良好である、小麥の如きは百二十三、四ゾロ（ゾロトニックの略一ゾロは一匁二三八）より百三十三ゾロを示し百二十三ゾロ以下のものは稀で殊に巴彦方面は良好であつた。

出廻　昨大正五年は例年より稍々早く小麥は八月中旬より出廻り新甸にては其初め毎日七八車の出廻あり農閑期に入りてより一日十四、五車の出廻あり結氷期迄に合計千一、二百車の出廻があつた。

而して小麥輸出は各地共增加し昨年度產は大約左の見當である。

巴彦地方　一八〇、〇〇〇石（二五〇〇車）

新甸地方、　一七〇、〇〇〇（二二〇〇）

三姓地方　一二、〇〇〇（一六〇）

計　三六二、〇〇〇石（四五六〇瓩）

である。

大豆は九月中旬頃走物出で一般の出廻は十月中旬以後より始まり其輸出は大約前記の見當

取引時期竝方法　同方面は開市日久しく幾多の苦き經驗を經特に新甸の如きは幾多の猶太人に苦められ又比較的資金の充實し居たる關係より取引は極て確實で、從來より現物主義を主とし長期契約は他の地方に比し極めて少ない。從つて取引開始時期も他地方の六月頃よりなるに本地方は九、十月の交より開始さるゝのが例である。

昨年度は一昨年度北滿一帶が受けた辛き經驗を見聞し一層從來の方針を固め青田賣買の如きは勿論先物取引は殆ど成立せず唯農民の請求に依り從來の關係上市場の問屋より買付らるゝもの巴彥蘇々等に稀に行はれたのみで全然現物主義となつた。

巴彥蘇々は其河沿埠頭たる石頭城子に三十五支里滴達嘴子に三十支里を隔て且其間に小川がありて運送困難の爲め取引も幾分澁勝であるが反之新甸は哈爾賓を距る二百九十支里で道路不良冬期馬車輸送不便であるから開河期松花江を利用せん爲め取引極めて活潑で小麥の總輸出量の半は開河前に手合となり、殘餘の半部竝大豆は開河前後に取引される。

取引方法　は他の地方と同樣買手同地に出張し又は同地問屋より哈爾賓に出張して取引する、代金は契約締結の際現金又は爲替手形を以て代金の全部若は一部支拂ふ、其他商品引換の方法もある。

期限は一週乃至三週間で引渡場所は生產地河岸又は哈爾賓渡とする。

先物取引に於ける先拂ひ又は後拂金は契約の際取極める。

相場　當方面の相場は常に哈爾賓相場の支配影響を受けるので昨年の相場は大略左の如くである。

新甸　小麥

馬車物ゾロナシ石、吉林官帖九七吊（河岸渡百二十ゾロとして布度一〇三哥哈爾賓渡一〇七哥五）

現物河岸渡布度一〇五哥（哈爾賓渡一〇九哥五）

巴彥　小麥

馬車物ゾロナシ石、黑龍江官帖一一五吊（河岸渡百二十ゾロとし布度九五哥哈爾賓九八哥五）

現物河岸渡九八哥（哈爾賓一〇二哥五）

大豆

馬車物石七〇弗(哈爾賓著値八百二見當)

大豆商　他大豆市場同様各地に出張員を置き買出に従事する。

巴彦縣

ワッサード、三井、クレマンタスキー、カバルキン、合記、祥發東、永和長、大有恒

其他哈爾賓の主なる穀物商は全部出張員を出す。

新　甸

ワッサード、カバルキン、ニューマン、其他猶太人仲買商

三　姓

ワッサード

小麥商

巴　彦

哈爾賓の各製粉會社並にソースキン、リリゲ及び仲買人あり又各支那穀物商は全部之れを取扱ふ。

新　甸

露領沿海州方面よりも出張員あり其重なるものはソースキン、シリスウヂ、バラーフ、ウエムリー(以上哈爾賓)シーフチン、ピアンコフ(以上ハバロフスク)チチコフ(黑河)

地方商人並農民の狀態

商人　他地方の如く深く空賣をなし勝販を一擧に決せんとするもの少なく總て老實な事は前に述べたやうである、從つて多大の損失を招きたるものは少ないが一昨年來露貨の下落と大豆、小麥の暴騰の爲めに幾分の打擊を蒙り加之昨年四月河開きの際大豆流失の難に逢ひ當初尙其の創痍癒ねざる向も尠くなかつた、而して一般商家は資金潤澤を缺ぎ積極的に賣込を行ふが如き元氣は更に無く一層消極的であつた。

農家　一昨年度大豆は平年作であつたが小麥、高粱等の雜穀不作であつた爲めに一般農家は資金の餘裕皆無で其生産物の賣捌きを免がるゝ傾向があつた、けれども取入の繁忙と交通の狀態とに依り出廻りに餘り影響を及ぼす程ではなかつた。

油房と製粉業

三姓の油房は總て舊式ではあるが大小併せて十二戸ある、而して一枚二十斤内外の豆粕を製造し豆油と共に地方の需要に應じ年約十萬布度の大豆を消費すと。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

新甸にも二箇の油房あるが皆舊式で茲に記するに足らない。

三姓の製粉事業は相當の商家殆んど皆之れに從事し同業約二十數戸あるが其一年の小麥消費高は約八萬布度に過ぎずと以て其規模の小なるを知ることが出來やう。

新甸にも製粉業八戸計りあるが三姓と彷彿たるもので自家用を充すに過ぎない。

通信　以上各埠頭相互間並哈爾賓への通信は支那電報及び郵便に依るの外はない。

郵便は開河中は汽船便に依るから哈爾賓よりは二日乃至三日哈爾賓へは三日乃至四日で到著するけれども冬期馬車便に由る場合は一定して居ない三姓の如きは二週間も要する事がある。

錦州に於ける通貨及金融

本記事は當部林嘱託が昨年錦州滞在間調査せるものなり。

通　貨

錦州市場に於ては統一したる幣制と謂ふものなく隨つて通貨の種類多種多樣で本位貨として一般取引價格の標準となるべきものないが稍々本位貨に近き性質のものを擧ぐれば理論上制錢と稱すべきも制錢は其の受授携帶に少なからざる不便を感ずる所から其煩を避くるため代用紙幣たる商帖を以て公私一切の取引に無制限に使用せられて居る而かも商帖は當地當舗(質屋)の發行に係る紙幣であるから其の流通區域も錦縣管内に限られ他地方との貸借關係及び外國商人との取引に使用せらるゝこと甚だ少なく是等の場合には銀元及び銀元票及び稀れに露國紙幣が通用せられて居る今當地に於ける通貨を支那貨幣と外國貨幣との二種に分ち順序を追ふて説明して見やう。

一、通貨の種類

通貨の種類は之を大別して支那貨幣及び外國貨幣の二種とし前者は更に硬貨と紙幣の二種に區別することが出來る。

甲、支那貨幣

(A) 硬貨

(イ) 錦寶銀(元寶銀)　錦州の錦寶銀は當地に於ける爲替相場の標準となるべき者であるが一つの空名であつて決して現銀があるのではない故に其受授には必らず錢舖(我國の兩替屋とは大に其意義を異にす小規模の銀行業とでも稱すべきものである)の介在を要し貨幣の如く當事者間に直接受授せらるべきものではない故に元寶銀を取扱はんとするなら舖錢と取引をしなければいけない卽ち錢舖は取引當事者間の取引毎に抹兌(取引當事者間の商取引の諸勘定を錢舖の帳簿上に於て振替することを謂ふ錢舖の部參照ありたし)の方法を以てせらるゝのである斯くの如く債權債務の決濟は極めて簡便迅速に行はれ市場に於ける爲替相場の標準として一般に採用せられて居るから恰も一種の通貨の樣であるが前に述べたる如く元寶銀を代表せる一種の權利であつて何等の形體を存して居るのでなく其の上期限が來なければ現銀を得ることは出來ない强ひて期限内に之を得やうとするには相當の割引料を支拂はなければならない普通月の十日と二十五日が決算日と定められてあつて其日には利子を定めて貸借相互間の債權債務を決濟するのである利子は金融狀態の如何により四時變動ありて一定して居ないが一千兩に付七兩を超過する事を許さない規定になつて居る。

是等錦元寶は往時は盛んに大口取引に使用せられて恰も當地に於ける本位貨の樣なものであつて其現物も極めて豐富で其時代には現銀を抹兌銀(爲替資金とでも謂ふべきもの)に振替へ之に加色を付することなども行はれたが今を去ること六、七年前南支那方面に第一次革命動亂勃發し亞で第二次第三次の革命動亂起り且つ歐洲の大市場は戰場と化し日獨の國交は斷絶し次で日支の交渉となり事變交々發生したる爲め營口の金融界は混亂を呈し其影響は當地に迄も波及して硬貨の外省へ輸出せらるゝもの極めて多く殊に元寶銀の如きは其大半は外部に流出し殘りの小半は地方の資産家等が萬一の場合を怖れて預金額の全部を各自其の取引錢舖より引出し自ら之を貯藏するに至りし結果現銀の流通は全く杜絶して今や加色の多少に拘はらず現銀を手に入るゝ事は出來なくなつた。

錦元寶の一錠の秤量は普通錦州平の五十三兩五錢(約我が五百七十七匁七錢四分六厘五

毛）である。

今錦州平百兩に對する各地銀錠平の比較表を擧ぐれば次の通りである。

營口兩	一〇一、九九九	山海關兩	九八、六六四
遼陽兩	一〇〇、〇〇〇	芝罘兩	一〇〇、六〇六
北京兩	一〇五、三〇四	上海兩	一〇〇、〇九六
天津兩	一〇〇、六九三	吉林兩	一〇二、九一七
長春兩	一〇二、五七〇	鐵嶺兩	一〇一、〇八一
開原兩	一〇一、二八五	奉天兩	一〇二、二〇三

（ロ）銀元　一般に之を洋錢と稱し大洋錢及び小洋錢の二種に分たる共に各省銀元局の鑄造に係はり其の形式及び重量等は殆んど同一なれども純分に至りては多少の差異がある一般に南支那各省の鑄造のものは吉林、奉天等のものに比して銀質は良好である種類は一元、半元、二角、一角、半角の五種に分たる。

大洋錢は我が舊一圓銀貨に類似し一元を以て單位とする其純分小洋錢に比して稍々良好なるところから逐年市場から驅逐されて今では流通高極めて少なく僅に京奉鐵道の運賃及び乘車賃、支那郵便局、稅局其他外國人間の取引に使用せらるゝのみである。

當地方に流通する大洋錢は北洋銀元局の鑄造に係るもの最も多く之に亞ぐものを湖北、墨銀（新舊二種ありて新英、老英と謂ふ老英は新英に比し品質良好である勿論新舊間に多少の開きがある）、香港銀（站人錢又は站人兒と云ふ）、湖南、東三省等とする其内東三省及び湖南省の鑄造に係るものは上記の京奉鐵道、郵便局、稅局等は之を受授せず殆んど小洋錢同樣（大洋錢と小洋錢とは常に一角乃至二角の開きがある）として取扱はれて居る。

小洋錢は角（又は毛）を單位とし其流通額の最も多きは奉天省鑄造のものであつて之れに亞ぐものは吉林、湖北、湖南、北洋、廣東、福建等の順序である而して各種を通じて流通高最も多きは二角及び一角であつて五角、半角は極めて少ない一般に冬季特産物出廻りの時季には小洋錢の需要激增するを常とするから相場の騰貴を見越して買占めをなす者多く之れを貯藏して市場に出さないため現物は拂底し相場昂騰するが之に反して夏季は需要減退相場下落して其の變動も亦少ないのである要するに此等各種洋錢は前に述べたる如く其の純分品質等を異にして居るが原と總べて支那政府の鑄造に係るものであるから其れ〴〵一定の法制はあるのである一八九〇年の上諭により制定せられたる重量品

位等を示せば次の如くである。

種類	秤	定量	純分	グレイン
一元	康平	七錢二分	九〇〇位	四一四・五九〇
五角	同	三錢六分	八六〇位	二〇七・二九五
二角	同	一錢四分四厘	八二〇位	八二・九一七
一角	同	七分二厘	八二〇位	四一・四五八
半角	同	三分六厘	八二〇位	二〇・七二七

滿鐵中央試驗所に於て二角銀貨を分析したる結果は次の通りである。

種類	一箇の平均重量	銀分	銅分
東三省造（滿洲文字あるもの）	七八・五三二（グレイン）	六二・一七九	一六・八〇五
東三省造（滿洲文字なきもの）	八〇・〇九一	六三・六八八	一七・八七〇
奉天省造	八〇・二一六	六六・四五〇	一三・五六六
江南省造	八〇・五五六	六八・九〇四	一一・六五二

(ハ)銅元　俗に銅子兒と稱する銅貨であつて各銀元局に於て鑄造せられて居る當地方に流通

せられて居るものは奉天造幣廠鑄造に係るもの多く二分（當制錢二十文）、一分（當制錢十文）、半分（當制錢五文）の三種である其内一分の者が最も多く流通されて居る其形狀は恰かも我が舊二錢一錢に類似して居る此等は總べて一角以内の端數計算に用ひられ現今一分銅子兒十二枚を以て小洋錢一角に換算し制錢九箇を以て銅子兒一分に換算されて居る然れども銀銅比價の變動によりて時々相場に高低がある。

(ニ)銅錢　銅錢は制錢と私錢との二種に分たる制錢は我國の一厘錢に類似し政府の鑄造に係り現今通用せらるゝものは順治、乾隆、康熙、雍正、嘉慶、道光、咸豐、同治、光緒等の通寶にして流通額の約五割は乾隆、約二割は光緒、約一割は道光で順治、康熙、雍正、嘉慶、咸豐、同治等合して約二割と云ふ順序である現今是等の制錢は零碎なる商品の賣買の際若しくは端錢として使用される外通貨として殆んど其價値を認められないが往時は如何なる山間僻地にも通用して恰も本位貨の如く一般取引に使用せられたものである今尚舊慣に依り之を本位とせる吊文制に據りて物價を定め商帖を以て取引せられて居る私錢は制錢に比し形稍々少さく長髮賊の亂後綱紀の弛緩せるに乘じ民間に於て密造せられたる有穴銅錢であつて其品質も制錢に比して粗惡である。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

制錢は往時に比し其の流通額減少せしも今尚市場に多少散在して居る私錢は逐年市面に其の影を沒する樣になつた、制錢の計算法は各地同じではない今當地に於ける制錢の定數を示せば次の通りである。

一	成(十　文)	制錢二	箇	二	成(二十文)	制錢三	箇
三	成(三十文)	制錢五	箇	四	成(四十文)	制錢六	箇
五	成(五十文)	制錢八	箇	六	成(六十文)	制錢十	箇
七	成(七十文)	制錢十一	箇	八	成(八十文)	制錢十三	箇
九	成(九十文)	制錢十四	箇	十	成(百　文)	制錢十六	箇
一百文		制錢十六	箇	二百文		制錢三十三	箇
三百文		制錢四十九	箇	四百文		制錢六十六	箇
五百文		制錢八十二	箇	六百文		制錢九十八	箇
七百文		制錢百十六	箇	八百文		制錢百三十	箇
九百文		制錢百四十七	箇	一吊文		制錢百六十四	箇

(B)紙　幣

(イ)銀元票　銀元票は銀元を兌換本位として發行したる紙幣であつて一角、二角、五角、十角、五十角、百角の六種あるが又同じく銀元を兌換本位として發行したるものに一圓、五圓、十圓の如く圓を單位としたるものもあるが每圓に付小洋十角と記し十進法により て計算せられて居る當地方に流通せるものは、奉天官銀號票、奉天興業銀行票、中國銀行票、交通銀行票、奉天農業銀行票、黑龍江官銀號票等の各種がある此等は總べて小洋錢本位の兌換券であるが中國銀行發行に係るものは東三省通用のものを除くの外は大洋錢本位の兌換券である第一次革命亂後硬貨の減少と共に是等紙幣の流通著しく增加し各銀行銀號は正貨の準備如何を顧みず盛に濫發したる結果一々之が兌換に應ずる事出來ず本來の性質は何時しか變じて不換紙幣と選ぶところない樣になり昨今硬貨百元に付二元乃至四元の開きがある當地の官憲は絕對的に現銀の輸送を禁止してあるから輸入超過して現送の必要ある場合には此等銀元票による事が多い。

(ロ)商帖(結子)　商帖は制錢を兌換本位として私人が發行したる紙幣で吊を以て價格を表はし二吊文、三吊文、四吊文、五吊文、六吊文、七吊文、八吊文、九吊文、十吊文、二十吊文の十種類あるが此等以外の商帖は決して發行する事の出來ない內規がある樣である往

アジア経済資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

時當地方の本位貨は制錢であつたが其の受授携帶に甚だしく不便を感ずる處から此等の煩雜を避くる目的を以て當地の當舗(質屋業者)、局店(問屋業者)及び其他の大商店が憑帖と稱する錢票を發行して之れと引換に現銀を交付したるものであるが遂に惡弊を生じ抹殺の方法をとり現銀を交付せず濫發に濫發を重ねし結果其信用日一日と減退し遂に官憲は其の發行者を限定する樣になつた現今にては質屋營業者に限り其の發行を許可して居る樣である。

然るに是等當舗も亦濫發に次ぐに濫發を以てし弊害百出したから官憲は更に商帖の發行額資本金以上に達すべからずと嚴命したが是れ又何等の效果なき一つの空文として葬られ商帖の發行額は依然資本額を超過すること數倍である今當地當舗の屋號資本額及び商帖發行高等を示せば次の通りである。

屋號	資本額	商帖發行高	所在地
承順當	十萬吊	四十萬吊	西關
德豐當	二十萬吊	四十萬吊	東關
慶餘當	十萬吊	五十萬吊	同
寶興當	十萬吊	八十萬吊	北關
寶增當	二十萬吊	七十萬吊	同
益源當	十二萬吊	八十萬吊	東關
益盛當	十三萬吊	五十萬吊	南關
永益當	十二萬吊	八十萬吊	西關
同昇當	十五萬吊	八十萬吊	同
福源當	十萬吊	五十萬吊	西街
大增當	二十萬吊	五十萬吊	同
惠豐當	十二萬吊	七十萬吊	北關
合計	百六十四萬吊	七百四十萬吊	

備考　東關に資本金五十萬吊の大來當あれど帖子は發行して居ない。

即ち前表の通り各當舗の商帖發行高は資本額の二倍乃至八倍であつて其發行高に就ては實際何等の制限がないから大變危險の樣に思はれるが事實は全く其れと正反對である即ち一般市場に於ける氣受けは頗る良好で何等の杞憂すべきものなく圓滑に流通せられ其

の信用は寧ろ官製貨幣以上であるのは何人も意外に思ふところであらう、之れ要するに其發行權者即ち當輔は僅かに十二戸であるが此の間相互連帶責任を以て連絡をとつて居るから今假りに一つの當舗が破産しても其の發行商帖は何れの當舗でも隨時隨意に他の商帖と引換をして呉れる又假りに或る當舗の發行に係る商帖が其の受授を拒絶せられても他の當舗發行の商帖を以て直ちに之に代らしむる習慣になつて居る尙其の上此等當舗は錦州城或は其附近の有名なる豪農豪商が資本主となつて居るから是等十二戸が同時に破産する樣な事は決して有り得べき道理がない從つて其の信用は厚く且つ圓滑に殆んど永久的に流通せられて居るのである。

既に述べたる通り商帖發行は制錢の受授携帶に大變に不便を感ずる處から此等の煩雜を避くる目的を以て案出されたる一つの便法で所謂一種の信用手形樣のものであつたが今は各當舗は競ふて營利的に發行して居る樣な感がある、即ち商人が商品の購入或は債務の辨濟等に就て現銀の缺乏を告げ銀圓を要する事があれば當舗に對し豫め期間を定め抵押(抵當付)若しくは一名乃至二名の舗保(確實なる店舗の保證)を付して帖子の發行を請求するものである、當舗は之に對し直に其信用程度を調査し若し確實と認むれば帖子を交付し其の日より起算して利子の徵收を行ふものであつて何等現銀を用ひず唯單に一葉の紙片で日々の利子を收め得る所謂放資なき高利貸付とも謂ふべきものである、而して其の貸付期限の餘り長いのは少なく大概半箇月乃至四箇月位のが多い利息は往時は一萬吊に對して日步五吊以內月步百四十吊以內の內規であつたが餘りに利率が高いから期限內に皆濟することは餘程困難で商人等の中には違約する者もあつて市場は閑散となり商況は益々振はない樣になつたから遂に當地官憲及び商務分會等之に干涉して種々商議の結果一萬吊に對し日步は三吊以內月步は九十吊以內と改訂し大正三年舊三月一日より此の方法を實施し今でも之に因つて居る樣である。

大正三年末に於ける帖子の發行高は實に一千六百萬吊の多額に上つて居つたが其後漸次回收せられて大正四年度には前記の如く約半數の七百五十萬吊となつた、之れ要するに昨年二月奉天巡按使より錦縣知事宛に帖子の發行を禁止すべしと令達ありしにより其當時の知事朱佩蘭は質屋營業者を招き帖子の發行は一般商民より高利を貪るのみならず訴訟事件を頻出せしめ且つ一面國幣の流通を阻害すること大なりとの理由の下に其の回收方を命じたるも永年の慣習を打破する事は不可能で容易に回收の實を擧ぐる事が出來な

かつた、其後更に奉天巡按使より商帖の發行を嚴禁し速に其の回收を計るべしとの督促嚴達に接したるを以て各當業者は相會し商議に商議を重ねし結果全部の回收には少なくとも一箇年以上を要する故に舊曆三月一日より起算し向ふ一箇年間内に回收し完るものとなし其れ迄の延期を出願する事とし若し一箇年後に尙回收することが不可能の場合には更に別途の計畫を立てゝ具申せんと議決し知事の手を經て巡按使に向ふ一箇年間の延期を懇願した樣である、然し當業者が一箇年後更に延期の手續を講ぜんとする意向は慥かに見受けらるゝ。

帖子發行者が會議後の商帖回收狀況も餘り從前とは異なつて居ない樣である、例へば一百吊の帖子持參者が其の帖子發行の當舗に對し現銀との兌換を請求する時は當舗は其半額五十吊は現銀を支拂ひ殘りの半額五十吊は他の當舗發行に係はる帖子を交付する、要するに漸次回收せんとする傾向は多少認むることは出來るが向後一箇年限で回收し終るや否やは疑問である商帖は元來回收に充つべき何等準備基金は無いのであるから其後の貸出に就ては成るべく新商帖の發行を避け現存せる舊帖子を交付して其れより生ずる利息の一部分を以て準備基金に充つる樣にして居る、然し之に對し何等の制裁があるのでないから其の實行如何は豫想することは出來ないが各當業者は早晩商帖は必ず廢止さるべき運命を有して居ることは自覺して居るらしい。

從來商帖の發行高は季節により一樣ではない一般に秋冬兩季は多く夏春兩季は少ない卽ち秋冬兩季は穀類、棉花、毛皮等の出廻り時季で各商家は競ふて此等の買占めをなす爲資金の必要上より商帖の需要が激增するからである、又夏春兩季は特產物の出廻り時季を經過したる所謂商家閑散季で餘り資金の必要がないから商帖の需要が減退するのである當地と營口とは密接なる經濟關係を有して居るから營口の金融界の變動は直に當地金融界に影響を及ぼし商帖の如きも營口銀塊相場の高低により常に左右せられて居る、又一面發行額の多寡により變動あるは勿論である、大正三年末には硬貨の騰貴したる上に帖子の發行高が一千六百萬吊の多額に達した結果小洋錢十元に對し商帖百三十吊迄に下落した其後漸次帖子の回收行はれ加ふるに硬貨と紙幣との開きが殆んど無い樣になつた爲め今では小洋錢十元に對し商帖六十吊内外と言ふ相場を保つて居る。

乙、外國貨幣

(イ)露國紙幣　當地方に流通せらるゝ外國紙幣は露國紙幣だけである、露國通貨は初め露國

が滿洲經營に伴ふて流入したるものであつて露清銀行を中心として東清鐵道（今の南滿鐵道は其の一部分）の建設、日露戰役の軍事行動資金として盛に各地方に撒布せられたもので其當時支那人に對し殆んど强制的に之を使用せしむる態度をとつたから忽ち都鄙到る處に之が流通を見る樣になつたのである、尙北滿洲は南滿洲の日本勢力範圍内に於ける樣に全く露國の勢力範圍に屬し該地方には露國通貨の流通することが多いから或は商取引の關係により或は出稼人の關係により或は旅費の携帶等によりて同通貨の南滿地方に流入するのは免がれ得ない事實である、又露國は蒙古地方にも非常の勢力を有し同通貨の流通して居るのが尠くないから同地方より錦州方面へ南下したものもあるらしい。

斯くの如くにして錦州地方へ流入せる露國通貨は紙幣を主とし補助硬貨は其額極めて少ない右の露國紙幣は日本人間に於ては留紙幣（ルーブル）支那人間に於ては羌帖（チャンテエ）と稱せられ露西亞帝國銀行の發行に係る銀行劵であつて一留、三留、五留、十留、二十五留、五十留、百留、五百留の八種がある、同銀行劵は元來兌換劵であつて同行は金貨を以て之を引換ふるの義務を有して居る、而して露國の金貨一留は純金一七・四二四ドーリの實質を有して居るから之を我單位に換算するときは〇・二〇六四六二及餘で卽ち邦貨の一圓三錢二厘三毛餘に該當する、然し大正三年八月歐洲戰亂起るや露國政府は同年五月勅令を以て其兌換を停止したから現在に於ては全く不換紙幣と選ぶ處なく一留に付四、五吊文の間を上下して居る、目下錦州市場に流通されて居る額は三萬留位と見れば大差あるまい。

(ロ)日本通貨　日本通貨は居留日本人相互間の或る特種の小取引に使用せらるゝのみで對支那人との一般取引には全く通用せられて居ない、換言すれば日本通貨は當地方に於ては絕對的に流通せられて居ないと言ふのが至當だらう。

金融

一、金融の概況

錦州は東三省中最も古くから開拓せられた都市であつて金時代に錦州隔海軍を置き元時代に尙錦州と云ひ明時代には此地を北防地帶とし幾多の屯田兵を置く樣になつてから長足の進步發展を來たしたものである、其當時の滿洲は到る處人口稀薄で未開墾地が多く物資の大部分は錦州に集散せられたのである、斯くの如く錦州は其發達古き地であるが屯田兵制によりて開拓せられたのであるから比較的富の程度が平均して居ることや、地理的の關係

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

上對外商取引割合に少なく地方的商業に限られ居ることや、大なる產業なきため資金の需要少なきことや、其他流通貨の本位が制錢であつて而かも其代用紙幣が商帖で帖子發行者は當舖に限られ居る等の理由の下に滿洲方面の一般金融狀態とは多少其趣を異にし比較的順調に發達し來つたものである、然るに今より六、七年前南支那に第一次革命動亂勃發し上海金融界は紛擾を呈し同地と密接の關係を有する營口金融界も亦混亂し其影響は當地に迄も及び硬貨の輸出せらるゝもの影しく元寶銀の如きは殆んど市場より其影を沒する樣になつた、又奸商等は此の機會を利用して居ながら巨利を得んと欲し盛に銀元の先物空取引を開始し其結果市場は常に擾亂し錦州金融界は混沌たる狀況を呈する樣になつた、官憲は遂に之に干涉し其制止に努力したが其苦心百策も何等の效を奏することが出來なかつた、今其當時の金融界の變調を見るに元寶銀の最高相場は十吊二百十五文で最低相場は八吊六百三十五文、小洋錢の最高相場は七吊六百六十文で最低相場は五吊二百十文である、其後現銀の輸出嚴禁せられ漸次舊狀に復したが第二次革命第三次革命相亞いで起り且つ歐洲の市場は戰亂の巷と化し日獨國交斷絕より日支の交涉となり事變交々發生したるため營口金融界は常に動搖し其影響當地に及び今尙混沌たる域を脫する事の出來ない狀態である。

前に述べたる通り當地金融界は營口の商況により常に左右せられて居るが又一面地方農作物の豐凶如何は金融に重大なる關係を有して居る今其概況を述ぶれば例年九月下旬は農產物の出廻り初期であつて買付用資金の需要起り金利は著しく昂騰し市場は次第に活氣を加へ十一月十二月の氷結と共に大豆、雜穀、棉花、毛皮等の出荷多額に上り同時に綿絲布及び雜貨輸入の好季節であるから資金の需要起り一月は陰曆の年末であるから輸出入貿易は盛況を呈し金融活潑となり二月上半は正月休業のため資金の需要は少ないけれども同下旬より三月下旬に掛け農產物の出荷一段落を告ぐる迄は尙活氣を呈し金融繁忙である四、五月は農民の播種季であるから貨物の入城少なく雜貨の賣行きも亦餘り思はしくないので市場は稍々閑散である六月は夏物の輸入資金の需要を惹起すると共に端午節決算と營口過爐銀卯期(決濟期)との影響を受けて金融逼迫し一時金利は昂騰する七、八月及び九月の上半は土木建築等の諸工事其他に多少の需要はあるが所謂夏枯れ時季であつて一年中金融の最も緩漫な季節である。

二、金融機關

(イ)銀行　當地には中國銀行分行及び奉天官銀行、同興業銀行、同交通銀行等の各出張所がある、其内官銀行、興業銀行、交通銀行等の出張所は主として紙幣の兌換事務に當り放資預金等の事務は未だ取扱はざる樣であるが中國銀行分行だけは小額の放資及び爲替事務等を取扱つて居る、今其貸付利率を見るに月利は七厘年利は五厘で日歩貸付は取扱つて居らぬ而して貸付に對しては動産若くは不動産の抵當物を要するは勿論信用確實なる商人の保證が入る爲替取組は送付先と銀元相場如何により常に變動があるが普通一千元に付五元位の手數料を徵して居るらしい右の如く比較的歩合が高いから一般商人は餘り之を歡迎せず却つて取引上常に關係深き錢舖の手を煩はすことが多い。

(ロ)錢舖　錢舖の營業の主なるものは抹兌で之に次ぐものは爲替、兩替等である抹兌とは恰も銀行小切手により貸借の決算をする樣な性質を有して居るもので（但し抹兌は預金の有無に係らず帳簿上の振替支拂に止まる）奉天の過碼錢、營口の過爐銀、吉林の抹兌錢、長春の抹錢等と均しき樣なものである當地商人相互間の取引は殆んど此方法により決算せらるゝを常とし此の無形の通貨を呼んで抹兌と云ふのである、大錢舖は此の抹兌や爲替の業務多いが小錢舖（錢莊）は抹兌や爲替の取扱ひが少ないから兩替や洋錢の投機的賣買等をして居るらしい、今左に其主なる者を擧げて見やう。

屋號	資本額	所在地
永玉公	八萬吊	東街
錦大隆	十六萬吊	同
錦隆德	十六萬吊	元寶胡同
德盛合	七萬吊	大清胡同
益隆盛	八萬五千吊	北街
寶增順	九萬吊	東街
義慶隆	七萬吊	南街
大增泉	十萬吊	東街
永泰隆	十二萬吊	西街
德豐厚	十八萬吊	西門內
德厚長	十八萬吊	二道街
義發源	十四萬吊	同

福玉和	七萬吊	元寶劫同

次に此等錢舗の規約を掲げて見やう。

一、洋錢の賣買には一千元に付手數料五元を徴す。
一、洋錢の貸借には一千元に付十日目毎に利息五毛を徴す。
一、制錢の貸借には一萬吊文に付一日毎に利子三吊文を徴す。
一、客に代りて現銀の受授に對しては一分の手數料を徴す。
一、客に代りて爲替取組をなしたる場合は一千元に付一元の手數料を徴す。
一、洋錢票の買入に對しては一千元に付一元の手數料を徴す。

(ハ)票莊　票莊は爲替を取扱ふを以て本業とするもので當地には從來錦生潤、大德玉、咸元會、功成玉等の票莊があつて往時は爲替取扱數も多く從つて其の業務も繁忙であつたが今や當地一般商人は直接取引關係深い錢舗の手を煩はすことや郵便局による者多く票莊の手を經るもの少なくなりし結果大德玉は遂に閉店し錦生潤、咸元會は奉天に移轉し功成玉だけが唯一軒殘つて居て上海、天津、芝罘方面の爲替取組をして居るだけである、今其爲替手數料を見るに一千兩に付上海へは十二吊三百文天津へは十吊五百文芝罘へは十一吊八百文位である、此の功成玉の如きは殆んど支那全省及び外國に迄も取引關係を有して居る大なる票莊で其の使用する處の送金票は滙票と呼び三聯單（三枚續きより成る）にして一は送單と云ひ支拂地への通知に供し一は票根と云ひ發行店に保留し他の一が卽ち滙票にして顧客に交付するものである。

(ニ)當舗　當舗とは卽ち質屋であつて錦州及び其附近の豪農豪商の出資經營に係り小商人及び細民唯一の金融機關である、今少しく質物の出入狀況を述べて見やう。

質は月利三分抵當物としては軍器彈藥等の危險物及び陶器、磁器、穀類其他不動產の外一切之を受け期限は五日以上三十日迄は一箇月として利を徴し二年にして流質する規定であるが實際は仍ほ二、三箇月の猶豫の恩典がある、質物出入時間は毎日午前六時頃より午後六時頃迄の間で夜間は一切取扱はない、其種類は衣類約六割位貴金屬品約四割位の割合である、蟲食ひ及び鼠食ひは辨償の責任がないが火難と盜難とは各其の責に任じて賠償する規定である。

然し當地當舗は已に商帖の部に於て述べたる通り商帖發行の權利を有し商業資金の貸付を以て業とし錢舗と共に當地金融界に於て最も重要視されて居る、帖子の發行に對して

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は一萬吊に付日歩三吊文月歩九十吊文を徴して居る。（商帖の部參照ありたし）

（ホ）銀市　銀市は城内昆盧庵構内に於て日々拂曉より開かれ日々の銀錢相場の決定及び銀爲替の賣買等をする、銀市の取引は總べて記帳に留まり現銀の受授は更に請求あるを俟ちて行はれる銀市に參加し得る者は商務會員たる者に限られ錢舗、當舗、問屋業者、雜穀商等が多い。

此の銀市は毎年舊十二月末日より翌年の舊正月十六日迄所謂正月休業日を除く外は一年を通じて日々行はれる、而して年末の各商家相互間の貸借尻は總べて翌年の舊二月一日の受渡の際に夫れ〴〵利子を定めて振替を行ふものである、從つて此間は一月十日と一月二十五日の兩日を除く外錢利を建てないのが普通である今左に大正四年九月十日の各貨幣の相場表を掲げて見やう。

大洋錢	七吊二百四十文（二元に付）
小洋錢	五吊九百三十文（二元に付）
洋錢票	五吊九百二十文（二元に付）
銅貨	一仙に付　制錢九箇

差帖	六吊四百文（一留に付）
錢利	五　吊　文（一萬吊文に付）

（ヘ）經紀　經紀とは貨幣現物取引の仲買人であつて日々錢舗と錢舗との間若くは錢舗と問屋との間を往復し各貨幣相場並に爲替相場を傳へ取引の有無を探聞し貨幣交換並に爲替取組の媒介を營むものである、日常の小額の貨幣交換は錢舗に就て之を行ふも少しく大口の交換は主に此の經紀の媒介に依て行はるゝもので特に爲替の如きは殆んど總て此の經紀の手を經て行はれて居る、經紀の仲買手數料は普通賣買雙方より支拂はるゝものであるが時としては賣手より支拂ひ或は買手より支拂ふ等其習慣一定して居ない近來賣手より一定の相場を示され其範圍内にて賣買をなす樣に委託さるゝ事がある、此の場合限定價格以上の利益があれば自然經紀の收入に歸すべきは勿論であるが別に歩合口錢を要求しないらしい今普通の場合の經紀手數料を掲げて見やう。

各貨幣交換仲買手數料	一千元に付	賣方より買方より	五吊文〉五吊文〉十吊文
爲替取扱仲買手數料	同	賣方より買方より	二元〉二元〉四元

（ト）爲替　從來當地の商人等は其の需要物資の大半の供給を營口に仰ぐを以て營口に對して

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

は常に其の代銀を支拂ふ地位換言すれば營口は債權者にして錦州は債務者の如き地位にたち又關裡(直隷省方面)に對しては穀物及び羊毛等の輸出が多いから其の方面から小銀貨の流入する事が多く從つて當地より營口に向け小銀貨の現送せらるゝことが多かつたが當地は前にも述べたる通り硬貨の輸出を禁止せられてからは自然爲替に依ることが多くなつた營口錦州間の爲替は當地の商人が營口で自家宛の逆爲替を振出し之を營口に於ける銀爐、票莊又は商店に交付し彼等をして當地の關係商人に送らしめ其受取りたる當地商人の提示を待つて錢舗の手を經て初めて支拂はれるのである、往時は當地營口間の爲替取引は殆んど無く從つて爲替相場の建つことなかつたが一昨年三、四月頃より小銀貨の送金爲替は漸次行はるゝ樣になつたのである、上海、天津、芝罘方面に對する爲替は多く票莊の手を經て取扱はれて居る。(票莊之部參照)

朝陽、赤峰方面の爲替取組は錢舗を中間に介し各商人直接決濟をして居るらしい其爲替相場は四時不定である。

奉天附近一帶に於ける日本人の農業

奉天警務署に於て調査せる邦人土地經營者は次の如し。

名稱	所在地	面積	經營者氏名
西宮農場	奉天附屬地及其附近	七百三十一町歩	西宮房次郎
勝弘農場	奉天附屬地	七十五町歩	勝弘貞次郎
井上農場	右同	十町歩	井上松太郎
清水農場	右同	七町四百歩	清水乙比古
義和農場	右同	三町七反歩	神島安次郎
下野農園	右同	一町七反歩	山田新吉
南場農場	蘇家屯附屬地	五町三反歩	北野謙治
滿期守備兵農場	文官屯	十二町五反歩	野崎秀太郎
右同	奉天附屬地	十四町三反歩	小林晴樹
右同	安奉線陳相屯附屬地	七町三反歩	大坪幾太郎
右同	安奉線陳相屯南方邊牛堡子	民地借入約三町	鮮人白鶴洙許浣
濱田農場	安奉線不橋子附屬地	四町九反	濱田末三郎

義生公司農場	奉天西關六十支里西公大堡子地	約百四十町歩	原口新吉
大江農場	奉天西關北一支里孤家子	約四十三町歩	大江惟慶
津久居農場	奉天西關の西十五支里	約五十一町歩	津久居平吉
小寺農場	京奉線馬三家子驛南八支里	約五十八町	小寺謙吉
柳原農場	奉天北陵	官地租借約二百町歩	柳原政雄

以上の外鮮人金礪商(民地租借三町六反)朴泰根(一町)河性三(八反)白樂厪(一町)等あり尙邦人にて支那人に金錢を貸付け之が抵當流として若干の土地を持てるものある由なるも詳なる數字、人名及び用途等を知るを得ず。

大正五年末(十二月)に於ける滿洲各地の市況

一、大　連

洋錢騰貴と舊正月の切迫は奥地農民をして賣急がしめ一方船腹の不足と相俟つて埠頭特產物の堆貨は三十三萬噸を超ゆるの新レコードを現はせり又米價の騰貴は內地豆粕の昂騰を來し從來銀高の爲その價格を制せられたる當地豆粕も漸次好況を呈し盛んに輸出を見るに至れり。

豆油は前月に比し稍々下向せるも輸出額漸增す。

次に輸入にては綿絲布の好況前月に讓らず但し年末講和說の影響を受け內地に於ては株界を始め、米穀、肥料、綿絲布盡く混亂に陷り當市場も自然多少の沈滯を見たるも差したる異變も無くして越年せり。

三品現物公定相場

	最高	最低	普通
大豆	三・四六〇	三・二九〇	三・三五〇見當

豆粕	一・〇六五	一・〇〇〇	一・〇五〇見當
豆油	一四・六〇〇	一三・五九〇	一四・〇〇〇同

二、旅順

年末の事とて贈答品其他諸商品の賣行稍々多く多少の活氣を呈したるものゝ如きも特に記すべきの事も無くして越年せり。

三、牛莊

先月末終航と共に河岸遽かに寂寞を極め當月に入りてよりは復一船を見ざるの有樣なりされど下旬俄然温度降り完全に結氷すると共に對岸との交通自由となり馬車豆の上市日に多く最少一日百五六十輛最大四百輛を算すと雖も未だ河豆(遼河に依る運送のもの)に比すべくも非ず其量一箇月を通じ約三千五六百石に過ぎず。

輸入品は綿絲布類の大連經由鐵道にて入り來るあれ共素より當座の需要にして一日出來高十件より多きも五十件を超ゑず唯輸入雜貨は年末の事とて相當活況を呈せり。

四、遼陽

當月は道路結氷し了りし爲め特産物の入市高益々增加し一時相場下落手合無かりしも間も無く値戻り、多額の取引有り豆油、豆粕先物又引續き取引多く新春二、三月頃迄の製品殆んど賣約濟の爲め益々好調なるに加へ此等代金全部先拂を受け金融緩和を來し綿絲布、諸雜貨賣行順調近年に無き盛況を呈せり。

大連向特産物は滿鐵貨車配給不足の爲め驛構内堆貨日々百車を數ふ要之當月の市場は極めて順況各商舗共相當の成績を收めたり但し特産物は相場好調と窮迫農民賣急ぎし爲め大部分出拂ひ明春市場に出づるものは殘部少數に過ぎざるべし。

金融狀況は本月交通銀行が少額の貸出をなせしに止まりたるも油房の賣約濟先物製品に對する代金を受けたる爲め意外に緩和せられ中以上の商舗間取引は圓滑に經過し得たり。

五、奉天

引續き小洋錢高は輸入に稀なる活況を呈せしめ又彼の兌換の利鞘は毎月多額を算し直接間

接に市場に及ぼす影響少なからず唯支那向雜貨は內地製產費高と支那側金融硬塞の爲め案外好況ならざりき。

翻つて輸出は洋錢高の爲め非常の不利益なるに拘らず支那銀行の回收貸出溢りの結果賣急ぐ者多く反つて昨年に比して盛んなるが如しされど斯の如きは經濟上順調に消化されたるものと云ふべからず。

斯く支那側金融逼迫は極度の緊張を保ち從來最も活動せし與業銀行の整理難は商況を益々不振ならしめ目下之が救濟策を考究せるものも有りと云ふ、錢業市場も自然不況を免れざりしも偶々媾和問題の報傳へらるゝや露貨に對する思惑熱を煽り一高一低取引盛んなるものゝ如し。

本月一日より實行の大洋元紙幣(圓銀を兌換本位とする紙幣)は唯小數官衙の俸給支拂、納稅のみに用ひられ商人は矢張り小洋を好み之が完全なる流通を見るは蓋し遼遠の事ならん

六、鐵嶺

當月に入り完全に凍結し當地穀物の出廻旺盛となり殊に掏鹿方面よりは普通七石積にて一日平均七百車を算し昨年に比すれば四、五割餘を增加せり市中在荷は月尾二十四萬五千石驛構內堆貨豆粕七萬八千餘枚あり、相場は月初め大豆八吊百文(六吊六百文一元替)高粱四吊八百文、豆油百五吊文を唱へしが漸落し中旬大豆七吊九百文、高粱四吊七百文となり月末には大豆七吊七百文、高粱四吊六百文、豆油百吊文を唱へたり。

開原に於ても初旬は日々一千輛中旬以後は一千五、六百輛(一萬二、三千石)市中在荷大豆二十六萬石、雜穀一萬六千餘石、豆粕約三萬枚其相場は月初め大豆斗建(開原一斗は鐵嶺升量一斗一升)八吊七百文なりしが十三日八吊百文に下押し十五日少しく引締り八吊二百五十文を稱へ以後は八吊三百五十文を最高とし八吊三百文にて越年せり。

斯く特產物出廻りは兩地共盛んにして一方中旬迄は內地米價好況に連れ肥料も活況を呈し手合も有りしが貨車並に船腹の不足と銀高の爲め氣配不振勝ちの折柄十三日講和の飛電あり て內地米價俄然暴落肥料又軟弱にて相場出合はず以來取引甚だ不活潑となり終んぬ。

更に輸入品にては綿絲布は期節柄大部分先物取引なるが是又講和飛電に相場動搖し小口以外に手合を見ず。

麥粉は引續き好況にて上海粉は目下禁輸出令の爲め來らず北滿粉の南下も極めて少なく自

然當地物の獨專に歸し日夜約定品の製造に追はれて新手合の餘裕無く講和の報も何等影響無かりき。

七、長　春

本月嚴寒の來ると共に特產物出廻り始め中旬以來一日約一萬石に上り其南送數も一日百車に及ぶ事有り、大豆粕は月半一時銀三圓二十九錢と下押せしも月中平均三圓三十五、六錢を保ちたるは一般金融上賣急ぎたるもの〻如く取引圓滑殷賑を極めたり但月末露貨の引込みにより東淸もの〻買付は多少手控へられたり。

輸入綿絲布は前月來依然振はず講和問題、露貨の亂高下さへ加はりて當用以外取引を見ず木材は引續き順調殊に四鄭線工事其他を見越して山元の買付は競爭の姿なるも東淸運輸現狀は當業者の苦痛とする所なり。

今月は貨車不足の爲め馬車輸送旺盛を極め其成績は案外良好なるが如し。

金融は前述各地と大差無く極めて逼迫を感じ官帖相場の如きは一箇月先物に對する月利一割二分の高利を示し其繁忙豫想外のものありたり。

官帖は月中最高十二吊七百五十文(十一日)最低十四吊五百八十文(月末)平均十三吊六百四十文を示し氣配尙軟弱なるもの〻如く本月最低相場を前月最高十吊五百八十文に比すれば四吊文の差ありて眞に恐るべし。

露貨は金對相場月初め百八十留のもの低落して十二日最低百九十二留に至りしも講和問題の爲め漸次上向き月末には最高百七十一留平均相場百八十三留を示したり、小洋錢は比較的高下少なく月初め最低百十六元九角、二十七日最高百十一元二角、平均百十三元六角にして前月平均に比し略一元方の騰貴なりき。

頭道溝取引所月中糧豆先物出來高二千百四十四車

八、安　東

當月の輸出入貿易は前月末以來海運の便無き爲め專ら汽車便に依れり、而して年末は各方面共順調にして綿絲布、砂糖、麥粉等の入荷は前月より賣行良く內地原價の暴騰も更に影響無く在荷拂底せり。

輸出品中豆粕、豆油も亦汽車便により其運賃關係は本邦著に於て大連に比し豆粕一枚に付

約二錢有利なりしを以て例年に比し取引高多し、豆油は主として神戸地方に、豆粕は本邦各地へ輸送せられたり、柞蠶絲は銀高以外に在荷拂底の爲め格外の高値を稱へ本邦向輸出は杜絶し又木材は製材原料の外大口輸出の商談更に無く米の北滿地方への輸出は小口ながら多少出荷せし模樣なり。

鴨綠江の結氷は今年は昨年より遲るゝこと四日にして當月二十一日より氷上交通を開始したり。

黑龍江省通信

大正六年一月十九日　於海倫　山田久太郎

冬期に於ける黑龍江省內の商工業乃至交通の實況を視察すべく引續き第三次の旅途に上り哈爾賓を振出しに、巴彥、綏化、慶城、鐵山包、上集廠等の各地を經て本日海倫に到著したところである。

一帶は一昨年の不作に引換へ昨年は頗る上作で、場所によつては、一昨年の三倍乃至四倍の收穫を得て居る地方も少なくない程で平均四、五割の增收を下らぬ樣である、人も知る如く北滿は金鑛のある地方も澤山にあるが、先づ全般を通ずると、農產物の外產物がないと云つてよい、從つて豐年であると購買力の增加となり、浮浪民の減少となり、何處も彼處も好人氣でよい事づくめである代り、不作であると其反對で、農民の蜂起やら馬賊の橫行やら、殺氣漲る世の中と變るのである、ところが昨年は今記した通りの豐年であつたので、到る所の農民擧つてニコ〳〵顏で、舊の正月に間もないところから、早くも新年用諸物品の買入に著手し、目出度い新しい年の來るのを指折り數へて待つて居ると云ふ有樣で

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

ある、これが爲め各地の大小市場何れも大した人氣で農民が蝟集し推すな〳〵の勢である。狀況斯の如しであるから、本年の我對滿貿易は、必すや好結果を見るであらうと思ふ、我と需供其他密接の關係ある北滿の豐作は、卽ち日本の豐作も同樣であるから、吾人も亦彼等と喜びを共にして可なりである。

本年に於ける此一帶の寒氣は頗る猛烈で零下三十二度內外と云ふところである、余輩が筆記用として携帶して來た二本の和製萬年筆の如きも、中のインクが氷結の結果、哀れや二本共軸部が縱橫に破裂し、見るも無慘の最後を遂げたと云ふ有樣、此一事に徵するも如何に其寒威が猛烈であるか想像さるゝであらう、目下の積雪は平均一尺五寸位であるが、低地其他三尺以上に達して居るところも少なくない、山野の樹木何れも時ならぬ櫻花を戴き快晴の日の中でも其姿勢を崩さぬ雄大な雪景は、內地の人達などの夢にも味ふことの出來ない趣があるが、辛い燒酒を買込んで來て雪見酒としやれて見ても、針の樣な風が襲ひ來て、直にアルコール分を奪ひ去つて行くので、此地帶の氣候に慣れ切つて居る我輩も、本年は少々閉口して居る。

序に一言して置くが萬年筆なども暖い日本の領土內に十分の顧客があればそれで滿足で、それ以上販路を世界的に擴張する野心がないとあるなら輙ち止むが、若しさうでなく、廣く宇內に販路を擴張しやうとの積りであるなら、如何なる嚴寒の地に於ても立派に使用に堪へ、今次余の携行し來つたもの〻如き果なき最後を遂げぬ樣、更に大に品質の上に改良を加へなくてはならぬと思ふ。

一帶に於ける官民の多くは吾人に對して厚意を持し、日沒突然に普通の民家に飛び込んでも泊めて呉れ、而して多少資產のある者などは、宿賃を渡しても固辭して受付けぬと云ふ有樣である、だが地方官の中には、農商工業に關する事項は一國の內政であるから、外人たる足下に其內容を語る譯に行かぬなどと、途方途轍もない挨拶をする連中のあるのは、兩國の通商發達上將又親善上利益上慨嘆の至りに堪へない、尙ほ往年卽ち四十二年頃先輩が此地方へ來た時などは、あれは朝鮮人であるかとか印度人であるかとの囁を耳にしたものださうなが今日では形勢一變一見直に日本人たることを知り、且つ少し大きい部落になると、大抵一名か二名位、覺束ながらも日本語を繰るもの〻あるのは、意外とするところである。

今次の旅行で珍しくも北滿の市街をなして居る地で、年少な女が派手な色合に花模樣など

のある、絹紗類の著物(常著)纏ふて居るもの(南滿にも此傾向がある)をちよい〳〵見受ける、支那服は從來男女用に別なく緞子とか繻子とか云ふ上等物を除く外、黑か淺黃の無地と定つて居て、何等の模樣もないのが常であつた、既に色合が二種に限つてる上に無地と來て居るから流行物だの流行後れだのと云ふことがなく、新しい物も古い物も等しく流行物で通つて居たのである、從つて我內地の樣にまだ手も通さぬものを時代後れだなどと云つて、箪笥の奥に押し込み、新流行の物を買入れるなんと云ふことは、斷じてなかつたのである、然るに上記せし如く一小部分の少女丈けではあるが、派手な色合や模樣の著物を纏ふ者の現れたのは、日本かぶれをするやうになつたのか、西洋化するに至つたのか、兎に角破天荒の一大變化で、今でこそ少數であるが、將來漸次一般女子社會に此風が蔓こり、果ては男子社會にまで之れが波及する象徵ではあるまいかと思ふ、若し此豫想の通り出現して來るものとすれば、我對滿貿易特に今日でも盛んに需用されて居る我綿布類の貿易が素敵な發展を來すだらうと考へられる、取らぬ狸の皮算に終るかも知れないが、緣起丈けでも餘り惡くない一變化である。

そこで我輩に一案がある、外でもないが先方が自發的に流行を追ふやうな柄を用ふるに至るを待たず、此方から誘引的にどし〳〵新柄の物を差し向けて、先樣の好奇心を挑發するのが卽ちそれである、邦人でも西洋品に接しない前には、誰も自發的に山高帽子のやうなものが冠りたいの被布のやうなものをはをつて見たいのと、思はなかつたであらうが、色目新しいものを面のあたり見せつけられて見ると、サー欲しくなつて堪らぬ、それがとうとう現時の樣な我服裝界を成すに至つたものだと思ふ、だから色でも柄でも形でも、先樣からお聲のかゝるのを待たず、此方の方からどん〳〵見せつける方が得策であらう。

はるびん近信

一、哈爾賓洋紙界

洋紙界はコヽ二、三箇月間は甚だ振はずさりとて友喰ひの競爭者なきことゝて强氣一方にて下落せるものなし新聞紙用ザラは一プードに付昨年秋は七留位の時もありしが今は十留となれり富士製紙の白富士に似たる少し薄手艶紙(舶來もの)十八留見當にあり兎に角輸送力の恢復を俟たざれば品動かず長春より馬車輸送に託すれば一プードに付一留以上の高運

賃を絞られ耐つたものにあらずなど落し居れり因に哈爾賓の煙草製造所製菓業者等の消費高は一年に五萬留内外に過ぎずと。

二、兒童用本入鞄

歐露にては兒童用本入鞄の需用あるやにて日本製の本鞄を多數買入れ度しとてペルムより一商人哈爾賓に來り居たるが所要の數調はずして日本に赴きたりと。

三、サツカリンの問合せ

相も變らずサツカリンの需用は旺盛にて露國商人よりの問合せ到來しつゝあり併し日本にても品切れの由にて大阪の藥店にも殆んど求むる能はざる狀態にあり却つて日本商人は九州、四國等の田舍の藥屋に案外持餘しものあるを獵り集めて哈爾賓に送り來りつゝあり目今の相場は一ポンドに付三十六七留見當なりと。

四、タオル動く

西比利の商人入來るありてタオルは僅か宛ながら動きつゝあり幅尺五(長五尺)物にて五留臺なりしに今は四留三、四十哥の邊にあり尺八(長五尺)物も七留より六留臺に下落せりとのことなり。

五、朝鮮産花蓆

朝鮮全羅道産の莞草花文蓆を近來露人が歡迎し數日前一鮮人は六百枚の花蓆を滿洲里に携へたるが一枚三留半にて一時間程の中に賣れ盡したりと。

六、玉葱三十萬留

玉葱は日本物の殆んど獨り舞臺にて之のみは戰後も有望なりといへり主として一柳洋行の手にて取扱はれ居れるが一箇年の輸入額は此方面全部を合すれば三十萬留以上に達する由なり之は先年支那人も試み日本人も之を栽培したるが何れも失敗に歸し此地方にては絶對に適當せずといへり。

七、綿絲布輸入禁止乎

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

哈爾賓總領事館十八日著電によれば露國は綿絲綿布の輸入を禁止したりとあり在留邦商の狼狽一方ならず右にして眞實ならば其打擊は甚大なるものあり元來當方面の綿絲布は支那人八分露人二分の割合にて一見大影響なきに似たれど近來軍隊方面にて兵士の襦袢に日本の綿布を用ひ出したるにぞ需用頓に增加し來り現に取引して現品輸送中のものも少なからず商人が狼狽するは無理からず併し日本人の所謂綿絲綿布が禁止せられたるものか否かは目下尙不明に屬す。

八、雜貨仕入の魂膽

西比利より雜貨仕入の客筋入り込めりトムスク市及びカインスク地方に住める露國人五名は靴皮、メリヤス、靴下、化粧品類等軍需用買入れに奔走しつゝあるが奢侈品禁輸實施迄に輸入せんとの魂膽を有するものゝ如し尙ほ何れも講和は斷じて成立せずと云ひ居れり。

九、雜貨僅に動く

西比利方面の客筋昨日來入込み沈滯の哈爾賓も僅かに活氣を呈しつゝあり夏物の仕入なるが松浦商會の取引せる處によれば東洋バナマ帽一打に付六留乃至八留もの賣行き、セルロイド婦人櫛は一グロスに付三十七、八留、薄手メリヤス靴下は十六留、手袋は六留乃至七留なり、靴紐は一重物二留六、七十哥、袋物五留より五留半の見當を辿りつゝありと。

十、羅紗は拂底か

露國サマラの商人より本日哈爾賓チウリン商會に軍服羅紗千五百著分至急に送れとの電報註文到來したるがチウリンにても貯蓄品拂底にて諸所に開合せ居たりと。

十一、極東の石炭は新時代に入らんとす

浦鹽に於ける日本炭は實に一噸三十二留(時價約我十七圓七十錢)に達したれば露國當局の注意を引き石炭に富める沿海州の石炭發掘を促進するの動機を作したるが如く現に同國政府經營の蘇城(スウチヤン)炭坑(從來成績不良)に著目するに至れり同炭坑は從來烏蘇里線のウコリナヤ驛より鐵道を敷設しありたるも更にナホードカ灣に達する運炭狹軌鐵道を敷設せんとする計畫ありと此計畫にして實現するに至らば市場に在りては日本炭と競爭するのみならず沿

海州地方に於ける船車並に地方燃料を保證し其開拓上利便少なからざるべしといふ殊に同炭は炭質の見地より日本炭との角逐甚だ困難ならず且つ昨大正五年十一月より沿海州にては外國炭の關税制定せられたれば極東の石炭問題は將に新時代に入らんと。

十二、唐津炭輸入計畫

哈爾賓は石炭拂底し薪材は騰貴して一立方サーゼンに付八十留の高値を稱へ正に燃料饑饉に會せんとす、されば三井洋行にては唐津炭を輸入せんとの目論見あり實現せば市民の幸ひなり。

經棚近信

大正六年一月十七日

在經棚　大神囑託報告

一、多倫軍隊悉く歸多す

既に前便を以て報告せし歸多の途當地に滯留せし多倫軍の引上は去る六日司令部の先發に引續き十日殿軍の出發を以て全部終了而して其の哨官の直話によれば本春解氷を期し再度蒙匪を追逐するの計畫なりと。

一、陰曆歳末にて市況活氣を呈す。

昨今各商賈は年末年始用商品を賑々敷店頭に陳列し近郷蒙漢の百姓連及市民が送迎準備の買物に東西往來するもの或は店員の忙はしく集金に驅け廻る等雜然として市況俄に活氣を呈せり。

一、近來の寒氣

一月五、六、七、八、九の數日間は室内に於てすら尚零度或は一、二度と云ふ寒氣にして特に客冬來より市民の凍死者二十餘名を出し日に增し激烈を極めし寒威も兩三日前より稍々衰退し室内にて十二日十度、十三、十四日十二度、十五、十六日卽ち本日十七、八度(十六日午後三時半室外零下二十度)を示し天候は漸く三寒四温の順に復せるを感ず。

一、喇嘛廟を訪ふ

昨日後街に經棚喇嘛廟を訪ふに民國三年蒙匪事件以前にありては喇嘛の員數三百有餘を數へたりしも同年凶暴比類なき支那兵の掠奪に遭ひ喇嘛は支離滅裂諸方に遁逃し現在シ

ーラ喇嘛コンチエタンビニマ以下五、六の喇嘛弊帽破衣凛冽の寒威に身を震はせ唯僅かに供養に招かれ讀經により得たる些少の金を以て朝夕燕麥麵を啜り憂心變々たるの狀見る物として傷心の種ならざるなく聞く言として斷腸の媒ならざるはなし尙旗內タンケエント廟、トーリイ廟、クリヨ廟、ミスン廟の四廟を有せしも全部同年の兵火にかゝり空しく廢廟に歸したりと。

赤峰近信

大正六年一月十七日

在赤峰　三原雇員

一、赤峰の金融と公議局

交通銀行兌換劵の下落は流通貨幣の大部を占むる當地に於ては甚影響特に著しく大正五年十月十五日商務會は大洋票一元の相場を三吊に下落せしめたるも現今市場相場は更に下落し二吊八百五十文となれるに反し大洋錢(圓銀)は彌々騰貴して公定相場一元三吊一百二十文なるも實際相場は三吊二百五十文(時に三吊三百文以上のことあり)に流通し銀紙の開き實に四百文(二十仙)に達するに至れり。

商務會相場三吊は赤峰市場のみの相場にして北方烏丹城、林西、經棚は少しも銀紙間の開きなければ大洋票は自然當地と取引關係密接なる北方市場に移り行きつゝあり。

而して是がため痛切に苦痛を感ずるは俸給の全部を兌換劵を以て支拂はるゝ兵士なり、且兵士は移動常なく其縣外に出づるに際しては必ず本街の帖子を現錢に換錢し行かざるべからず此に於て各錢舖は十月二十七日以來商務會內に公議局なるものを設け兵士並に外國人に限り小額の大洋票と市場帖子及び市場帖子と現錢との交換を開始せり、公議局は帖子發行の錢舖八家より成り一名宛出張し損失分擔の下に每日換錢しつゝあるが一日換錢高百吊以上時に千吊文に及ぶことあり。

二、赤峰の錢舖

前項の錢舖八家を示せば次の如し。

屋號	所在街	資本額	私帖發行高	財東	在籍	支配人	在籍
晋升豫	二道街	三〇,〇〇〇元	一〇〇,〇〇〇吊	朱錫芬	赤峰	龐玉春	山西

福德永	二道街	四〇、〇〇〇元	一〇〇、〇〇〇銀	趙鴻禧	建昌	梁廣志	山西
蔚興和	同	一五〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	曹靜齋	山西	喬玉秀	同
蔚興永	三道街	一五〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	曹靜齋	同	杜永	同
乾元亨	同	二〇〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	同	同	喬子英	天津
廣億永	同	五〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	王姓	饒陽	單石廣子安年	山西
三義亨	同	三〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	鮑姓	赤峰山西	栗永環	鄭蘭舫
官銀號	二道街	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	杜喜永	赤峰山西	喬玉秀	山西

其他帖子を發行せざる錢舖三あり。

屋號	所在街	資本額	財東在籍	支配人在籍
福泉達	二道街	六〇〇元	李少庚	赤峰李
寶成興	同	二〇〇、〇〇〇	郭徐	南橋頭馬子亮
善長久	三道街	一〇、〇〇〇	劉姓	赤峰王履中

奉天に於ける銀行設立計畫

不動産貸付を主なる營業科目とする官貸局は資本額洋銀五十萬元にて既に其四分の一の拂込を終りたる由なれば早晩開業の運びに至るであらう右は奉省財政廳より三十萬元を支出する筈なれば近き内に其資本は激增せらるべしといふ。

馮麟閣、吳俊陞、于沖漢等の發起せる滿蒙殖産銀行は資本額洋銀六百萬元目下遼陽、吉林各方面資産家に募株勸誘中であるが發起人に官遼の勢力家多き爲め應募者多く頗る好況の由なれば之れ亦四分の一拂込を以て近く開業せらるゝであらう。

李子鏡、張程春、閔昭學、王洪身等有力なる資産家の發起せる裕國實業銀行は資本額洋銀二百萬元已に發起人等に於て二十萬元を出資し其殘餘を向ふ六箇月間に募集して開業する由若し此期間に成立せざる時は財政部より其許可を取消さるゝを以て目下發起人等は必死運動中の有樣である。

一月中の滿洲通貨相場

（金百圓に對し）

旬別	露貨	官帖	銀（圓銀）	小洋

上旬 最高	上旬 最低	上旬 平均	中旬 最高	中旬 最低	中旬 平均	下旬 最高	下旬 最低	下旬 平均
一七三・五〇	一七〇・〇〇	一七五・七六	一七八・八五	一八一・八一	一七九・五〇	一八三・四八	一八八・六八	一八四・五九
一四六・二	一六〇・〇	一五二・六	一五三・三	一六六・〇	一五九・〇	一五八・七	一五八・七	一五八・七
九一・五八	九五・三三	九二・八二	九〇・二五	九二・〇八	九一・〇八	八五・〇三	九〇・五〇	八七・四五
九九・二〇	一〇一・五〇	一〇〇・四八	九九・二五	一〇三・九〇	一〇一・四四	九九・五〇	一〇一・六〇	一〇〇・一〇

備考　銀及小洋は大連相場、ルーブルは哈爾賓日本居留民團相場、宮帖は長春相場とす。下旬に於ける宮帖及ルーブル相場は二十六日頃迄のものなり。

大正六年二月十八日印刷
大正六年二月二十日發行

關東都督府民政部庶務課

印刷人　大連市東公園町十七號地　嶺田嘉三

印刷所　大連市東公園町十七號地　株式會社滿洲日日新聞社